

『それも何かの間違ひでせう、とくとお調べ願ひたい』

といふ。とまた誰か立上つて、

『一體、支那では、阿片を作らないといふのは、政府で調べてからの報告ですか。それとも法律で耕作を禁じたからですか』

『いや、私の政府では、委員を派遣して各省を調べ、どこにも植ゑてゐないといふ報告ですから、確かです』

『それは大へん氣に入つた報告ですが、監督官は何人出張しました』

『六人』

『六人では、あの國を何年かゝつたら廻れるでせう。承はれば二三月の出張だといふが、

何月にお調べになつたか』

『十一月北京を出て、各所を巡廻したさうです』

『私も阿片の事は多少調べてゐますが、十一月といへば、もう收穫のすんだ後である。その時

分ならどこへ行つても芥子の花はないでせう』

これで参つた。いかに巧みな外交官も、二度と嘘がつけなくなつた。一時は誤魔化しがきくかも知れないが、長くは續かない。悪いことは悪いと見做すのがほんたうである。

『俺のところでは阿片を止めたが、またやつて困つてゐます』

かういつて出れば、なるほど、と同情も湧く。けれどもわかりきつたことを白々しくいはれては全くウンザリする。一時凌ぎの場所では、お嬢さんお婆さんの喝采を受ければよいといふ外交、さういふ考へにフェヤプレーなどは望まれない。支那ばかりではない、日本でもさうである。嘘を塗りかくすベテンス式外交は、もう流行らなくなつた。

大戦前の獨逸にこんな話がある。獨逸の悪口をいふと、獨逸人のお氣に障る。或時も大いに觸つて迷惑したことがあつた。今の獨逸の話ではないが、十八年前に、交換教授として私が亞米利加へ行つたとき、ミネソタ大學で講義をした。その時、政治部長だつた何某プロフェツサーが、

「どうも日米關係を裂くものは、獨逸のレッテル・ファンドだ」

といふ。御承知の通りレッテルは大蛇或は蛇、ファンドは基金、即ち蛇の基金とでもいふかビスマークが始めたものださうで、極く性の悪い機密費、國と國との間を裂くために使ふ機密費である。大戦争が始まつた時も、墨西哥と日本の間に機密條約があつて、戦争に多忙な亞米利加を腹背から衝く、こんな條文だと條約文まで出たことがある。それは結局伯林から出たものであることがわかつて、ものにはならなかつたけれども、さういふものに使ふ金がレッテル・ファンド、甲と乙との間を裂かして、漁夫の利を得ようといふ目的である。今時はそんなことはあるまい。ジャストに正反對なやり方は、流行らなくなつたといふか、成功が覺束なくなつて來た。

嘘かほんたうか、新聞などによると、田中さんは滿洲でいろ／＼なことをやつた。もちろん田中さん自身ではあるまい。けれども田中さんの周圍の人々には、二十年以前の支那通が多いさうである。二昔も前の夢を見て、昔風の仕事をされては適はない。新しい支那などは知らな

い。實に國際的の慣習も歴史も傷けられるやうなことまでやつた。けれどもそんなちよつかいで成功するなどは、もう覺束なくなつて來た。何故か？ また元に還るやうだが、まあデモクラシイの賜であらう。イン・ジャスト、フェヤプレーをもつて對外政策の根本とするから、この國でも所謂デモクラテック・コントロール・オブ・デプロマシイなど、或は民間外交などいふ言葉が行はれて、英吉利などはこれに對する運動が相當盛んなものである。

人民がもつと外交に口のきけるやう、外務省の方針を定める時には、もつと廣く乗出さねばならぬといふやうな主張は、どこにでもあるやうである。これが果して有意義なものであるかないか、そんなことは知らない。けれどもこの趨勢から推して、今後ジャスト、フェヤプレー外交が、ますます勢力を得るであらうといふことはいへる。言葉を換へていへば、外交のビジネスは政府でやる。しかし大體の仕向け方は輿論がこれを指導して行く、といふことに、どの國でもなりつゝあるものと思ふ。それには國民が、常に海外の事情を心得てをらねばならない。知識を前提にしてかゝらなければ、政府を指導することも、何も出來ない。

明治維新の國是

私は過去の日本を顧みて、明治から今日に至る政治が、外國關係を無視して出來た政治とは思はれない。五箇條の御誓文を見ても、第四條、第五條に明記してある。知識を世界に求むるとは、もちろん海外の事情に精通することを含む。自國のことばかり知つても間に合はない。この意味で五箇條の悉くが、海外に關心を持つことである。

『廣く會議ヲ起シ萬機公論ニ決スヘシ』

これは日本だけでもやつてやれないことはない。けれども、それでは萬機公論の字が狭くなつてしまふ。この時分、或人は少數のお大名の集りをもつて公論と名づけた。或はお公家さん二十人くらゐで、天下の公論と稱することも出來た。廣く會議を起すといつても、廣いといふ字は狭くもとれる。解釋によつては、伸縮自由なものである。しかし何故この第一條によつて今日の議會が起つたかといへば、日本の歴史を見てゐたのでは、いつになつても議會など出來

さうもない。海外の歴史や事情を知つて、始めてお公家さん、お武士ばかりでは公論は出來なるといふので、だん／＼廣くなつて來た。

『上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ』

經綸といふ字が、第一わからない。誰も解釋してゐない。憲法の本などにも、經綸の意味をハッキリ説明した本は一つもない。書いた人が死んで誰もわからない。或は天の聲かも知れない。誰いふとなしに、經綸とは經濟に關係してゐるやうだといふ。けれども經濟ばかりではない。頗るボンヤリした言葉である。それだけに範圍が伸縮出來る。狭く日本式にすれば狭くなる。廣くとればいくらでも廣くとれる。

『官武一途庶民ニ至ルマテ各其ノ志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス』

これは實に東洋式で、どんなに廣くでもとれる。

『庶民ニ至ルマテ各ソノ志ヲ遂ケシメル』偉い言葉である。が、今日の就職難の時などは、とても應用の出來ない言葉でもある。

『舊來ノ陋習ヲ破リ』

これを日本式にばかり考へてをつては、何を標準として陋習の判断が出来るか。これこそ外國の知識なしには、判断の出来ないことである。天地の公道は天地の公道で、世界各國と交はるにも日本風だけでは出来ない。世界には世界共通の公道がある。これに基いてやるには、昔風の陋習は打破しなくてはならぬ。最後の、

『知識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基を振起スヘシ』は、前の第四條と相俟つて、實に世界を標準にせよといふ意が含まれてゐる。この精神に基いて明治の外交、明治の教育、明治の政治が行はれたのである。そしてそれが知らず識らず昭和の御代にも引續いて、政治上、社會上の物事を考へる時分には、外國といふ頭が抜けないのである。

國際心の養成

私はこの間も外國人に誇り顔でいつたのである。

『こんな小さな島に引込んでゐる吾々日本人ではあるけれども、外國の知識については、恐らく、どこの國民にも譲るまい』

亞米利加などは國が大きい。それだけにすべてのものは國中で自給自足が出来る。日本ではそれが出来ない。食物、着物みな他國と關係がなくては出来ない。それにお隣りは始終騒いでゐる。狂人の住家を隣りに持つやうなものである。いつ火をつけられるかわからない。始終海外のことに注意しなければならぬ。日々新聞を見てもわかる。日本の新聞ほど海外の事情を書くものはあるまい。ウ・ルソン夫人も、

『日本の新聞は妙な新聞だ。世界にこんな新聞はないだらう』

と言つた。第一頁は揃つて書物の廣告で埋つてゐる。これも外國に較べて珍しい。統計を取つたら面白いだらうが、吾々が先づ興味をもつて見るのは、こんどは誰が繩にかゝるだらうといふことである。軍備縮少も興味深く見るが、一般は矢張り自分に近いところに興味を持つ。ところが一番近いものは五頁くらゐのところにあつて、外國の問題は眞先に掲げてある。恐ら

く亞米利加の新聞だらうが、英吉利の新聞だらうが、そんなことはあるまい。よほど以前時事新報が讀者に葉書をやつて、あなたは私の新聞のどこに一番興味を持たれるかと問合せた。その時の答への多数が外國通信、外國の事情であつたといふ。全く他に類がない。つまり日本の知識階級といふものは、いかに毎日海外に眼を放つてゐるか、それこそ横眼で始終見てゐる。

こゝに日本人の、後日大をなす素質が隠されてゐると思ふ。

或人は、外國に興味を持つと、自國を忘れるといふが、人間の心は井戸の釣瓶のやうに、一方上れば一方下ると限らない。心理学を知らない言葉である。外國の事を知る中には、自國がその種に、或は根になつてゐる。日本を抜きにして、果して世界の形勢を知ることが出来るかどうか。圓いサークルの輪郭を歩くに、中心なしに歩けやうか。輪郭なり、大勢を見るといふのは、一つの中心があるからである。

かくの如くに、日本人が始終外に心を用ひてゐるのは、五箇條の御誓文、即ち明治御維新の國是に中心をおくためである。しかもこの國是の言葉は、書いた人さへも意味がわからぬ

といふやうに、天が人をして書かして、天皇これを是なりとせられたのである。實に歴史の一大奇蹟だらうと思ふ。専門家がかうしようとして出来たものではない。天が直接日本人の使命を示した。その使命によつて吾々が動き、その使命が今だん／＼充實しつゝある。しかもその使命の大部分を占めてゐるのは、外國との關係である。年々歳々、その必要を吾々は感ずるのである。僅か七十年前は、外國の話をして首を斬られた。今はどうか。國際的會合が日本に開かれる時代になつた。毛唐が何だといふ偏見の世の中は去つた。外國に對する政策は、常にフエヤプリーの態度とジャステスをもつてかゝらなければならぬ。

と同時に、日本人はプロバガンダが下手だ。下手なのは賞めた話ではない。けれども上手すぎるよりはよい。或國の如きは、プロバガンダだけで國を持たうとする。獅子に石を投げると獅子は投げた人に喰ひつく。犬に石を投げると、ワンといつて石に喰ひつく。とかく外交問題にはさういふがある。問題が湧き出たら、問題に喰ひつくよりも、問題を出した相手にかゝらなければならぬ。この問題に喰ひつくものは専門家、或は學者で、齒も立たないものを嚙つ

たり、ひねつたりする。悪いことではないけれども、それではまだ足りない。

石を投げたものを相手にする心持、それには偏見、にくみ、そねみ、うらみの氣分があつてはならない。フェアプレー、ジャステス、國際心を備へてかゝらなければ、成功するものではない。その練習を、吾々國民は明治の初からやつてゐるのである。もう抜け出してもよい時分であるが、まだ卒業してゐない。吾々は今後一層その方面に努力する必要があると思ふ。

武士道と商人道

學者と實業家の提携

かつて私は、近く希臘と日本の間に、商業的、或は文化的事業について連鎖になる機關を拵へたい、即ち日希協會を造りたいといふので、その相談にあづかつた。話をきくと、日本と希臘の關係は、今まであまり密接でなかつた。これからは直航する船も年に八回くらゐは都合出来る。日本の生産物を希臘に販賣する見込も、大いにありさうである。向ふから日本へ來るものは少い。先づ來るとすれば、今のところ希臘の古代文化より外にはない。二千年前の文化及び思想、藝術、それらはまだ日本へ持つて來る價值が十分ある。さういふわけで、一方は商取引の便利と擴張のため、一方は文化の交換、——これは交換といふよりも、むしろ希臘文化の輸入といった方が適切であらう——それを求めて吾々の參考材料にしたい、といふので、

實業家や學者などが主になつて、日希協會をつくりたいといふ専らの相談であつた。

一體私は、昔の希臘が大すきである。暇があれば、希臘の書物に浸つてゐたい。近頃出てゐる英吉利の小説などよりは、むしろ希臘のソフォクリスの劇なり、ユリフィリス或はアリストートルを好む。學問の参考にする時にはアリストートル、頭の工合のよい時にはプラトローといふやうに、哲學者或は文豪の書を読むことを、最大の楽しみとしてゐる。現に希臘のクラシックスの書物だけは、別に木棚を設けて、そこに奉安つてゐる。それほど私は古代の希臘を慕はしく思つてゐる。そんな關係上、私も相談に呼ばれたのであらう。その席で私はかういつた。

『大へん結構な企ではあるが、この協會がうまく行くだらうか』

と心配したものである。商人と學者と一緒にやるのである。馬と牛を並べて、同じ車に著けようといふわけである。うまく車が動くだらうか。もつとも實業家といふものは錢を出し、學者といふものは錢を使ふものであるから、その釣合はよい。けれども心持はまつたくかけはなれた二つである。よろこんで金を出してくれるだらうか、といふ私の言葉に對して、發起者

の或人は、

『その心配は多分ありますまい、そこらに浮動してゐるやうな實業家ならわからないが、日本の實業家でも、大學くらゐ出たものは、とにかく、ホームー、プラトロー、ソクラテスはどんな人かぐらゐ知つてゐる。その思想もまた日本にどのくらゐ傳はつてゐるか知つてゐる。だからそのために、僅かの金を惜しむやうなことはあるまい』といふ話。

『それを聞いて安心しました、私もよろこんでお仲間入りをいたしませう』
と、いつたわけである。

武士の商人根性

私が今、述べようとしてゐる問題は『武士道と商人道』といふことについてである。今の話もこの問題に因んで思ひ起したのである。けだし、學者と商人は、その權衡において、利害において、歩調を異にするはいふまでもない。けれども、この兩者の間に、共通な點もなくては

ならない。必ず相似た點がある。この共通點が少くなることは、甚だ歎かましいことである。一體日本では、専門學に重きを置きすぎる風がある。何でも専門であればよい、といふ考へを抱く人が非常に多い。専門以外にものを知つては、専門の方の權威が薄れると思ふのだらう。中には己の専門そのものをさへよく知らないで、専門以外の悉くを知らないといふことによつて、辛うじて専門を認めさせやうと努める。

『私は經濟の専門だから、美術のことは知らない』

甚しきは探幽、雪舟をも知らない。それで専門を立てやうとするが、さういふ人に限つて専門もよく知らぬものである。人間の頭は専門に出來てゐる頭でない。すべてを理解するやうに造られてゐる。その中の或る一つについて、心が集注して専門になるのである。常識のわからない人は、専門學も十分にはわからないはずである。ところが、吾々は、とかく専門に惱まされる。

昔の武士にも、かういふところはあつた。武士は食はねど高楊枝、錢のことなどは一向無頓

著なのが、大きな見得であつた。けれども、内心はなか／＼綿密な胸算用をしてゐたものらしい。御維新の少し前頃には、武士の株の賣買といふことが、盛んに行はれたものである。現に私の祖父は南部藩の臣で、政治向のことから家老と喧嘩して追放された。今の國事犯に當るやうな事件かとも思ふが、そのため流罪になつた。流罪といつても遠島ではない。青森縣の先の方で、冬の寒い頃であつたが、長く住み慣れた土地を立去つた。武士はつまらぬものだ、家老と意見が違へば、一日の中にこんな非道い目にあふ。破廉耻罪ならとにかく、意見が違ふといつて、こんな亂暴をされては堪らぬとこぼしたものである。その後東京に出て、材木屋などをしてをつた時、旗本の株で、賣物があるが買はないかと、勧められたことがある。けれども武士にはこり／＼してゐる。旗本になればまた御老中、御大老などの機嫌をとらねばならない。意見が違へば、こんどは流罪ではすまない、首まで斬られるかも知れない。そこで御免を蒙つたわけである。

當時、武士が身分を賣つたからといつて、今日勳章を賣つたほど騒がれることもない。武士

であるとはいひながら、すでに格式さへも賣買の對象物になつてをつた。なか／＼もつて『食はねど高楊枝』など、すましてはゐられない。言葉を換へていふと、武士は廉耻を知つてゐる。或は武士は國を護り、民を治むるをもつて本分とするとはいひながら、商人のやうな根性もないではなかつた。いつの時代でも、人間生活と經濟は、切離せない。彼等がもらふ俸給は、すべて何石かの米である。米は人間がいくら食つたところが、年に五石十石食へるものではない。しかも武士と名がつけば、極く少いものでも五石七石もらふ。少しよい格式ならば三百石、五百石、千石以上ももらつてゐた。随つて食つた餘りは賣らなければならぬ。そこに商人の心が生れるのは當然であらう。武士の階級だとして、慾氣のないわけはない。商人の階級と全然別のコンパートメントに入れることは出来ない。武士が専門だから、商人のことは少しも知らぬといふのは表向きで、内々には共通の點がたくさんあつた。

かういふ話をするについては、参考書も何もいらぬ。私の親が寮に見せてくれたことである。それは私の祖父が私の父親を育てる時分、新開地の測量や、水を計つたりする學問をさせ

やうとした。けれどもさういふ學問は、武家の間にはない。第一算盤を教へない。伴に算盤を教へて頭を綿密にさせ、後日測量でも出来るものに仕立てたいといふ心持ではあるが、學校がないし、また武士では教へる力のある人もなかつた。自分の故郷である盛岡では、どうしても望みが遂げられさうもないので、仕方なく仙臺へ出した。或吳服屋の丁稚に住み込ませて、そこで初めて算盤を習つたといふやうな次第である。これで武士と商人との二つの階級が、いかに整然と分れてをつたかゞ窺はれるのであるが、この區別は表向である。表向はどこまでもその通りであるが、内輪に入るとなかく共通の點が多かつた。

どういふところが共通だつたかといふと、商人が一つの職業なら武士も一つの職業である。職業は違つてゐるけれども、人間は職業ばかりで生きられない。即ち人間的感情の上に、多分の共通點を持つことは當然である。忠臣蔵の芝居を見ると、『天野屋義兵衛は男でござる』といつて見得を切るところがある。『俺は商人だ』とはいはない。『男だ』といふ。武士もその通りである。武士といふ言葉は『男でござる』といふ意味を含むことはもちろんである。して見ると

「男である」點においては、商人も武士も同じである。まして人間である點において、両者が多分に共通點を持つてをつたことは、論ずるまでもない。

武士道とは何か

今、靜に考へて見ると、世が世智辛くなつたからでもあらうが、近頃のやうに、専門々々と叫ばれることはなかつた。かういふ考へによると、商人は根性の底から商人で、人間ではない。武士も生れながら武士で人間ではない。こゝに相容れざるものが創造される。この影響を、學生などが眞面に受容れると、僕は將來工業者になるのだから、道徳などはどうでもよいといふ心持にもなる。現に私の知つてゐる人で、今は工學博士大學教授の要職にゐる或人が、若い時分、私は冶金學が専門だから他のことは一切構はん、道徳だの宗教などはあつてもなくてもよい、人間にならなくても、技術を覚えればよいといつて、よろこんで機械になつたといふことである。専門を重んずると、そこまで行かなければ徹底しない。

私は武士道といふものについて、三十年ばかり前、少し書いて見たことがある。その頃武士道といふ言葉は、あまり世の中で使はなかつた。全然ないわけではなかつたが、使はれてゐなかつた。英吉利の日本研究者チエンバレーンを始め、その他日本の事物に詳しい人々は、自分がかつて日本に長くゐたが、武士道といふ言葉は聞いたことがない、昔の日本にもそんなことはないといつてゐる。もつとも明治十年前後の話である。また末松子爵の如きは、かつて日露戦争の頃、倫敦に駐在されてゐて、頻に武士道を説いた。ところが、あなたの國には、武士道といふ言葉は昔なかつたさうではないか、といはれて、末松さんが非常に面喰ひ、その出處を探したけれどもない。武士といふ二字はあつても、武士道の三字はない。弓矢とる身などの文字はあるが、武士道はない。そこで遂に、この字は私が好い加減に拵へたものだらうと、笑ひ話にいはれたこともある。ところが先日、日日新聞の中安といふ人が、古い本を探してゐる中に、この字が見つかつた。何でも二三ヶ所に武士道の字がある、と知らせてくれた。それで私は、自分が創造した名譽を失ふと同時に、新しい字を拵へたといふ罪も免れたわけである。し

かし普通には行はれてゐなかつた言葉であるやうである。

ところで、武士道とはどんなものかといへば、要素はたくさんあらうが、要するに、その根本は耻を知る、廉耻を重んずるといふことではないかと思ふ。英語でいつたならばディスオナー、なるほど武士道といへば、先づ君に忠、親に孝、仁義禮智信など考へられるが、數へ来れば、まだく項目はたくさんあつて、仁義禮智信だけでは足りさうもない。けれども煎じ詰めたところは、耻を知ることであらうと思ふ。武士にして君に不忠を働くは耻、親に不孝をするは耻、己に顧みて耻かしからざる行をするといふことさへ決まれば、自ら君に對すれば忠親に對すれば孝、兄に對すれば敬といふやうに、その道が備はつて来るものであらうと思ふ。この點において、昔の商人は知らず、吾々が今日稱する商人道といふものは、等しくこの道理の上に立たなければならぬものだと思ふ。昔は、商人なら耻をかいてもよいと思つてゐた。耻をかいても得をとれ、士農工商といつて、一番人間の下積におかれてゐたのである。下におかれれば、ついさういふ氣にもなるであらう。

西洋の諺に、

『彼を泥棒と呼べ、然らば、彼は必ず泥棒をするやうになる』

といふ言葉がある。誰でもいふ、誰かを泥棒と呼べ、さうすればきつと、それは盗みをするやうになつて来る。或は泥棒々々と世間がいふと、何だか自分もさうではないかといふ氣になる。そこで何か盗まなくてはすまない氣にもなるであらう。それと同じやうに、商人は卑しいものだ、狡いものだ、嘘をついて自分の利益を圖るが、他人の迷惑は構はない。耻知らずだと始終いはれる。どうせ私は商人だ、狡く立廻つても、うんと儲けてやらうといふ心持になるのは、當然である。先日私の友人が、電車の中で、恐ろしい事件を見て來たと話した。友人が電車に乗つてゐると、法被を着た職人風の男が車掌と争つてゐる。何事かと思ふと、職人が一度使つた切符をもう一度使はうとして、車掌に發見された。その時の職人の言草が振つてゐる。『大臣さへ人の錢を取つたといふではないか。俺のやうな貧乏人が、電車賃を誤魔化したつて何が悪い』

と食つてかゝつてゐたといふ。

この話をするのは外でもない。とかく無教育な下層社會のものは、耻を知らないと始終いはれてゐるから、時に電車の中で、そんなことをしても構はない。身分のある役人さへ、人の錢を取るのである。電車の切符一枚くらゐ誤魔化したんではまだ足りないくらゐに思つてゐる。つまり自分のレビュテーションにギヴアップしない。無教育なものは耻知らずだ、人を欺いたりするものだといふ、何かの標準がある。その標準にまで行かない。もつとしなければ合はないと思ふのは、當り前であるかも知れない。職人に限らず、吾々だつてさうである。輿論といふものは恐ろしいものだと思ふ。

支那の商人道

かういふやうなわけで、商人といふものは人を欺くものだといふ一つの原則が、昔の日本にはあつたのである。随つて武士階級とは、その理想が全然違ふ。一方は身を捨てゝも耻をかゝ

ないやうに努める。一方は耻をかいても得をとらねば損だといふ。極端から極端へ、右と左へ岐れ去つて、商人道と武士道とは永遠に相容れざるものゝやうに思はれた。けれども人の生きる道に、そんな大きな距離はあるものではない。支那へ行つたことのある方は御承知であらうが、支那では、大概の商店には、佛壇のやうなものが備へてあつて、香を焚いたり、花を捧げたりしてゐる。日本でも田舎へ行くと、佛壇ではないが、それと思はれるものがある。招き猫がそれである。矢張り香を焚いたり、お花を上げたりしてゐる。支那の商人の家に安置してゐるのは、無論佛像ではない。髻をもちやく／＼生やして、具足を着けた嚴めしい人形である。聞けば、これが關羽の像だといふ。ちよつと吾々にはわからない。

關羽といへば、日本の加藤清正に當るやうな、武勇の人といふ以外に思ひ當ることはない。商人が朝夕をがむ人には、不似合なやうだ。何故、支那人が關羽を尊ぶのか。關羽は商人の出でもない。金儲けが上手だつたといふ話も聞かない。どういふわけだと尋ねたところ、關羽といふ人は、義に固い人だといふ。

『商人は義を重んじなくてはならない。義を軽んじてはよい商人になれない』

といふので支那では一般に商人の守り神として關羽を祭るといふ。なるほど、えらいものだ、或人が日本は武士の國、支那は商人の國だといつたが、さすがに違つたところがあると感心した。さうなつて來ると、支那では、商人を輕蔑しない。商人を耻知らずとも思はない。むしろ義に強いものだといふ。即ち西洋の諺にある如く、

『彼を紳士と呼べ、然らば、彼は必ず紳士の舉動をする』

これと同じやうに、みんな商人を義に強い階級だと讃へるならば、商人も自らその氣になつて來るであらう。よく外國人が、日本の商人は信用出來ない、支那人の方がまだ多少よいといふ。もつとも近頃は國が亂れてゐて、昔ほどよくはないが、二十年前頃までは、世界中が支那の商人を尊敬してゐたものである。その尊敬の理由は何か。必ずしも商業の道に詳しいとか、算盤が上手だといふためではない。即ち商人としての技術を讃へるものではなく、人間として義を重んずるところに、商人の尊き所以があつたのである。

人格が職業を壓倒する

さて義を重んじ、耻を知る點において、武士も商人も、共通に心がくべきことはもちろんであるが、これについて福澤先生は、

『武士の心がけをもつて、實業につく人間を養成したい』

と口癖のやうにいはれたさうである。このコンピネーションの出來ないわけではない。以前和魂唐才といふ言葉が、よく使はれた。近頃ならば和魂洋才とでもいふか、西洋の學問はしてをつも、心持は日本人たれ。それと同じく商賣はしてをつも、心持は紳士であれ。武士でなければならぬ。行ふところ耻を知り、信義の道はあくまでふみはずしてはならないといふのである。

昔は英吉利などでも、商人を紳士と呼ばなかつた。ゼントルメンとは、普通にいふスクワイアーといふ意味で、田舎の大地主でなければ使はなかつた。商人が自らゼントルメンと稱する

に至つたのは、十八世紀の初頃からだと思ふ。その時には大ぶん問題になつたやうである。或大きな商人が、自ら何の某ゼントルメンと呼んで、それが裁判事件になつた。結局お咎めはなかつたやうだが、元來紳士といふのは、日本では士格のものが使ふ言葉で、平民は使ふことが出来ない。それが今のやうなことがあつてから、だん／＼と使はれはじめて、遂に職業上の紳士非紳士は區別がなくなつたのである。

この頃は學者であらうが、商人であらうが、百姓であらうが社會の階級などにはよらない。人間として耻を知り、義を重んずるものならば、館屋でもおでん屋でも、一向差支ないといふやうに、ゼントルメンといふ文字に、一種の精神的意味を含めてゐる。御承知の通りゼントルメンといふ形容詞の如きは、從來は、きちんとした服装に、高帽子でも被つた、風采のあがつた人を指したものである。ところが、近頃はゼントルメンといふ綴り方に變化を加へて、ゼントルメンにレイをつけない。ゼントルにマンレイを切離してゐる。ゼントルは優和一方マンレイには男性的な強いところがある。即ち柔いところと硬いところ、硬柔よろしき

を得た性格をゼントルメンといふべきだ、とまでいはれてゐる。ゼントルメンの資格が、階級や財産の有無によつてつくられるものでないことは、ハッキリ決つてゐる。ここに武士道と商人道との共通點がある。商人であつてもゼントルメンであり得る。武士はもちろんゼントルメンであるべきである。

さてこの共通點がだん／＼擴まつて、商人も學問が進み、政治を論じ、美術などにも一隻眼を備へるやうになると、士と異なる點がおひ／＼に少なくなつて、遂にはその差異が、あるかなきかに縮まつて来る。英吉利などはすでにその點まで達してゐる。吾々が外部の風采から見たのでは、商人だか何だか、サツパリわからない。高帽子を被つてモーニングを着てゐる。服装はとにかく、喋つてゐることを聞けば、文學の話も一通りする。美術の話、哲學の話も、一通りは出来るのである。もののいひ方が丁寧で、文字の選び方でも、決して無學なものには出来ない。洵に紳士的な態度である。

ハテナあの人は何だらうか、荒物屋の主人だといふ。立派な紳士である。荒物屋といふ専門

の部分ぶぶんが小さくなつて、紳士しんしの部分ぶぶんが擴まる。専門せんもんを尊ぶ人ならば、決してこんなわけにはゆかない。十の中じゅうのちゅう九分くぶんまでは荒物屋あらかものやで、人間趣味にんげんしゆみは僅わずかに一分いっぶんしか残のこらない。武士ぶしならば武術ぶじゆつが専門せんもんである。弓ゆみを射い、槍やりをしごき、馬うまに乗のる。それが九分くぶん通り、人間にんげんとしてのよいところは、タツタ一分いっぶんといふやうなものであつた。それがだん／＼變化へんかして、共通きょうつうな部分ぶぶんが殖殖えるに隨したがひ、専門せんもんの部分ぶぶんが縮ちぢまつて來た。即ち人間にんげんらしさ、ゼントルマンレイの範圍はんいが擴大くわだいされて、人格じんかくが職業しごきを壓倒あつたして來たのである。人間にんげんが職業しごきに壓伏あつたされてはならない。職業しごきの中に在あつて職業しごきを脱だけるところに、人間にんげんとしての價値かちが認めためられるのだと思おもふ。

都會病

都會と田舎

都會とくわいの問題もんだいは、近來きんらいになつて到いたるところで研究けんきゆうされてゐる。もちろん、日本にっぽんよりは外國がいこくにおいて、早くから問題もんだいになつた事柄ことづからである。これは改めていふまでもない。現今げんこんの所謂いはず都會問題とくわいもんだいといふものは、資本主義しほんしゆぎと極めて關係かへいが深い。マルクス主義しゆぎの人は、一方いほうに資本制度しほんせいどを倒たさなければ、都會病とくわいびやうは癒なるまいといふ議論ぎろんをするであらう。とにかく今日の都會とくわいが、工業こうぎやうと關係かへいの近いこと、その工業こうぎやうは資本主義しほんしゆぎの結果けつこくであることぐらゐは、經濟書けいぎしよの二三頁ぺいをめくつた人ひとなら誰でも知しつてゐることである。であるから十九世紀じゅうきゅうせいの中頃なかつらからは、ほとんどの國くにでも、この病氣びやうきに罹かりかけてゐるのである。

然しからば、往昔わかしは都會病とくわいびやうがなかつたかといへば、羅馬ろまなどには矢張り都會病とくわいびやうがあつたやうであ

る。原因は、矢張り資本主義と關係が近かつたやうである。随つてこの病の原因と治療法は、一般の經濟と切つても切れない關係に結ばれてゐるから、容易に治することは出来ない。根治は難かしい。しかし、これがために受くる苦しみは、よほど人間の力で癒し得る餘地があるやうである。現に大都會は身體に悪いところだ、とは昔からいはれてゐるが、今日はそんなにひどいものではない。

かつて倫敦、パリ、紐育、費府、市俄古、或は伯林、維納等、どこでも大きな都會といへば、もう不治の病氣に罹つてゐるものと見られた。例へば子供が早く死ぬとか、不衛生から來る病氣が多いとか、いろ／＼なことがあつた。日本だつてさうである。西洋のことなど何も聞かないやうな時代において、

『江戸に三代をれば、人間は子を産まなくなる——』

といはれた。夫も三代、女房も三代ゐたならば、それで家が斷絶するものだといふ。英吉利などで昔からいつてゐた言葉である。英吉利の貴族は好んで田舎に住む。都會に住んでゐる貴

族の如きは、或意味においては犠牲を拂つても、即ち審美趣味を犠牲にしても、妻君は田舎から娶るといふやうな風習の下に、家を繼いでゐたものである。

そんな風で、都會のものは、新鮮な食物が食へない。空氣が悪い。随つて衛生上悪いといふわけであるが、水だけは、西洋には古くから水道の設備があつたから、大したことはなかつた。かやうに、古くから都會は悪いものだ、健康に悪いところだと見做されてゐる。殊に都會で行はれる勞働は、さういふ悪い空氣の下で、悪い食物を食つて働くから、勞働者などは片つ端から病氣になる。故に強兵の基は専ら田舎に望むのである。有名な彼のモルトケ將軍が、獨逸の軍制の基礎を定める時に、田舎に重きをおいて、大都會のます／＼大きくなることに反對した理由は、主としてその邊にあつた。國の兵力が弱るといふことである。その以前にヘンリー四世の宰相であつたサリーなどいふ人も、國を強くするには、農業を奨励しなければならぬといふので、あの人の重農制の如きは、經濟の方から割出されたのでなく、強兵の方から割出した議論であつた。

かういふやうなわけで、昔から身體に悪いとはいつてゐたが、或程度までは、人間の力でこの弊害を除くことが出来る。といふのは外でもない。空気を幾分でもよくするには、町で焚く石炭は、下等なものを使用してはいけないとか、煙突を何十だけにしろとか、製造工業の種類によつては、空気を汚すやうな業務は断然都會では許さぬとか、いろ／＼な對策はある。下水でも、都會と名がつく以上は、必ず下水を設けるとか、とにかく人工的の制裁を置いて、弊害の幾分を矯正することが出来るやうになつた。いつか私が見たポンチに、田舎のものと、都會のものとの、生長の様子の比較が出てゐた。田舎の子供は丸々と肥つてゐる。都會の子供はひよろ／＼と瘦せてゐる。しかしこれが六十の歳に達すると、都會の人はデブブリ肥つて來るが、田舎の爺さんは腰が曲つてよろ／＼して、著しい違ひを見せてゐる。これは事實である。だから、或程度までは、確に都會の生活がよくなつたといへる。食物の如きもさうである。

或時、私は千葉縣の松戸に行つた。園藝學校のあるところであの邊に野菜の供給場がある。話を聞くと、土地の人達は、新鮮なよいものは食へない。よいものはすべて東京へ出す。少し

不味さうな傷んだものだけ残つてゐる。そんなら、自分で作つてゐる人はどうかときくと、矢張りその通り、珍しいものや、高く賣れさうだと思はれるものは、みんな東京へ出す。不味いものだけを自分達が食べる。苺ならば青いところを、腹を下すと思つても食べる。これは全国的にさうである。よいものは賣つて金にしたいからである。さうかといつて、都會の人必ずしも新鮮なものばかり食ふとは限らない。けれども大體、交通機關の發展に伴つて、よくなつて來たことは事實である。東京の水道の如きも、昔は水がなかつたから、コレラも蔓つたが、今は水道のためにそれもなくなつた。東京の如きはこれから下水が大問題であらう。

何故人は都會に集るか

都會が健康に悪いといふ議論は、かうしてだん／＼薄れてゆく。けれどもこれは程度問題である。一切の動力が電化し、多くの工業が電化したならばとにかく、日本の如く、安い石炭を焚いてゐる以上は、西洋のやうに見事な成績を擧げるわけにはゆかない。上野の松の樹が枯れ

て来る。櫻もだんく弱つて来る。墨田川の櫻も見る影がなくなつたといふ。江戸川の櫻なども、一時はだいぶん榮えたものであるが、近頃は花が少い。とにかく、上野の松や櫻が枯れるのは、自然の結果ではない。上野停車場の煙が枯らすのだといはれてゐる。西洋に行けば、上野停車場位のものはいくつもある。倫敦にも紐育にも伯林にもあるが、停車場の傍には、立派に樹が榮えてゐる。どうして日本ばかり悪いのかといふと、石炭が悪いといふことになる。下等な毒瓦斯を含んだ石炭が使はれるから、それで木が枯れるといふはなしを聞いてゐる。植物を害するものならば、きつと、人間をも害してゐるに違ひないと思ふ。もつとも私は、植物に害あるものは、すべて人間に害あり、植物に益あるものは、必ず人間によいとはいはない。しかし石炭の及ぼす害の如きは、確に動植物に共通のものであらうと思ふ。

何故、こんなに人が都會へ集るかといふと、その九分通りの原因は、キャピタリズムの関係である。但し日本には例外がある。日本では、大都會が人工的につくられたやうなこともある。しかし西洋の都會は、自然的に出來上つたものである。といふのは經濟上の理由から、自

然に出來た。自然といふのは必ずしもナチュラルの意味ではない。日本の都會が人工的だつたといふのは、國家の力によつて、人爲的に膨脹させた風があるからである。西洋のそれも、間接には人爲的といへるかもしれない、いづれは人間のやつたことであるから……。けれども他の意味における人爲的であつて、直接獎勵したのではない。經濟的作用によつて、自然々々に集つたものである。放任主義でやつてゐても、經濟その他の理由からだんく大きくなつたのが、西洋の多くの都會である。

或人が都會を分けて、グロースタットと、グロースセスタットと、二つに別けてゐるのは面白い。グロースタットといふのは、ほんたうは二つの言葉がある。グロースは大きいと譯し、シタットは都會といふ。これを一つに縮めてグロースタットといふ。何と譯したらよいか。メトロポリスとでも譯せば譯せるかもしれないが、日本でいへば都である。政治上の關係、位の高いといふ關係でグロースタット、政權の中心地、文化の中心地といふところである。

日本で都といふのは、お宮のあるところである。お宮は必ずしも神社佛閣を意味するわけで

はない。即ち主権者のをらるゝところ、國の君主のをらるゝところをいふ。グローセスタットは、日本の歴史では奈良朝まではなかつた。なぜならば天子さまが代々都を遷された時代である。彼方此方にお在になつた時代には、スタットは出來てゐない。奈良朝になつて、はじめて都會が一定した。しかしながら、あれは經濟上自然に人が集つて輻湊したのではない。都が出來てから、人工的にお寺が出來たりして、何も彼も集中してしまつた。だからあれはグローセスタットである。グローセスタットは、自然に大きくなつた都會である。地理的に、或は商業的に、自然に人の輻湊するところである。奈良といふ都は、人工的に出來上つた都である。自然に人の集るやうな地形とも思はれない。

都會はどこに出来るか

コールといふ獨逸人が、今から七十年ばかり前に、すこぶる面白い本を書いた。その本はロシエルなどにはせるとスード・サイエンスで、似而非學問だといふ。あゝいふ問題を、學

術的に研究することは出来ない。それを學術的に見せるのは、世を誤るものだと極端にわるくいつてゐるが、ロシエルのやうな學者が、力瘤を入れて憤つてゐるところをみると、よほど念の入つた研究であつたことが想像出来る。とにかく、コールの書物といふものはすこぶる面白い。それは物理學的に大都會の起原を論じたものである。大きな町はどういふところになるだらうといふことを、ただ理窟一遍から論じたものである。一口にいへば、四角な國がある、圓い國がある、三角な國、細長い國がある。かうして、大體國土の部類を四つに分けて、四角な國、圓い國では、どこに大都會が出来るかといふことを研究したもので、よほど巧みに説明が出來てゐる。

例へば、西班牙の如きは、地圖を見ると、四角な國である。あゝいふ國では、どこに都が起るだらうか。西班牙ともどこも指定して考へず、机の上で四角な國について考へると、彼の議論では、どうしても眞中に都會が出来るといふことになる。こんどは四角な國を見る。例へば西班牙の都はどこにあるか。マドリッドである。マドリッドは國の中程にある。それ見たこ

とかといつたや、り方である。しからば、細長い國ではどういふところに都が出来るか。彼の曰く、自然に委せておけば、隅の四箇所に相當大きな町が出来る。そんな國はどこにあるかと思ふと、日本でいへば臺灣のやうな地形の國である。なるほど、臺灣にはさういふところがある。今こそ人工が加はつたから、だいぶん違つたけれども、一方に臺南、花蓮港といふやうに相當な都會がある。瓜哇のやうな所にも、四つの中心地が出来てゐる。

私も長らく北海道にやつて、新開地の開拓に従事したために、新しく土地を開墾すれば、どの邊に人間が一番集るだらう。不毛の地を開くのであるから、いくぶん見當をつけなければならぬまい。例へば川がある。その川の曲つてゐる外側に、大きな町が出来るか、内側に出来るものか、そんなことを研究したこともある。ロッシェルが非常にわるくいつたけれども吾々にはいくぶん参考になつた。北海道の新開地を経営するにしても、多分この邊に町が出来てあらう。この邊には都會の區劃を取つておかう。學校もこの近所に造つておかう。郵便局もこの邊におかう、などいふ豫定をする場合に、私はコールの本を読んで、大いに得たことがある。

旭川市などの選定は、實はこの書物が大いに與つて力があつた。今日では旭川といふ町は、北海道の大都會になつてゐる。

こんなわけで、グロースタットはいつも出来るか、グロースタットの方は、單に經濟上の理由だとか、資本主義の作用ばかりではない。地形だとか、その他の事も大いに關係があるのである。故に、單に都會病はキャピタリズムの結果だといひ切ることは、大ぶん無理があるやうに思ふ。さういふ議論は、どうもマルキシズムの誤りではないかと思つてゐる。

假にグロースタットを政治的都會といふ。グロースタットは假に經濟的或は商業的都會といひたい。經濟的といふのを、商業的とはあまり狭いではないか、經濟的といふのは、商業ばかりではないといふ議論もあらうが、町については、商業が農業に對して九分通り勢力を占めてゐるから、商業といつても無理はなからう。現に、都會と田舎といふ定義を定めるにも、いろ／＼學者は苦しんでゐるやうである。つまり、日本でいふ都と田舎、都とは今もいふ通り宮のあるところ、田舎とは、田の中といふやうな話がある。文字では田舎、舎は寄宿舎の舎に限

らない、個人の家である。つまり田の中の家である。私共の故郷盛岡などで、極く普通に使ふおたやとは田の中にある家、つまり田舎で、別荘地みたいなものである。即ち田舎と書いてゐなかと讀ませたのは、田の中にぼつく建てゝある家といふ意味らしい。

そこで或學者の如きは、これは一二の學者に限らないが、都會に對して、農業を營まない場所といふやうな定義を下してゐるからである。しかし、これは日本には當て嵌らない。日本には、東京市にも田があるかもしれない。京都には確にあつたと思ふ。その他新潟、長野、甲府等、地方の都會は大きな地面をとつてゐるだけに、みんな田舎を含んでゐる。これは西洋には珍らしい。シイテイの中に田圃があるなどは、實に稀である。故に今の學者の定義は、日本には當らない。けれども、これだけのことはいへる。都會とは農業に重きをおかぬ……と。そんなら何をしてゐるか、工業か、商業である。東京の如きは實によい例である。恐らく世界に都會多しと雖も、人六人について小商人が一人あり、家數六戸あればその中五戸は商家だといふ、こんなところは世界にあるまい。以前ネービーといふアメリカ人が東京へ來て、一番それ

に驚いた。どうしてこんなに店が多いのだらう。それも夜十二時頃まで店を開いてゐる。客の姿を見たことがないといふ店もたくさんある。どうしてやつてゆけるだらう、と不思議に思ふからのである。かういふやうなわけで、都會といへば農業をしないところ、農業に重きをおかないところ、といふ意味にとつてよさうである。

都會への進出は農業の衰退を招くか

どこの國においても、經濟が進むと、分配の方面に人數が殖える。そして生産の方法が進めば進むほど、労働を用ふることが少くなつて來る。經濟學者は、近年田舎から人が出て行くことを憂へて、これがために農業が衰退するとかいつてゐるが、一方から考へると、これは農業の進歩といはざるを得ないのである。農業を努力だけでやつてゐる時分ならば、一人減つても耕地面積が一段歩なり、二段歩減るはずであるが、農業に機械を用ふるやうになつて來れば、今まで五人の手を要したのも、一人で出来る。後の四人は外へ出る。

アメリカの農務省で、詳しく調べたものによると、例へば麥一石生産するに、五十年前には肥料がいくらくであつたが、近頃は殖えて行くばかりである。それなら労働はいくらか、つたかといへば、その減つたことは驚くべきものがある。極く大雑駁にいふと、五十年前麥一石作るについて、人間が十人、馬二匹の労働を必要としたものが、今日は人間の労働は一人くらゐ、或は一人にもなつてゐまい。馬の労働もその通りである。その代り機械の力はうんと入つてゐる。つまり農業技術、殊に耕作或は收穫に、機械をたくさん使ふやうになつて來れば、労働が要らなくなる。その結果、田舎に人力が餘つて都會へやつて來るわけである。故に却つて農業の進歩を示すものだといつてもよいのである。随つて田舎人の都會進出をもつて、農業の衰退なりとする論は昔のことである。今はその反對の現象と見做すことが出来るのである。それからもう一つは、昔は、何でも田舎にゐると身體によい。都會は黴菌の巢だといはれてゐたが、近頃は必ずしもさうでない。よほど、よくなつた。昔は都會へ來ると、神樂を見るとか、寄席を聴くとか、芝居を見るとか、とにかく道樂機關に限られてゐたが、近頃はそんなものばかりでない。運動競技の盛んなことは、驚くべきものがある。活動寫眞もよい。カッフェなども、もう少ししたつたらいくらか改良出来るかもしれない。西洋ではだん／＼改良されつゝある。日本はまだ、そこまで行かないが、もう少し経つたらよくなるだらうと思ふ。

更に西洋では、最近田舎を都會化しようといふので、例へばホーソグロールステイングといふことを、戸毎にやるやうにした。或は教會など日曜日に行くと、以前は酒を飲むな、煙草を喫ふな、と窮屈なことばかりいつてゐたが、近頃氣の利いた若い説教家などは、みな、社會學をやるやうになつた。このやうに、都會のよい方面を、田舎にまで伸ばさうといふ傾向は確にある。二三十年前までは、アメリカの田舎には氣狂が非常に多かつた。殊に婦人に多かつた。これは著しい社會的といふか、衛生的現象であつた。アメリカの田舎では、所謂獨逸語のホーフシステムで、何百エーカーといふ大きな農場の眞中に家を建て、機械作業で農業をやる。三人か四人の人間が、一家族をなして住んでゐる。男は朝から晩まで外へ出て働くが、アメリカの女は野仕事をしない。よいかわるいか知らないが、それが習慣である。日本人が加州

で排斥される一大理由は、女が野に出て働くからだといはれてゐる。とにかく、女が野に出て働くことを、すこぶる野蠻の如く思つてゐる。

とにかく家につて仕事をする。しかもお隣りが遠いために、一日ものをいはずに暮すのが、普通である。これは女にとつて確に辛いことであらう。二日もものをいはずにゐるといふことは、心理状態を異常に刺激するのである。そんな關係で氣狂が多い。お喋りしないからといへば、妙に聞えるが、要するに人と離れて氣を轉ずることがないからである。かういふ統計からも考へて、文化的の設備は相當に骨を折つてゐるが、亞米利加でさへまだ行届かないのである。他の國ではなほさらである。

都會はマーケットか

かくの如くにして、どの國でも、都會はますます大きくなつて行くやうである。この先この傾向は、どうなつて行くだらう？ 現在の事實を基として、いづれの方に進んで行くかを

考へると、ここに二つの傾向があるやうに思はれる。即ち同じ力の下に、一はますます大きくなり、一はいよ／＼小さくなるやうに見えるのである。

例へば専ら蒸氣を用ひてゐた時代は、人口も都會に集中したが、電氣を用ひるやうになつてから、だん／＼分離するやうな傾向があるといふ人もある。工業の如き、石炭を動力としてやつてゐた時分には、大きくやらなければならぬが、電氣でやれば、大工業と比較出来る仕事を、小さいスケールで、銘々の家庭でも營むことが出来る、といふやうな傾向がないでもない。その方面からいへば、何も大都會に集らないでも、工業に差支へることはないといふ人もあるが、一方運搬の關係を考へると、ますます大きくなるかとも考へられる。彼のウエルのアンテシペーションといふ書物によると、都會はマーケットである。生産物の集散地で、ものを賣つたり、買つたり、交換するところである。随つて他所から人の集つて來るところであるといつてゐる。

昔は、人が荷物を脊負つて、自ら品物を賣りに行つた。大體荷物を脊負つて、一日にどれく

らゐりけるだらうか。行くばかりではない、商賣をして歸るとすると、先づ二里半か三里であらう。三里ぐらゐが精々である。こゝで一パイ飲んで、煙草を喫つて、それから商賣を始める。商賣が片づくと、また一パイ飲んで、よい機嫌で家へ歸つて來るのである。三里ぐらゐがよいところであらう。さうすると三里四方のところに、ちよつとした部落が出来るわけである。三里四方の眞中に出来る。かやうにしてまたこれと三里離れて、矢張り他の部落が出来る。即ちちよつとしたマーケットは三里に三里、六里隔つたところ出来る。

私が臺灣にをつた時、この關係を調べて見た。あすこは日本のやうに、城下だとか何とかいふやうな、グロースタットはなく、純粹の經濟的關係で動いてゐる場所である。ところが面白いやうに、市場といふものが、規則立つた一定の里程に散在するのを見た。日本でも、四日市とか、八日市などいふところを調べて見たら、同じやうなことがわかるだらうと思ふ。西洋でも大體その通りである。山や谷のある所は地形の關係で多少違ふが、大體さういふプリンシプルはある。つまり足で歩く時には、六里毎に部落が出来る。馬で運ぶやうになると、その倍く

らゐりになるであらう。百姓は三里の部落まで來るがもう一つ先の方が商賣に有利だと思へば、そこを素通りして行く。この反對の部落にも同じ理窟が行はれる。そこで小さな部落は衰へて大きな部落が出来る。即ち六里に六里、十二里づつ隔つたところに、大きな部落が出来る。汽車でも出来るならば、十二里ぐらゐでなく、三十里を隔つたところにマーケットが出来たらう。すると三十里に三十里、六十里隔つたところに大きなマーケットが出来ると。かやうな論法で行くならば、交通機關が発達するに随つて、距離の隔りが大きくなり、距離が擴がれば擴がるほど、そこに集る數が多くなつて、その間の部落が衰へるのである。

ウエルスにいはせると、やがては世界中に素もない都會が、ポツリ／＼と出來、後は見すばらしいものになるであらう。例へば支那では漢口、亞米利加では紐約、市俄古、桑港の三つ位、随つて日本から漢口へちよつと行つて來よう、あすこまで行かなければ碌なものはない、といふやうなことになるかもしれない。今のところでは、國境や交通の關係で、日本のマーケットは漢口ではないが、日本の中でも東京なり、大阪なり、福岡なり、仙臺なり、百里ぐ

らるづつ隔つて大きな都會が出来、後は寂しい小さな、部落になつてしまふかとも思はれるのである。

都會病の恐るべきは寧ろ精神的

果してさうなるかどうか、私どもの頭ではわからないが、とにかく、かやうな傾向がいくぶんあるといふことだけは、確なことである。若しそのやうな傾向が、確にあるものならば、人間が多勢集つたといふだけで、果してそこでは文化が進んでゆくものだらうか。

衛生とか保健の設備は、或はよくなるかもしれない。空氣の如きも、これを淨める設備が出来ないとは限らない。小さいながらオキシデンターなどいふものもある。あれを大きくする工風もあらう。空中の窒素を採つて肥料に使ふ世の中である。酸素が減つて身體に悪いとなれば、酸素なり炭素なり、足りないものを補ふ途は、さう困難せずに見えらるであらう。物質的に、或は肉體の健康については、今まで都會がよくなかつたといふ心配は、だん／＼減つて

来るであらう。今日でも、病院や醫者の數は、非常に多い。醫學博士などは毎日何人となく製造されてゐる。それから考へても、吾々がよし病氣に罹つても、都會の方が安全だといふことになる。即ち形而下、肉體の方面から考へると、大都會の病氣——都會病といふものは、だん／＼恐ろしくなくなるかも知れない。

けれども、もつと恐ろしい都會病は、むしろ精神的の方面ではなからうかと思ふ。過激な危険思想を唱へることなどは、すでに都會病の一つの現れである。モップ・サイコロジなども、確に都會病の一つである。かの千八百四十八年、歐羅巴の各國が、革命のために騒いだ。それはほとんど全部都會で騒いでゐる。大きな都會ほど、騒ぎも大きかつた。パリ、柏林、倫敦、維納、羅馬等がそれである。とにかく、大都會の人の病には、彌次馬病といふものがある。所謂モップ病である。形而下の病ではない。精神的、心理的の病である。現に警察の調べによると不良少年があらゆる方面に散在してゐる。もちろんこの中には結核病などの人もたくさんあらう。けれども大部分は、或意味の精神的病者である。この方の弊を救ふ途は、まだ／＼日本

では足りない。保健の方面、水道、下水その他の方面は、おひく改善されてゐるが、精神的
方面の設備は、甚だ振はないのである。

吾々が都會病について、最も注意を拂はなければならないのは、矢張りその方面ではあるま
いかと思ふ。健康方面についてならば、時々田舎へ歸つて新鮮な空気を吸ふ。これはたゞに肉
體の健康のみをいふのではない。ウエルス氏のモダン・ユートピアにも書いてある通り、世の
指導者たるものの教育は、須く一歩先へ出てゐなければならぬ。それには雑多な世の中か
ら退いて、着替も持たず、食ふだけの食糧を持つて、山へ引込め。六週間、人間と言葉を交は
すな。人間は六週間ぐらゐ話をしなくても氣狂ひになることはない。寂しかつたら鳥を相手に
語り、夜は星を相手に歌ふがよい。つまり黙禱の生活を六週間山の中でやるのである。

ちやうど、戦前の獨逸に、この運動がいくらかあつた。近頃はますます盛んになつたやうで
ある。カラーをつけない褌衣を着て、ルックサックを背負ひ、杖を持つて出かける。食物はソ
ーセイヂ、日本なら鹽引がよからう。一週間か二週間分のパンを持つて、山のあちこち、どこ

といふことなく歩き廻り、自然界と直面する。所謂ネーチュアのリアリティーに接して見る。
これはたゞに肉體上の健康ばかりではない。彼等の目的とするところは、むしろ、かやうにし
て靈的の健康を恢復しようといふのである。

誰でも經驗する通り、私のやうな老人でも、雲雀の囀りなどを聞く時は、必ず札幌時代の、
アイディアリズムの燃えてゐた時代を聯想する。雲雀の高く飛翔するところなどを見ると、地
上のものが何だ？ といふやうな心持になる。蟬の音を聞いてもその通り、あの聲はあまり音
樂的ではないが、何だか昔を思ひ出す。妙なもので自然に接する印象といふものは、いつにな
つても頗る深い。何となく心持がのびやかになつて、をかした感情などは起らないのである。
そこである。その心持に入ることこそ、都會病を治癒する確に一つの方法であらうと思ふの
である。

英語及び英文學の價值

英語の實用と經濟方面

私が英語を好きになつた原因にいろいろある。始めて私が東京に來たのは明治四年で、その頃日本の學問は、殆んど頓つてしまつた時分である。論語や孟子も、讀むものは少なかつた。まして我が國語などは、顧みるものも稀であつた。神道が政府の保護の下に活躍し、獎勵されてをつたにも拘らず、國語といふものは、甚だしく振はなかつた。板垣退助といふ人が、國會開設の趣意書を書くに當つて、英語で書いたといふくらゐの時である。洵に今日から見れば、思ひもよらぬことばかりであつた。それほど英語の流行つた時代である。

私は、初め築地に開かれた或外國人の學校に行き、そこでABCといふものを習つた。何しろ、當時私は岩手縣の盛岡から出たばかりで、すぐに外國人に習つたのであるから、もちろん

言葉は通じない。けれども言葉のわからない點からいふと、東京の人と話をしてもわからなかつたのである。むしろ、英語で英吉利人に話す方がわかりよかつたくらゐのものである。

現に、私が國から出て來た時分には、日本語で『ち』と『つ』の區別が出来なかつた。いけどいはれても『つ』『ち』といふ音が出ない。また『し』と『す』の音も頗る難物で、『し』を『す』とばかりいふ。東北では、往昔からこの區別をしなかつたらしい。現今、汽車に乗つてもさうだ。仙臺から盛岡の方面に行かれた方は御存知であらう。『おすし』などいふものはない。『おす』『おす』といふ。文字を書いてもその通り、吾々が子供の時にいろはを習つてすと、しの區別をする時は、

『長い方のすか、盗んだ方のすか』

といふ。何度訂されても『し』といふ發音が出来なかつた。それが外國人に就くと、CHIが『ち』、TSUが『つ』とすぐ覺えた。洵に造作なく覺えた。日本人から何度いはれてもわからなかつたことが、外國人から教はつて、すぐ覺える。これは何とも不思議でならない。

さういふやうに、日本語さへ碌にわからない時分に、外國人について學び、少し英語といふものがわかりかけて來た。今の高等學校の前身である東京英語學校へ入つた頃には、何から何まで英語でやつた。數學でも、地理でも、歴史でも、みんな英語でやつたものである。それがために、英語の本を読むのは、大へんやさしい。近頃はさうでもないが、二十代の頃には、英語の本を読む方が、日本の本を読むより、遙にやさしいくらいであつた。今から考へれば、一得一失で、すむぶん無駄なこともあつたが、基礎的學問のすべてを英語でやつたためか、日本のことを考へたり見たりする時にも、いくらか客觀的に見ることが出来るやうになつた。例へば我國の國體なり、特徴なりを見るにつけても、たゞ盲滅法に有難いと感激することはない。有難かるべき理由が備はつて有難い。よく岡目八目といふが、じつと見て、どういふわけでこれが尊いのであるか、どういふわけでこれに對しては、吾々が全力を注いで努めなければならぬものか、それについて、やゝ合理的な態度を持つことが出来るやうになつたのは、このおかげだと思ふ。

一體、英語といふものは、海に便利な性質を持つてゐる。どういふところが便利かといふと先づ商業的の言葉として、これほど重寶なものはない。メレデースのルシールといふ詩の中に各國の言葉の比較を論じたところがある。それによると、英語は商人の言葉である。故に通商貿易の行はれるところには、英語が最も擴がる、といふ。殊に、獨逸が戰爭に失敗してからは所謂イムペリアルイズム、軍閥的の帝國主義が勢を失つて、他國に及ぼす勢力といふものは、武力でなく、エコノミツク・ベネレーションである。即ちそれによつて、或程度までイムペリアルイズムの目的を達するといふ時勢になつた。

今日においては、まず商業的に、實用の多い英語が、盛んに各國に擴がるやうになつたので、歐羅巴においても、露西亞の西波蘭、ラトヴィヤ、エストニヤといふやうな、所謂中央歐羅巴では、從來第二の副語として佛蘭西語を教へてをつたのが、近頃は中等學校でも英語を教へ、それをもつて佛蘭西語に代へる、といふやうな勢になつて來た。これは何故かといふと、昔のやうに貴族だとか、或は中産階級以上の人達が、外交または學藝等によつて世に跋扈

らうといふのではなく、實力本位、しかも經濟的實力をもつて、優劣を争ふ時代になつたからそれに便利ならしむるには、佛蘭西語は不適當だといふので、近頃は英語が専ら用ひられるやうになつたのである。歐羅巴の北方、即ちスカンヂナビヤは、昔から英語を第一外國語として用ひてをつたから、これは同じであるが、とにかく中央歐羅巴及び東部歐羅巴において、英語の盛んになつたことは、實に驚くべきものである。

日本においても、從來、英語を第一外國語として採用し、盛んに用ひてゐる。法律などには刑法民法等において、獨逸及び佛蘭西の様式が用ひられてゐるが、商業方面にいたつては、英語が最も盛んに行はれてゐるため、今日の日本の商法が、今日の日本の商業の習慣に合致しない、少からず符合しないところがあつて困つてゐる、といふことを、私はさる法律の大家から聞いたことがある。それは何故かといふと、法律は大體獨逸式であるけれども、實際商業の取引は保險であれ、船舶であれ、その組織が、すべて英吉利式に出来てゐるから、どうも今日行はれる日本の法律では、悉く商業の習慣に合致しない、といはれてゐる。その一つを見ても

いかに英吉利の言葉が經濟方面に必要であるか、マルクス主義をやる人は別として、一般的に實際の經濟生活の上で、英語が必要缺くべからざるものになつたことは、明かである。

外交上用ひられた動機

かつて羅馬は、三度世界を征服したといふ。第一は軍隊をもつて征服した。第二には宗教をもつて、即ちローマン・カソリック・チャーチをもつて、第三は言語をもつて、即ちラテン語をもつて、世界の人心を統御したといはれてゐる。英吉利の場合は、統御といふ字は當るまい。けれども、實際を見ると、英吉利及び亞米利加などのアングロサクソン族は、一には商業、一には言語をもつて、漸次世界を風靡しつゝある状態にある。英語の流行るのは、單り日本ばかりではない。支那にも大流行である。所謂ビジョン・イングリッシュ、人によつてはビジョン・イングリッシュといふ。

ビジョン・イングリッシュとは、鳩の英語といふのであつて、支那人は發音がよく出来ないか

ら、鳩が物をいつてゐるやうに聞える。それでビジョン・イングリッシュといふ。日本人はLの發音が出来ない。すべてRである。支那人はRをみなLにしてしまふ。しかし支那人の外國語は、日本人より堪能で、到底比較にならぬほど勝れてゐる。けれども今いつたやうな癖があるので、支那人の發音は鳩のやうだ、そこでビジョンといふのだといふが、さうではない。ビジョンである。

ビジョンとはビジネスである。文學用ではないが、商業取引上に必要な言葉といふのでビジネス、それをもちつてビジョン・イングリッシュといふのである。それが圖らずビジョン・イングリッシュの名がついて、英語系統の一種の新しい言葉になつたものと思ふ。現にビジョン・イングリッシュの文學といふやうな、滑稽染みた文學が、支那には行はれてゐるからである。ロングフェローの歌、テニソンの詩、學校の子供達でもよく心得てゐる有名な詩を、ビジョン・イングリッシュに書いたものなどが、盛んに讀まれ、歌はれてゐるところを見ても、ビジョン・イングリッシュのリテラチュアといふものが、一つ出来かゝつてゐることがわかる。ことほど左様

に英語が行はれてゐる。そこで英語の擴がる一つの理由は、商業、實用といふところにあるのは勿論であるが、まだその外にも理由があるらしい。

更にまた近頃になつてから、この範圍が一步擴がり、たゞに商業ばかりでなく、従來佛蘭西語が占有してをつた外交の方面においても、英語が使はれるやうになつて來た。といふのは、一體、佛蘭西語といふものは、割合新しい言葉である。佛蘭西語が今日の如く發達したのは、主として十八世紀、デカルトだのパスカルだのといふ數學者、哲學者の手によつて出來たものである。民間の童謡などから、漸次發達したといふのでなく、數學者とか哲學者といふ學者によつて、所謂感情の方面でない、智的方面の學者の手によつて發達した關係から、言葉が甚だ精密である。細かいことでも、區別が整然としてゐる。そこへもつて來て、有名なアカデミーで字引を拵へた。かういふ字は佛蘭西の文學で使つてもよい、これ以外の字はバベリアンの言葉である。所謂野蠻語であるといふやうに、區別してあるから、佛蘭西の言葉は實に綺麗で、明瞭である。さういふ關係上、ひよつとした感情を日本の歌などに使はうとすると、あまりに

明瞭で、濁らすわけに行かない。日本の歌には、考へ方で何方にも取れる言葉がたくさんあるが、佛蘭西語ではなかくさうは行かない。その代り國際上の談判などにはもつて来いである。何事にもピシリと止めを刺すことが出来る。イン・ザ・ネーム・オブ・何とかといへば、外のことには意味はない。何方にも意味がとれるなどいふことはない。だから永い間、佛蘭西語が外交上の用語として、特殊な力を持つてをつた。

ところが十年前の巴里の平和會議において、ウキルソン、ロイドジョージ、クレマンソーなどを主なる人として、伊太利からオランダ、日本から西園寺さんなどいふ人が集つた。しかし主なるものは三人で、後は多勢寄つたけれども、権力の上では二流乃至三流であつた。或は人物才能においては、この三人に譲らぬ人もたくさんあつたかも知れないが、位置からいふとアメリカからは大統領、英吉利のロイドジョージも、時の總理大臣といふ格で來てゐる。クレマンソーも同じである。外國では主として外務大臣が來た。日本からは西園寺元老で、大臣以上の人が出かけた。けれども前記の三人が主な役者で、大概のことはこの三人で決めた。話を

しても、この三人が寄ると、外の人は耳を傾けて聞く方の側に立つたものである。

その時の會議には、從來と違つて、英語も佛蘭西語と同じ資格で用ひられるやうになつた。その前までは、かういふ國際的會合の時には、佛蘭西語を本位としたものであるが、巴里の平和會議では、英語も同一に見られた。英語でいへばすぐ佛蘭西語で譯し、佛蘭西語でいへばすぐ英語に譯すといふやうになつてゐた。しかし激論になると、譯など待つてゐないで、三人の一騎打である。一騎打になると、通譯など抜きにしてやるから、何度となく英語が出る。といふのは、ウキルソンといふ人は學者であつたけれども、佛蘭西語が達者でない。讀むことは出来るが、自由に喋ることは怪しい。

私は學生時代に、二年間ウキルソンと同級であつた。年は私より六つ上の人であつたが、二年同じ級で講義を聞いてゐた。それで大概學歴も知つてゐるつもりである。佛蘭西語は讀めるが喋れない。人のいふことは一通りわかつても、自分では話せない。ロイドジョージにおいて讀むことすら怪しい。クレマンソーといふ人は、佛蘭西人ではあるけれども、二十何年亞米

利加に流浪してゐた人である。一體、佛蘭西人は外國の言葉を使はぬものであるが、クレマンソーだけは英語であらうが、佛蘭西語であらうが、自國語と同じである。だから三人が英語で喋る。即ちこの時から英語の位置が、少し範圍を擴めた。議論でなく事實、ファクトとして、英語が外交上に重きをなすやうになつた。

事實と眞理の相違

餘談に亘るが、ファクトとトルースといふこととは、似てゐて違ふものである。ファクトといふのは事實、トルースといふのは眞理である。日本語でほんたうといふ言葉は、その何れにも使はれる。

『君、時計を持つてゐるか』

『持つてるよ』

『ほんたうか』

このほんたうかといふ言葉は、眞理かといふ意味ではない。事實かといふことである。『ほんたうだよ』といふのは事實のことをも、眞理の意味にも用ひる。かういふことはほんたうのことだ……といふならば、それは眞理だといふことになる。例へば、宗教家が神は存在するといふ。これは事實とはいへない。けれども眞理である。日本語でいふと、これは矢張りほんたうである。即ち日本のほんたうといふことは、眞理(トルース)ともいへるし、事實ともいへるのである。ここをよく辨へなくてはいけない。近頃はゆる危険思想を抱く人達の考へは、或は眞理に近いかも知れない。けれどもそれはファクトから離れてゐる。リアリティーから離れてゐる。歴史的のファクトを離れ、人間とはかういふものだといふ事實をはなれて、眞理といふ言葉にのみ囚はれてゐる。かくあるべきものだ——ホワットイズでなく、オウトトッピーといふ方向に向いてゐる。囚はれてゐるから、とても實行が出来ない。基礎根柢が確かりしてをらずに、たゞ空理空論に囚はれる。ワーズワーズといふ人はファクトとトルースの區別の出来なかつた人だといふが、あの人の詩を見ると、なるほどと思ふところがたくさんある。

それはそれとして、英語が佛蘭西語とほゞ同格になり、國際的に用ひられるやうになつたといふのは、英語は斯々の價值があるものである、かくの如き眞理によつて……といふのではない。自然にさうなつてしまつた。事實がさうなつてしまつた。理窟よりはその方が強い。またこれが英吉利人の遺方である。理論などは五月蠅くて堪らない。すべて實力主義である。私が國際聯盟にゐる時分、總長のドラモンド氏の言動が、よくこれを示してくれた。佛蘭西の代表がしばしば議論をやる。ドラモンド氏はやり込められてぐうともすうとも音を出すことが出来ない。けれども態度は英吉利式である。

『君のいはれることはもつとだけでも、何だか、まだしつくり自分の腑に落ちないところがある。しかし僕は、何方が善いとも悪いともいふことは出来ない。ほんたうらしくもあるが何となく腑に落ちないところを見ると、絶対にトールスでもあるまい。暫く俺に委して……』といふやうに頼む。かうして先方の鋭い論鋒を避けたことを、私は二度も三度も知つてゐる。はたして二ヶ月三ヶ月経つて見ると、矢張りドラモンド氏の見込が正しかつた。

『よかつた、よかつた。あれは佛蘭西式の議論で、あの通りやつたら、どんなことになつたか知れない』

と、喜んでゐたことがある。人間の頭などいふものは、大抵限りのあるものである。哲學者の頭などでも、多寡の知れたものである。試みに、カントを始め群小哲學者をみんな集めて見給へ。宇宙のこと、人生のこと、喋べらしたら一通りは喋べるだらう。何でも喋べるかも知れない。けれども彼等はコップ一つ拵へることは出来ない。何故硝子は透明か、それすらわかることはあるまい。といふのは、人間何も彼もわかるものではない。わかり得ないのが當り前である。ところがフアクトとなつて來ると、極く狭いことであるけれども、間違ひはない。その點である。耳で聞いても、眼で見ても、手で觸れても、事實だから間違ひない。そのフアクトを捨て、トールスなどいふ。その實半分もわかつてゐない。否、千分の一もわかつてゐないやうなトールスを、あだかも全部わかつたやうな顔をしてやるといふこと、それがマーキストのやることである。ちよつと分つたやうで、その實、物のリアリティーのわからない遺方だと

思ふ。

○英吉利人はファクトに據つてやつてゐる。これが彼等のメンタリテীর基礎である。そこで言葉についても、商業に、外交に、英吉利の言葉が適してゐるなど、彼等はいはない。議論はしないが、自然にさうなる。さう仕向けてゐる。現在では、支那と日本の條約も英文にしたいといふ。そんな話を聞いた。それほど英語の用ひられる範圍が擴まつてゐるのである。

四十五萬の豊富な言葉

もう一つの主なる理由は、英語といふものは方々の國から拾ひ集めたやうなところがある。必要があれば、何處の國の言葉でも、そのまゝ用ひる。自國の言葉で足りない時には、遠慮なしに、他の長を採つて、我が短を補ふ。更に躊躇するところがない。だから何處の國の言葉でも入つてゐる。そして別な意味にそれが用ひられてゐる實狀である。日本もさうではないかと或る人はいふかも知れない。しかし日本は必要のないことを外國から採つてゐる。これは甚だ

可笑しい。何も自動車が後退りする時に、オーライといはないでもよいではないか。よし／＼とか、まだ／＼とか、やれ／＼とか、いくらでも適當な日本語がありさうなものである。運轉手のテクニクなどをいへば、オーライとは後に退く意味だと心得てゐるさうである。

先年、京都へ行つて、或街筋をブラ／＼歩いてゐた。古本屋の前から焼芋屋の前へさしかゝつたところが、ブン／＼と匂つて、とても食欲を唆る。ところがひよいと見ると、看板にスイート・ポテトと書いてある。これにはさすが私もうんざりした。何もスイート・ポテトと書かないでもよいではないか。焼芋とか、丸焼などゝいふものは、英吉利には多分あるまい。更にまた栗より美しいといふ意味で九里は、なんなどゝいふ、ポエカルな名稱もあるはずである。それを態々スイート・ポテトと改める必要はない。或は洒落れたつもりであるかも知れないが、洒落にしてはあくどい洒落である。更に近頃流行るシャンなどゝいふ言葉もその通り、美しいといふ字は獨逸語から習はなくても、綺麗だといふ字はいくらもある。聲が美しかつたら麗はしいといふ字も、朗かといふ字もある。何を聲しやんなどゝいはなくてもよい。

これらは何の必要もなく用ひる言葉である。私のいふのは、自國語で言ひ現せないやうな文字を取る意味である。随つて英吉利の辭典には、言葉が非常に多い。大きな辭典になると、四十五萬以上の言葉がある。これに對して佛蘭西語の辭典は二十萬、獨逸は三十萬、伊太利は十四五萬といはれてゐる。とにかく四五萬の言葉が、一々別なことを意味するといふのであるから、四五萬の思想が含まれてゐるわけで、實に豊富なものである。かういふ關係上、英語が各國に擴がるのも、相當理由のあることである。實際の力があるからであらう。何も經濟上買收して英語を使はせるわけではない。買收されて吾々が英語を學ぶわけでもない。英語そのものに、今いつた豊富な思想があり、便利があるからである。佛蘭西語ほど綿密に、適切に言ひ現すことは出来ないかも知れないけれども、數がたくさんあるから、已むを得ない時には二つ三つくらゐ並べて、佛蘭西語一つに當らせる場合もあらう。

さういへば、どうやら佛蘭西語の方が意味深く、重寶なやうに思はれるが、さうではない。もし一言で確實に出来ないものがあつたならば、言ひ現す途は外にもあらう。何故ならたくさ

ん言葉があるからである。日本語でもその通り、先達つても藤澤博士から、奥床しいといふ字は、日本語で外に何と解くか考へるといはれた。ちよつと考へて見たが、何だか言ひ盡した言葉がない。それから字引を見た。齋藤秀三郎さんの著されたえらい字引がある。今日これほど英語の流行る時代に、あれほどの字引を著された功勞は十分表頭に値する。私もし文部大臣だつたら、すぐ勳章でも出したい。先生の事業が、先生をして、日本國民の恩人とする十分の價値があると信じてゐる。あの字引を開けて、横床しいといふ字を見たが、この譯は感心しなかつた。そこで私も少しばかり安心した。齋藤先生が言ひ現せないのだから、俺の知らないのも當り前だと、大いに安心した。さういふ字になると、どうも一字で奥床しいといふ字を譯すわけには行かないらしい。そんな場合は、英語でも矢張り二つか三つくらゐの字を集めて、譯すより仕方がない。

かやうに英語の言葉が豊富だからといつても、佛蘭西語なり、日本語なり、外の言葉を譯す時には、何も彼もあるわけではない。故に今いつたやうな字を二つ三つ、或は十なり百なり拾

ひ集めて、英語には、奥床しいといふ字はないとか、何とかいつて、英語を責めるのは無理である。日本語に譯せない字が、英語にたくさんあるけれども、その数は英語に譯せない日本語に較べて、遙に以上であるから、矢張り英語の方が思想が大きく、數も餘計あることを固く信じるものである。

だから、英語でよく思想を練れば、日本語で思想を練るよりは、得るところが大いわけである。思想の數において、思想の廣さにおいて、深さにおいて——志すところによつて變りはあらうが、統計として言葉を見る時には、遙に多い數字が現れることであらう。隨つて英語をよけい勉強すれば、人の考へがずつと廣くなる。日本語ばかり習つてゐる人、或は佛蘭西語ばかりやる人よりは、よけいに廣くなるわけである。露西亞語の如きは、辭典を見ると十萬足らずである。七萬位でないかともいはれてゐる。先刻も述べた通り、とかく日本人が露西亞思想に惹かれるといふのは、露西亞の思想の貧弱なところが、同病相憐れむの理で妙なところが氣に入つてゐるのではないかと思ふ。

四十七士と俳句

英文學には、明るいところがある。暗いところを意味する文學も、たくさんあらうが、概して明るみが多い。明るい暗いは、民族心理のことになるけれども、同時に民族の心理といふものは、一番先に言葉に現れるものであるから、言葉との關係が甚だ深い。文學は文字が連なつて、その形をなすものであるが、お道具が多ければ、外の國の文學よりは、秀でたところがあるといはなければならぬ。面白い思ひつきとか、ひよいとしたことはいへないかも知れない。吾々日本人は、ちよつと一句ひねるとか、一首誦さむとか、俳句を好む性質からいつて、ひよいと輕妙な言葉を使ふが、英人にはさういふことが少い。ひよいと浮んだことや、ぱつと起つたことより、じつと考へて見る性質で、思想が深い。ちよつとした思ひつきだつたら、日本人必ずしも英人に負けない。吾々はさういふことを好む。露西亞式、佛蘭西式とでもいふか或方面からは、これを文藝に——それが文藝といふものでもあるまいと思ふが、假にそれを文

藝としても、これは思想といふものではあるまい。

ほんたうの話か嘘ごとか知らぬが、或人が赤穂浪士の討入後、浪士達が諸々の大名にお預けになつた時、

『赤穂には士が何人をつたか』と聞いた。

私は今數を覚えてはゐないが、小藩のことだから、五百人か六百人位だつたらう。その中から討入に参加したものは、僅に四十七人である。

『何と少いことだらう。もつとたくさん士がをつたらうに……』

といった時、大石主税が、

『どうも、俳句が流行つてゐますから……』

と、笑ひながら話したといふ。俳句が流行つたといつて、義士になれないわけもないが、とにかくひよいとした思ひつきを喜ぶ俳句の流行と、眞面目に物事を考へ、或はじつと辛棒して何事かを成さうとする方面とは、兩立しない。さういふ意味で、義士が少なかつたと答へたも

のらしい。

『義士の少いのは俳句が流行りましてね』

といふ。實に味ふべき言葉である。私は俳句を攻撃するわけではないが、何も彼も俳句式に行くものではない。或は俳句そのものも一の哲學であるかも知れないが、頗る淺薄な哲學であらう。スピノーザの小指にも及ばない。爪の垢ぐらゐなものである。根柢は矢張り思想である。

思想は感情の深いところから湧き出すものであらうと思ふ。

かういふ思想を現す道具がたくさんあると——今いつたやうに文字の數がたくさんあると、文字のために、また思想が殖えて来る。道具立てが備はれば、備はるほど、物の奥まで掘れるといふわけで、英吉利にはその道具が備はつてゐると、私は信ずる。だから意表な、ひよいとした思ひつきはなくとも、じつと考へるところがあつて、思想が深くなり、且つ廣くなればなるほど、人生といふものは明るくなるものだと思ふ。耶穌教かぶれかも知れないが、造物主は世界を六日間かゝつて拵へたといふことである。造物主がずつと世界を見渡して『宜なる哉』

といった。これでよろしいといった。そこである。「萬事よろしい——」と思ふところに、人生の真理がある。萬物みな悪なれといふのは、悪魔の聲である。何事でも否定するといふのは、悪魔の言葉である。何を見ても、何事を聞いても、みなよろしい。樂天的なところに人生の味ひもあり、希望もある。明るいといふ言葉は、そこから出たことであらうと思ふ。

一日三語主義

そこで、それほど優れてゐる言葉——ともいひたい英語は、どうしたならば吾々が最も有効に、最も便利に學び得るか。これは實際問題である。私も、英語を學んだのは、人に教へるために學んだのではない。自分自身の不安を廢するため、藥用に用ひたやうな氣味がある。故に人に説明することは出来ない。それは英語を教へることを専門にされ、始終その方に心を用ひられてゐる方が、遙によい方法を授けられるであらう。私のは、單に自分だけの經驗に徴して自分で學んだ經驗から、二つ三つ参考になるかと思ふやうなことを述べて見たい。

第一は、先づ單語を學ぶに、一日三つを信條とすることである。一度にたくさん學ぼうとしてはならない。たつた三つづゝ習ふ。その代り、照つても降つても、この方針を變へないことである。今日六つ覺えて明日休まう。氣分の良い時三十やつて、後の九日を止める、といふやうではいけない。頭のくじやくする時でも、透きとほつたやうに明瞭な時でも、三つ。これは始終使ふ言葉だと思つた時は、例へばエレクトリック、テーブル、ウォーターといふやうにこの三つを紙に書いてポケットに入れ、下宿屋でも、便所でも、食堂でも、時には散歩する時でも、エレクトリック、ウォーター、テーブルといつて、大きな聲で歩く。さうしてこれを實用化する。日記にも書く。出来ることなら西洋人に試して見る。昔は試し斬といふものがあつた。それは物騒極るものだつたといふが、試し語りは少しも危険でない。やつて御覽なさい。果してウォーターといふ發音が正しいか、どうか。

かうして一日に三つやれば、一年には千になる。二年やれば二千。二千の文字が吞込めたら大したものである。十何年前だつた。文部省で英語の教授方法とか、それに關する審査とかい

ふ委員會があつて、私も任命された。その人数は七人だつたか、八人だつたか、大家もをられたが、私を始め一人、二人の小家も、その中に入つてゐた。その時分私は極力主張したけれども、やつてくれなかつた。何を主張したかといふと、中學校で教へる英語の言葉は二千に限つてしまへ。日に三つづゝやれば、二年で出来るはずである。だから中學校で使ふ教科書などは二千以上の言葉を使ふな。二千の言葉だけの字引を拵へて、その代り二千だけはハッキリ覺えないといけない。その用ひやうでも、双方に意味がとれるといふのでなく、かうだといふハッキリした文字の意味合を呑込ませることである。ディクテイションをやるにも、間違はないやうにやる。そこが大切である。どれを讀んでもハッキリしないやうではいけない。

そのためには、あまりたくさん讀むことは効が少い。私の友人で漢學者である或人が、田舎へ旅行した時、隣室で書生が議論してゐる。甲と乙との書生が支那の歴史を論じてゐる。甲は何かいふ毎に、十八史略にはかうある、そんなことは十八史略にはないぞといつて、十八史略の外へは一步も出ない。乙の方は博識家と見えて、後漢書にはかうある、前漢書にはかうある

と論じてゐる。私の友人は、えらい物知りだわいと聞いてゐたが、甲の十八史略を論じてゐる方が、どうやら正しかつたといふ。

さういふことがある。いろ／＼なものをたくさん讀んでも、ほんたうに味讀したものか、讀んだふりをするのだから、たくさん讀んだからといつて、それが悉く頭へ入るわけでもない。少數のものでも、よく知つてゐるものは強い。その意味からいつて、且つまた人格涵養の方面からいつて、たくさんものをあやふやに知るよりは、少いものを確り握つた方が強い。たくさんは知らないが、この事なら知つてゐる。ウォーターといふ字は知つてゐるけれども、ハイドロリック・パワー、そんな難しい字は知らない。けれどもウォーターの方は確り知つてゐる。一方の人は、ハイドロリックといふ字は知つてゐるが、ハイドロスタティックス、ハイドロといふ字は水かしら……泥が入つてゐるから泥水かしら、といふのでハッキリしない。そこに人格修養の意味もある。故に、私は再びいふ。何でも日に三つづゝ缺かさずやる。今いふ通り、二千字覺えればたくさんである。英吉利の百姓などは、三百位しか知らないものが多い。亞米利

加の紐育あたりの紳士でも、四千字知つてゐるものはえらい方である。新聞などは、西洋でも二千か三千知つてゐれば、一通り讀めるはずである。

語調と記入

○第二は、英語を學ぶについて、忘れてならない心がけである。それはどんな場合でも、好い言葉、好い句を見つけたら、手帳に止めておくことである。殊にイデオムなどは、心して書止めなければならぬ。文字といふものには、妙な使ひ方があるもので、病氣の時、嘔吐、下痢の言葉を知らないで困つたといふ話もある。私が札幌にゐた頃、明治八年時分であるが、コレラが流行つた。少し下痢でもすると、えらく心配した。或友人も一日下痢をして休んだが翌日癒つて出て來た。先生が、

『どうして昨日來なかつたか、何病氣だつたか』

と聞いたので、大へん困つた。そこで取敢へずアッセンディング・アンド・デッセンディング。

これでも意味のわからないことはないが、考へないとわからない。文字の上からいへば、それでもよいはずであるが、使ひやうがさうでない。故に、或場合には、一向用を爲さないといふわけである。文字の使ひ方といふものは、必ずしも理窟で行けるものでない。だから、何か面白い使ひやうがあつたならば、手帳に止めておく。これが第二の方法である。

第三は、好い文章を繰返し語記する。そして詩でも吟するやうに、句調を覺える。詩の句調でも具合悪からうが、支那の詩などを日本語のやうに讀むのが、大體、へんである。支那であらばこそ音調がわかる。さりながらあれを日本語に讀みにして、味があるといふことはわからない。月落ち鳥啼いて……支那の音で讀むからよいのである。それにしても、日本人はあれを日本化してしまつた。それと同じやうに、西洋の詩も、矢張り日本式に讀めるやうな工風をしてはどらだらう。とにかくいろ／＼説もあるが、まだ行はれない。或は行はれるかも知れない。しかしここでいふのはさういふ意味でなく、西洋の詩は西洋人の讀むやうに、當り前に語記して、何度も繰返す。さうすると、英吉利の言葉の音調は、こんなものだといふ傾向が、大體

わかつて来る。さうなれば占めたものである。何か文章を書く時にも、読んで見て、文法が善いか悪いが、大きな聲で読んで見ると、何んとなく口調が可笑しい。どこか悪いのであらう。引かゝるところがある。そこで外の言葉に代へて見るといふことになる。必ずしもそれでテストが出来るのではないが、テストが出来るものがたくさんある。

假に諸君が作文を書いてかういつてもよい、あゝでもよいといふ時に、外国人の先生に持つて行つて見給へ。文法上は何方でもよい、何方が口調がよいか、口調のよい方を選ぶのである。時にはこんなこともある。文法上は、何となく此方の方がよいやうだが、一方は口調がよいからといふので調べて見る。果して文法上も、口調のよい方が正しかつたといふ實例も間々あるのである。だから口調を知るといふことも、英語發達の大切な條件である。

文章の美化

以上は、私の特に感じた三點であるが、なほ第四第五ともいふべきものがあるならば、それ

は訓み方を一通り習ふことである。妙なところに見識ぶるのは、間違つてゐる。

『俺はガイドになるのではない』

『發音などはどうでもよい……』

といふ人があるかも知れぬが、それは不可ない。文章の美化といふことは、發音と大へん關係が近い。今もいつた通り、口調の善し悪しと共に、發音にも悪いところがあつたならば、眞の文章の美を現し得ないものである。昔の所謂福澤流とか、慶應流とかいふ遣方では、ほんたうの文章の味は出ない。商業的の意味だけはわかるけれども、詩や文章の味は出ない。今日では大へん違つて来たけれども、昔の慶應は、發音などどうでもよかつたやうだ。バットをバットと讀んで見たり、ビートルといふ言葉をビヨブルなどと讀んだり、かなり出鱈目が多かつた。私の習つた先生は津輕の人だといふことだつたが、バット、ビートルなど、この人に讀ませると、少しもかまはない。殊に東北人と來てゐるから、バットすかしながら、ビヨブル人民といつた風な遣方である。氣のきいた江戸ッ兒の生徒などは、

「ブツトやつたらすかしたんだ……」

などゝ洒落たものである。ところが日本人は、とかく發音の際、聲を惜しむ癖がある。大きく口を開けて發音する際でも、思切つてやらない。

私は英語を習ふ時分によいことを聞いた。私が亞米利加へ行つた時、どうも君はオーの字が出ない。それを稽古しよう。どうしたらよからう。咽喉の奥から聲を出すやうな、短い文章を語記しろ。そんなものがあるか。これがよいといつて教へられたのが二行か三行の詩である。暫くやらないから、以前より下手になつたが、オシアンといふ愛蘭の詩人の書いた、太陽を歌つた詩がある。

おゝ汝 廻轉してゐる大きな玉よ 太陽よ

汝の光線はどこから來たものか

汝の光線の源は限りなく その泉はどこにあるか

といふやうな、大きな思想の盛つてある詩であつた。二三行で盡きてゐる。それを何度も何

度も、おゝおゝと練習する。だん／＼調子がわかつて來る。今日の私の發音では美文とも思はれまいが、それを何度も繰返すうちに、ハハ、英語には、こんなところに上り下りがあるものだといふことがわかる。

度々いふ通り、私は教へるために英語を研究したのではない。自分で學ばんがためにやつたので、随つて方法は我流である。

英文學の價值

今までは、専ら語學のことについて述べた。次は文學の價值である。價值については先刻から述べた中に、すでに私の信するところを述べ得たと思ふが、私の友人に長らく縣知事をしてゐた人がある。今は退いて麝香の間伺候といふ役人になつてゐるが、この男と縣知事をしてゐた時分に會つた。

「君も僕と同じく、農學とは大分離れた商賣をしてゐるが、それでも俺と違つて縣知事でもし

てをれば、昔の農學が少しは役に立つだらう』

と聞いた時に、

『さうだなア、牛の種類などを見る時には、わかつたやうな顔もしてをられるが……』
といふのである。

『そんなものか、學校で習つたことは、その程度にしか役立たぬものか』

と思つたが、更に、

『英文學を習つたことは、大へんによかつた……』

といひ出した。

縣知事が英文學——それは少し可笑しいぢやないか、といつたところが、

『いやさうではない。縣知事などいふものは、縣會などへ出ると、實に厄介なものだ。明日から辭めてしまはうなどと思ふことも度々ある。碌でもない議員などを相手にして、實に苦しい。ところがそんな時、俺はやらなければならんと力づけるものは、昔習つた英文學である。』

ンエークスピア、或はロングフェローの歌にこんなことがあつたなア、などと思ひ出すと、心持がピンとしまる。何を！こいつら相手に……といふやうな氣になる。これが一番役に立つたなア』

といつたことがある。今は逝くなつたが、木内といふ人があつた。あの人に、

『君は長く役人をしてをつたが、學校で習つたもので、何が一番役立つたか』

と聞いたら、矢張り英文學だといふ。どういふところに役立つかといつたら、前と同じやうなことをいふ。

『どうも役人などをしてゐると、不愉快なことが多いが、シエクスピアやテニスンなどの詩をひよいと思出すと、實に何ともいへず力強い』

といふ。その外、私は二三人の同窓或は友達にも聞いて見たが、いづれも同じやうなことをいふ。これは私等の年輩の人のいふことだから、或は今の青年の考へと違ふかも知れないが、要點は、つまり明るい力をもつて、人の心を引立てる。これを露西亞式に考へたならば、すべ

て暗くなつて、世の中が情なくなつてしまふ。英文學をやると明るい氣分になる、といふやうによくいられるが、確にさういふ力があると、私も信ずる。

私の大好きなマコーレーの文章の切抜がある。アゼンスを讃美した文章である。希臘の文學の影響は永遠に傳はつて、何處の國、どの時代においても、それこそ明るい氣分を持つといふ意味をマコーレーが述べた、非常に美文だと思ふ。

●眞理——偏見、暴力に打克ち、眞理を望み、眞理が勝利を得るといふやうなことは、どの國どの時代においても、煎じ詰めれば、これはアゼンスの賜、即ち希臘の賜である。故に少數の人でも、暴力或は偽りに抗つて抵抗し、或は自由のために立ち、正義のために立つものがあれば、必ずその人々を勵ますものは、アゼンスの賜である。エラージマスのやうな哲學者が、夜獨りで研究してゐる。その灯の脇においてパスカルがこれも夜眠らず研究してゐる。さういふ時でも、或はミュラポーが議會で叫ぶ時でも、ガリレオが羅馬にゐる時でも、セツリが斷頭臺に立つた時でも、なほ心動かさず、勇敢に身を處する。かういふ時にも、彼等を支

持するものはアゼンスの力である、といつてゐる。

そればかりでなく、すべて文學が人の悲しみの時、歎きの時に慰めたり、或は涙をもつて、眠ることも出来ない眼に休みを與へたり、——それはエラジマスのやうな有名な人ばかりではない。名もない人々の悲しく憐れな時に、勇氣を與へる。この力もアゼンスの不老不死の力であるといつてゐる。私は、これが英國のリテラチュアにそっくり合ふ言葉であると思ふ。マコーレー白らがかくアゼンス、アゼンスといつてゐる言葉の裏には、一方には俺の國の文學も……といふ確信が、心の底にあつたのではあるまいかと思はれる。

英吉利の文學、或は英吉利の言葉については、前述の通り、實用的方面も無論あるが、實用的にのみ英語が必要であるとかないとかいふ理由の下に、怠るべきものではなからうと思ふ。殊に、昔は支那の書物を読んで、吾々のメンタル・デシプリンとしたのである。支那の文字を覺えるといふことは、なかく難しい。しかしながら漢書を読んで、これはあゝだらうか、かうだらうかと考へる、メンタル・デシプリンといふところに、漢學の長所があつた。

今日、英語もその代用にならうとしてゐる。英語をもつてたゞ聞くばかりでなく、翻譯を讀むばかりでなく、あゝではなからうか、かうではなからうかと、考へ及ぼすところ、そこにメンタル・デシプリンがある。吾々のやうに甚だ語學の力に疎い、恵まれない國民において、なほメンタル・デシプリンとして英語を用ふることは、これは學問といふよりも、各自の人格發展の上から見て、大いに價値あるものだと思ふ。

私は英語の先生でも何でも無い。けれども一つは楽しみ、一つは己れの修養のために、更にまた實用のために、英語の研究をお奨めしたいやうな心持がするのである。

米國人の英語とその文學

亞米利加と私

從來、しばしば私は人から亞米利加通のやうに評されてゐる。しかし私は亞米利加にさう長くをつたことはない。留學時代に三年ほどゐたのが一番長い。その後しばしば彼の地に行つたがために、どうやら亞米利加通のやうに思はれてゐるが、十年前に、歐羅巴への途すがら、亞米利加を通過したのが、最後になつた。

實は、その後しばしば招待を受けたのである。過去二ケ年ばかりの間にすら、彼れ此れ十ヶ所から、或は大學だの、俱樂部だの、または友人などから招待を受けたけれども、行かない。またゼネバから日本へ歸つて來る時は、亞米利加を通つて來るのが順路で、便利であつたけれども、それも避けてゐたやうなわけである。

甚だ感情的で、笑はれるかも知れないが、彼の移民法が出てから、私は、二度とアメリカの土を踏むまい、といふ決心をしてゐる。あまり癢に觸るから行かないのである。友人達はぜひ出かけて来い、君が来れば大いに歓迎するといふが、俺は嫌だ、自分の同胞を侮辱して、僕一人を歓迎するなどいふのでは、死んでも行かない。妙に旋毛が曲つてしまつて、どんなに招ばれても行かないことにした。その代り、彼の移民法が、他日改正になつたならば、借金をしても、第一番にアメリカへ行かうといふのが、今の私の態度である。

だからといつて、私はアメリカ人を憎むのではない。その罪を憎んでも、その人を憎まずである。且つまた、その罪も、アメリカ国民の罪と淡白にいひたくない。少數の議員の罪である。國民の多くが、彼の法案に反對してゐたことを、私は知つてゐる。それを知つてゐるならば、何もそんなに腹を立てたり、捻ねくれた考へを持たなくてもよいではないか、といふ話もあるけれども、とにかくにも國法である。國法である以上は、その制裁の下に國が治まつてゐるのである。つまり日本人を歓迎しないことを、國法で定めた國である。そんな所へわざわざ

ざ出かける必要はない。まあ斯ういふわけである。

たゞ誤解のないやうに、一言述べておきたいことは、今いつた通り、私はその罪を憎んでもその人を憎まない。だから移民法通過後、アメリカ人が日本へやつて来ても、それを歓迎しなかつたり、挨拶もしないといふやうなことは、しなかつたつもりである。むしろアメリカ人が来れば、個人としては、従来より一層厚意をもつて、彼等を迎へてゐるのである。それはたゞ義務であるか、或は自分の寛大を街つて、殊更彼等に厚意を示すのか、といふと、そればかりではない。私は實際、アメリカ人の氣質に、共鳴する點が少くないのである。そこで早速、アメリカ人のナショナル・サイコロジイとでもいふか、國民的心理について、一通り述べてみたいと思ふ。

御承知の通り、國民の心理といふものは、昔のプラトーン時代にもぼんやりいつてゐたことであるが、昔の人はサイエンスの材料がなかつたために、そのデータについて、はつきり證據を擧げることが出来なかつた。支那でも日本でも、昔からいつてゐたことである。即ち地方々々

によつて人氣が變るといふことは、誰でもいつてゐたことである。まして、何千里を離れた國民にあつては、性質の異なること、言を俟たないところである。現に、昔スパルタとアゼンスのやうな、あんな近い所、今日自動車で行けば、三時間とはかゝるまい、非常に接近してゐる。あゝいふ接近した場所においてさへも、性質が大へん違ふ。言葉まで違ふ。同じ希臘語を使ふにしても、聲の出方が違ふ。東北人と關西人と違ふやうに、甚だしい。

吾々東北人は、鼻から音が出る。關西の人は鼻から出ないが、多く舌の作用で聲を出す、といふやうな差がある。アゼンス、スパルタにおいても同様である。スパルタ人は鼻聲で、咽喉から聲を出した。これは氣候の關係であるとは、昔の人もいつてゐた。けれども確な證據がなかつた。現代になつて——現代といつてもモンテスキュー時代になつてから、やゝ學術的に究明され、それは物質的境遇、即ち風土と思想の關係であると解いた。けれどもモンテスキュー時代には、今から百五十年前で、まだ材料が少なかつた。その後バックルになつてから彼の有名な文明史の第三章で、バックルが頻りに材料を集めた。今讀んでも頗る面白い。馬鹿

なことを考へたものだと思ふけれども、しかしまたさういふこともありはせぬか、もつと研究したならば、更に明かにわかるだらうと思ふ節々があつて面白い。所謂サブジェクティブな、諷刺するやうな、いろ／＼な學説を述べてゐる。

バックルの書いたのも、もう五十年位前のことになるが、近頃はますます各方面に研究が屆いて、所謂インターデペンデント・オブ・シビリゼーション——形而上及び形而下の相互關係は近頃非常に研究され、また明かになつたやうである。萬事といふわけではないが相當明かになつたこともあるやうである。殊に近頃は、多くの専門家が、頻にさういふ方面を研究してゐるやうである。

南米の文化と日本の關係

亞米利加のやうに、廣い土地を占めてゐるものは、自ら歐羅巴人或は南米人などゝ、違つた性格を發揮することは、これは自然に考へられることである。さて亞米利加のことを話す時、

或は聽かれる時には、大體地理を想像してもらひたい。眞直に四千哩ばかりの長い境界線が、加奈陀から續いてゐる。初の千哩ばかりは、少し婉つてゐるけれども、千哩から暗香坡へ來る三千哩は、ほゞ一直線である。それから千哩ばかり下に來て、その下は凸凹のある海岸になつてゐる。東側には海岸に近く、山脈がある。アペレシア或はアルゲニヤなどの山が、海岸ま近にある。それから山を越えようと、すつと平原が展けてゐる。彼のミシシッピの大きな平原があつて、それからロツキ―山脈がある。だん／＼その山脈を越えて行くと、カルフォルニヤへ出て、太平洋を見ることになる。

この亞米利加といふ國には、往昔どんなものがをつたか。歐羅巴との關係は甚だ少なかつたやうである。西側の方は、相當亞細亞に近いので、いろ／＼な關係があつたらしい。北方アラスカの方へ行くとカムチャツカに近い。もつと先のベーリング海峡などは、殆んど陸続きでもあつたかと思ふほど近い。そこで亞細亞の大陸から、亞米利加の北に向つて、アイヌの如き人種或はギリヤーク、その他西伯利にゐる人種と同じやうな人種が、多分入つて行つたのであ

らう。つまり日本人によく似た人種が入つて行つた。それが今日のインディアンとなつて残つてゐる。

これらは前から一つの文化を造つてゐた。所謂マイヤーの文化だとか、インカの文化或はナフロツクなどいふものは、西班牙人が擧殺しにしてしまつた。人間は擧殺しにしまかつたけれども、その文化といふものは、滅茶々に壊されてしまつた。今いくらか古物が残つてゐるといふことである。私は行つて見ないから知らないが、中央亞米利加即ちユカタン、メキシコ、ペルー、チリ、あの邊には、大きな石で造つたものが數多残つてゐる。この人種は果して何ものであつたか。堀口（久萬一氏）さんなど南米においでになつた頃は、この邊も見聞せられたといふことであるが、いつか堀口さんからでも親しくお話を伺つたら面白からうと思つてゐる。人によつては、日本との關係が大へん近い、といふことまでいつてゐる。

二十七八年前、私が巴里の博覽會へ行つてゐた時に彼處にデュルバー侯爵といふ人がをつた。この人は非常な金持で、いろ／＼な道樂を持つてゐた。たゞ普通の人の道樂と違ふところ

は、研究道楽である。インカ文明の研究、インカとマイヤー、その他南米文化研究の道楽である。それを骨董品のやうに取扱つてゐたらしい。しかし自分が研究して知つてゐるかといふと殆んど何も知らない。まったく驚かされるくらい何も知らない。この人が、ぼんやりと南米文化と日本人との關係を聞き、何かこの邊の消息を研究する人がなからうかといふので、日本公使に頼んだ。公使も、日本人には一人もそんなことを知るものはない……といふのが恥かしかつたと見え、相當な人があるから御紹介ませう、と返事をした。返事はしたが、調べて見ると、どうもそんなことを知つてゐる人はない。

ちやうどその時に私が行き合せた。公使は栗野といふ人だつたが、新渡戸といふやつは八百屋みたいな男だ、深いことは知らないが、何でもちよいと聞き嚙つて知つてゐるから、あれで誤魔化さうといふので、日本人の名譽のために私がデュルバーといふ人に紹介された。ところが私は亞米利加にゐる時分から、古いことが好きだつたので、今のやうな話も、聞いたり讀んだりしてゐた。それで私の知つてゐる、あらゆることをルバーに示した。たつた五分間で

すんだ話である。しかし先生は僕より知らない。その癖、何萬何十萬といふ大金を出して、インカの古いもの、大きな石など、現物を巴里まで持運んでゐる。トルカデロの博物館には、今でもたくさん残つてゐる。その時私が五分か十分喋つたことに、ルバー先生すつかり敬服したものと見えて、

『大へんお詳しいやうだが、どうか俺の留學生になつてくれないか。大學教授の俸給だけ出すから、三年ばかり俺の金を使つてくれ、南米へ渡つて、この問題を研究してくれ』

といふ相談を受けた。けれどもこつちは役人であつた。大學の教授であつたために、その志を受けることが出来ず、辭退してしまつたが、今考へて見ると、大へん惜しい氣がする。あの方でも研究してゐたら、相當その道の學者になつて、大きな顔をする事が出来たであらうと思ふが、さういふやうな關係で、南米の文化といふものは、素人が見ても、何だか日本人と關係がありさうに思はれる節がある。間接にはきつと關係があらうと思ふ。といふのは、今いつた通り、西伯利方面にゐる人種が、亞米利加に渡ることは造作なかつたのである。更に

また西伯利方面にゐる民族が、アルタイ山の麓から日本に來たであらう。或は、シヤマニズムの宗教が日本に來て、今日の進歩をなしたといふことであるから、日本人が亞米利加に行つて土人の風俗習慣の基をなしたのも思はれる。私はよく知らぬけれども、想像は出来る。素人でも想像は出来る。

大陸に植つけられた三勢力

ところが、せつかく築き上げたマイヤー、インカ、ナフアツク等の文化といふものは、西班牙人のために根柢から覆へされた。書物など大したものはないが、悉く焼かれてしまふ。人間も殺されたり、追はれたり、亂暴にやつけた。そのためあの大きな、せつかく大陸の西側に出來かゝつた文明が壊された。カリンサー・スペクリー博士の計算によると、古い文明で、千六百年位は續いたかと思はれるやうな文明であつたが、ハツキリしてはゐない。それが全くなくなつてしまつた。故に、歐羅巴人が東から入つた時分の、この大陸の土人は、悉く

く野蠻人で、文化もなければ文字もない。住宅すらも持たないみすばらしいものであつた。墮落した人種に變つてゐたのである。

序に附加へておきたいが、オックスフォード大學のギルバート・マレーといふ人が、かういふことを一つ話にいつたことがある。文明、文化といふものは、築き上げるには長い年月を要するが、打ち壊すのは實に造作もない、瞬く間に遂げ得られるものだ、といひながら、その一つの例を擧げた。

『自分の友人に、濠太利へ旅行したものがあつた。相當な學者であつたが、濠太利の中央から一つと奥へ入つた。かつてオックスフォードの同窓だつたので、それを訪ねて行つた。大學で一緒に勉強したのは、三十年ばかり前のことである。非常に楽しみして出かけて行つたが、友人はすでに亡くなつて、子供の時代になつてゐた。ホテルも何もないので、一晚厄介になり、その息子と話して見ると、英語も確に話せない、文典に適ふ話が出来ない……』

濠太利にはオーストラリヤ・イングリッシュといふものがある。奇態なもので、濠太利人の

話す英語は、英人よりも亞米利加人の發音に似てゐる。それは不思議ならぬのである。空氣の關係か、新開地といふ關係があるのか知らぬが、妙に亞米利加式なのである。とにかくこの學者が、古い同窓の子供に會つて見ると、發音がまったく濠太利の發音で、文字の數も知らない。所謂ボキヤブラリーが非常に貧弱である。思想もそれ以外に出ることはない。お父さんが持つて來た書物などは、まったく棚曝しで、何十年といふものは手もつけてないから、表紙が失くなつたり、破れたり、捨てられたものもある、拉典、希臘の書物もあつたが、更に顧みられた風がない。その息子との話では、とても拉典、希臘の話など出來ない。羊の話、豚の話が精々であつた。

かういふ文化は十年で滅亡すると、ギルバート・マレーズが私に話した。さうかも知れない。善い習慣を破ることは造作ない。文化でも一個人でも同じである。百日の説法屁一つといふ話もあるが、そんなものである。政治などでもその通り、せつかく何十年とかゝつて築いた政治も、悪い政治家に引かゝると、二年の間に滅茶々にされる。墮落といふものは早く出来るものである。

のである。

そこで、今述べたアメリカ・インディアン、その中にはアツテック文明なり、或はナフアツク文明なり、インカ文明なりの恩澤を受け、影響を受けたものもあつたが、その果は住むに家なき野蠻人に陥つてしまつた。そこへ新に英吉利人がやつて來たのである。英吉利人は東の方から入り、佛蘭西人は南の方から入つて來た。西班牙人はもつと南から入つて來た。

一體西班牙人は、一番先に南を傳はつて來たのである。奇妙なもので、移民が入る時は、必ずイソサーマル・ラインを傳はつて來る。イソサーマといふと同温線といふか、溫度の同じ程度の方である。例へば諸威、瑞典から人間ほ、亞米利加の何處に多いかといふと、ミネソタ州その他ずつと北の方である。西班牙人は何處に多いかといふと南の方、英吉利人は矢張り北の方であるが、諸威及び瑞典の人達よりも少し下の方にゐるといふやうに、總じてイソサーマル・ラインを傳はつて行くといはれる。それで南の方に西班牙人が入つた。フロリダだとか、何とかいふのはそれで、更にカルフォルニヤのもつと南の方へ行つて、あの邊を荒し、北の方

へ上つて來やうとした。カルフォルニヤまで來た。けれどもカルフォルニヤより北には行かない。随つて今でもカリフォルニヤへ行けば、南の方に昔の西班牙の古い遺跡がある。その少し北の方には佛蘭西人が入つた。そしてルイジアナといふやうな大きな所を取つた。英吉利人はこれと反對に、北の方から入つた。しかしアパレシヤンの山脈が海岸近くにあるので、この山脈を横切つて、大きな原野に行くことが出来なかつた。だから英吉利の勢力及び殖民地といふものは、アパレシヤン山脈の方の海岸と、山脈との間の狭い所を、北から南の方へする／＼下つた非常に狭い一部分で、しかも土地の悪い所である。

今でも亞米利加の北方のメイン州などいふと、石ころばかりごろ／＼してをつて、礫な物は出來ない。土地が豊饒だなどは夢にもいはれない所である。メイン州の産物とはどんなものかといふと、俺の國の産物は石ころと人物だといふ。人ころも多いが、人物が出てゐる。小さな所だけでも、割合に人物が多く出る。山脈が多くを占めてゐるので、農業が出來なかつた。それで已むを得ず工業をする。山脈が多いから、その邊から瀧がたくさん落ちる。今なら

早速水力電氣を起すところであるけれども、殖民地時代で水力電氣などは出來ない。けれども瀧を利用して製造場が出來た。故に所謂フォルライン、瀧のある線を選んで製造がだん／＼盛んになつて來た。

これに反して、佛蘭西人はみな南から入つて來たから、山脈に遮られることなく、すぐ亞米利加の中央に入ることが出來た。そしてミシシッピー河を傳はつてどん／＼上へ行つたから、限らない原野が展けた。何處まで行つても原野である。しかも何處までも行く。だからあの邊全部が、佛蘭西の領土になつた。今日ルイジアナといつてゐる。ルイ十四世の頃占領したから、ルイジアナといふ人もある。今日ある所のルイジアナ州ではない。無論あの邊も包含されるが、殆んど亞米利加の中央がみなルイジアナといつたのであつて、大した面積である。そのもう一つ西の方は、先に述べた西班牙人が、中央亞米利加の方から上つて來た。即ちこゝに三つの勢力が亞米利加の大陸に植ゑつけられたことになる。今の紐育、費府、ポストン、あの邊一帶の狭い所が英吉利人。大きな平原で、しかも何でも出來るやうなミシシッピー河の兩

側が佛蘭西である。しかし佛蘭西の勢力もロツキー山脈を越えることは出来ない。ロツキーの西方はすつと西班牙人である。

僅か二百年前のことであるが、それを思ふと、歴史といふものは妙なものだと思ふ。シルレルのいふやうに世界の歴史は世界の審判なり——世界の歴史が國民國家を審判して、彼は罪あり、これは無罪だ、善いとか、悪いとか審判するものである。これを亞米利加大陸だけの、しかも二百年の短い間の歴史に照して、判斷すると、英吉利人といふものは偉いものだと思ふ。なぜ今日、亞米利加が佛蘭西領になつてゐないか。百五十年二百年前には、殆んど全部が佛蘭西ではなかつたか。よし佛蘭西が亞米利加をまつたく自分の所有にすることが出来なかつたとしても、それならば相應に大きな勢力を持つてゐた西班牙が、何故どん／＼やつて來なかつたか。一番勢力のない、しかも山脈で遮られ、一方海で遮られ、狭い所でぢや／＼になつてゐた英吉利人が、どうしてあの全部を取るやうになつたのであらうか。洵に興味深いことである。國民心理を研究する上にも面白いと思ふ。

まさか神さまの力ではあるまい。神さまといふものは、さう細かいことまで手を出さないものだ。神さまが英吉利人を殊更好きだといふことは、私には信じられない。また英吉利人が特別神さまを好きだとか、神さまに忠實であるとも思はれない。けれども事實は今いつた通りである。今後はどうか知らぬが、少くとも過去二百年の歴史を見ると、エルゲリヒテは確に英吉利人をもつて最有效のものなりといふ、判決を下してゐるやうである。一番ぶ態を演じたのは佛蘭西である。佛蘭西はこの點においても、その國民性を示してゐる。

根強いジョンブルの力

何故、佛蘭西人がやり損ねたか、あれほどの勢を失つたかといふと、そのやり損ひは、ナポレオンの時代に始まつたものである。彼のルイジアナの一帯を六百萬圓だかで賣つてしまつた。歐羅巴大陸を征服するために、金が缺乏して來たので、その軍資金を拵へるために賣つてしまつた。ナポレオンの一家、殊に弟などは頻に反對して、ルイジアナに未練を持つてゐた

のであるが、彼はどうしても肯かない。あれを賣つて英吉利を叩き潰す、あんな物を持つてゐても仕方がないといつて肯かない。ちやうどナポレオンがお湯に入つてゐる時、誰か意見した。あれを賣つては佛蘭西の損だといつたところが、彼は大きな聲を立て、風呂の中で暴れ出し、部屋中ザブ／＼にしてしまつたといふやうなことも、歴史に書いてある。

それで決つてしまつた。誰が何といつても肯かずに、ルイジアナを賣つてしまつた。ところがこのルイジアナを賣る頃、即ちナポレオンの時代までには、すでに半分も英吉利人に取られてしまつてゐたのである。何故取られたかといふと、ナポレオンが歐羅巴の征服に忙がしくて、亞米利加を顧ることが出来ない。その間に英吉利人はアルゲニア、アパレシアンを越えて、一人二人、十人二十人といふやうに、のこ／＼山を越えて土着した。土着して三年もゐると、もつと彼方によい土地があるといふので、水草を追ふやうにしてだん／＼南に來、耕作し、耕作して行つたのである。佛蘭西の政府では、これは我が領土なり——といつて、兵をおいたり、巡查や憲兵をおいたりして、専ら鐵砲で守らうとしたのであるが、英吉利人は鐵砲も刀も持た

ず、鉄をもつて進んで行つた。ちやうど昔羅馬が、歐羅巴に勢力を得たのも矢張それであつた。羅馬の歴史家モムゼンの言葉に、

劍をもつて獲得したる土地は、劍をもつて奪はる。鋤をもつて獲得したる土地は、永久に我が所有なり……

といふ言葉がある。即ちこの筆法で、鋤をもつて進んだ英吉利人が、今日の如く亞米利加の大陸を取つたといふのは、當然の歸結であるかも知れない。恐るべきものはその力である。

さういふやうなわけで、ナポレオンの時代にも、すでに半分以上侵されてゐた。權利がどうの、法律がどうのといふ問題でない。事實上、そこに土着して動かないのだから仕方がない。ジョンブルといふ奴は居坐ると動かない奴である。ナポレオンにはその邊の事情も多少わかつてゐたものと見えて、

『あの邊には、佛蘭西人がたくさんゐないといふではないか……』といつた。

一體、佛蘭西人は道樂者が多い。何處へ行くにも一人で行く。一人で行つた先々で、臨時の

妻などを拵へる。所謂内縁が多い。浮気者である。だからしつくりした家族が出来ない。船乗みみたいなもので、到る處で、行く先々で女房を持ち、臨時の家庭を拵へる。腰が坐らないから土着しない。そこへ行くとジョンブルは掛こい。妻君一人あると、婆さんになつて、しなびてしまつても、矢張り動かない。そこに強味があり、手固さがある。子供を持つてねつくくやつてゐる。一口にいふと、その根氣に佛蘭西人は敵はないで、負けてしまつた。そこで今いつた、中央部の廣潤な土地ルイジアナが、結局英吉利人の手に入つてしまつた。しかしながらその最後の、それこそラスト・ストロークは、ナポレオンのやり損ひである。事實上は大部分英吉利人に侵されてを つても、法理上は佛蘭西の所有だつたのである。然るにその權利までも賣つてしまつたのであるから、それ以來まったく英吉利人の所有に歸してしまつた。この邊の話には實に面白いところがある。私も何かに書いたことがあるので、少しばかり知つてゐるのである。

さて、これが私の述べんとする當面の問題に、どういふ關係があるか。それは追々述べる

して、先づかくの如くして英語が亞米利加中に擴まつたのである。それまでは先刻もいふ通り英吉利人は東海岸の一部にゐたのである。今でも南の方ルイジアナ邊に行くと、佛蘭西語がまだ大へん残つてゐる。英語を話すのでも、佛蘭西語のアクセントが多分に残つてゐる。殊に亞米利加が獨立を宣言した時分には、まだ佛蘭西や西班牙の風が残つてゐた。それに下の方紐育の近所には和蘭人も大分をつた。紐育をニューアムスタムなどいつて、元は和蘭の殖民地であつた。英吉利が取つてから、紐育と名を變へたのである。

ハドソン河などいふのでも、和蘭人が始めてやつた所である。今でも和蘭の跡がたくさん残つてゐる。彼のルーズベルトなどいふのも和蘭の名、ホイットマンなどいふのも純粹の亞米利加で、英吉利の血は入つてゐない。和蘭人と何かの混りものであらう。所謂アングロサクソンの血統ではない。

言語の統一

さういふやうなわけで、アメリカの歴史の初めには、方々の言葉が混つてゐる。しかも英吉利の言葉は——エリザベス時代に一番盛んに殖民が行はれたのである。アメリカのトラディションといふものは、その時分から始まつたのであるから、言葉もエリザベス時代の言葉が残つてゐる。御承知の通り、エリザベスの時代といへば、英吉利の黄金時代であり、ベーコンの時代、シェクスピアの時代である。故に先刻述べた通りアイゲス……英吉利人は今こそアイゲスといふと、アメリカ加式などいふけれども、自分の國の字引を見ると、シェクスピアの時代には使つてゐたものである。だから人によつては、アメリカに英吉利のよい言葉が残つてゐるのは、あだかも東北に京都のタルヒが残つてゐると同じことであるといふ。

しかもアメリカが國を建てて、直に教育に最も力を注いだのである。レパブリックといふのは、教育なくして行はれないものであるといふことを、創立者は一番先に考へたのである。フランクリン、ジェファースン、ハミルトンはさうでもなかつたけれども、アダムスなどは大いに教育を奨励した。それでなまりや何か、大分一樣になつて來た。ちやうど日本で電信だの

郵便が出來たので、東北から九州の果まで一樣になつたと同じく、とにかく一樣になつた。だからほどなく、俺は和蘭人だ、俺は西班牙系だといふ、人種的差別も大へん少くなつた。

話の仲介として、一言挿みたい。それはエスペラントについてである。多分、讀者の中にはエスペラントの熱心家がゐられるだらう。エスペラントはザメンホフといふ波蘭の眼科の醫者が發明した言葉である。これを世界語にしようといふ試みの下に出來たのであるが、大へん簡単な言葉である。英語を學ぶに較べれば、十分の一の勞も要すまいと思ふ。英吉利人などが習ふ時には、まづのろ／＼やつて二ヶ月、少し勉強すれば二週間で卒業する。トルストイは三十分で卒業したといふが、私の友人で、ゼネヴァに教授をしてゐるポーといふ人は、二週間やつて演説した。私が初めてエスペラントの演説を聞いた時でも、三分の一はわかる。實に造作ない言葉である。

英吉利、アメリカ等で、二三ヶ所の學校が試みた試験によると、獨逸語や佛蘭西語を學ぶ場合、エスペラントを一年やり、その後二年も獨佛語をやれば、初から佛蘭西語なり、獨逸語を

三年やつたものよりも、却つて二年間やつた方がよい。即ち初めの一年はエスベラントをやつて、後二年を外の語學を學んだ方が、好成绩であつたといふ。これはよほど確かめた實際論である。私も終始中學校の先生や校長さんについてゐる。何とか、この試験は出來ないものか、五年間英語をやる初めの一年を、エスベラントをやらせて、後の四年英語をやらせたならば、どういふ成績を出すか、英吉利でやる成績とは違ふであらうが、どんな結果を見るか試験してもらひたいと思ふが、文部省の規則を抜けてやるほどの校長さんもないやうである。やつたら確に面白い試験である。

さて、エスベラントを何故ザメンホフが考へたかといふと、或波蘭の片田舎に猶太人や、露西亞人や波蘭人が雜居して、始終喧嘩が絶えない。いづれも生傷だらけの顔をしてゐる。それでこの人が、どうして人間といふものは、こんなに喧嘩をするものであらう。調べて見たところが、言葉の誤解が非常に多い。言葉さへよくなつたならばこんな争ひはあるまいと考へた。これは何もザメンホフのゐた波蘭の村に限つたことではない。グレーブ・コンセクエンスとい

ふ言葉のために、亞米利加と日本の關係が峻しくなりかゝつたこともある。イン・ザ・ネームオブ・ザ・ビーブルで善いとか悪いとか騒いでゐるのを見ても、いかに言葉によつて、間違ひが起りやすいか察しられるであらう。

そこでザメンホフが、人類相互が、理解し合つて平和に暮すには、何か共通の言葉がなくてはならぬ、と考へた。それがエスベラントである。随つてザメンホフの肚裡では、これは一つ的手段に過ぎないのであつて、ほんたうの目的はインターナル・イデオ、即ち相互に相愛するといふことである。それをやるために言葉を統一するといふのである。この話によつても、亞米利加の學校が、小學といはず、中學といはず、建國の當初から言葉の統一、教育の普及といふ點に力を入れた、賢明な理由がわかる。

即ちこの方針によつて、大いに思想が統一された。西班牙人であらうと、佛蘭西人であらうと、和蘭人であらうと、一切區別がなくなつて、統一された。ザメンホフの理想を、ザメンホフが生れる百年も前に、亞米利加では始めてゐたのである。

かくして、あの廣い大きな亞米利加大陸、今日では一億一千万といふ大人口を包容する國民が同じ言葉を使ふやうになつてゐる。けれども先刻もいつた通り、スパルタとアゼンスのあんな近い所でも、空氣の關係で發音が大へん違ふ。まして亞米利加のやうな大きな國である。いかに言葉が統一されても、發音は地方々々によつて違ふ。暖かいフロリダ州カルフォルニア州と、寒いメイン、マサチウセツツ、或は平原の極く乾いた華氏の零度以下四十度などいふ寒い所、そんなに寒くてもオーヴァーコートなしに歩けるやうな空氣の乾ききつたミネソタなどいふ處では、發音の違ふのは當り前である。亞米利加人といふと、みな同じやうに聞えるが、亞米利加人同志が聞くとすぐわかる。あれは北の人だ、あれは南の人だとすぐわかる。發音が違ふのみならず、いかに統一が出来てゐるといつても、方言が違ふ、テニオハが違ふといふやうな、差がある。これは吾々にわからない。しかしそれも極めて些細な點である。大體においては、みんな共通である。

亞米利加人氣質

ここで、亞米利加人の性格について、ちよつと述べたい。亞米利加人といふものは、妙な國民であつて、自分が國を造つたといふ、個人々々がさういふ考へを持つてゐる。吾々日本人ならば、この國に生れたと思ふやうに、亞米利加人は、この國は俺が造つたんだ、といふやうな氣風がある。この氣風はどのくらゐ續くものか知らない。僅か百五十年前に、始めて出來た國であるから、俺がこの國を造つたんだといふ考へは、ありさうなことである。近來でも、大統領を選ぶ時分には、自分の投票のために……俺が選んでやつたんだといふやうな氣風であるから、俺の國は俺が造つたといふ氣分も、多分にあるわけである。それが米國人の愛國心の基である。たゞ俺の國は有難いといふだけではない。ザ・ウオーク・オン・マイ・ハンドといふ氣がある。随つて外國人に對する時は、非常に自分の國を庇ふ。言葉についても、近頃はだん／＼自信力が強くなつて、亞米利加人の英語は、英吉利人の使ふ英語よりも正しい、といふやうな自

惚れの議論も出てゐる。

その代り、何だか癢に觸ることもある。私がパリへ行った時、ネクタイか何かを買ひに行つた。ところがそこへアメリカの若い男が入つて来た。ホテルにゐる旅行者で、もあらう。矢張りネクタイを買ひに来た。いきなりフランスにはこれだけしか出来ないかといふ。それをいふ前に、ドユー・スピークアメリカンといつた。そこで番頭は當惑した。ドユー・スピーク・イングリッシュならわかるが、ドユー・スピーク・アメリカンといふのだから、アメリカの土人の言葉かと思つた。そこであなたは英語がわかるかと聞いたら、ノウ／＼アメリカン・アイサーといふ。さういふ奴に限つて、發音を聞いても教養のないことがわかる。どこかの番頭か何かしてゐて少し金を儲けてやつて来たのであらう。

お國自慢なんか嫌なものである。國に對してはセルフ・コンフィデンスが欲しいが、口先でいふのは嫌なものである。却つて國の値打が下る。腹の中では確り締めて、俺の國はお前の國には譲らぬぞと思つてゐれば宜い。口に出してはもう駄目だ。美人でも、私はよい女でせう……

などいいはれたら、もう御免だ。さういふやうに、妙に國の自慢をするといふのは、一つには、この國は俺が造つたんだ、といふ氣分が漲つてゐるからである。

序文が長かつたやうであるが、ちやうどアメリカ人の氣質といふものは、先刻述べた通り、未開の地に鉄一本、鋤一つで入つたので、俺が俺がといふ自尊心が大いにある。その自尊心と共に、アメリカ人にはせると、ネバフッド・ファイリングといふものがある。それは隣保の感情である。昔のお隣同志、向ひ三軒で、小さい社會で睦しくやるといふ風がある。それもそのはずである。廣表たる土地にポツチリ移り住む。そこで大いに個性を發達させることは出来る。善い意味においても、悪い意味においても、個人主義が發達するのである。それと同時に、到底人間は一人で行けるわけのものでない。隨つて隣り近所が大切である。隣りといつても、一里二里先であらう。それにしても子供を學校へやるとか、妻君がお産をするとか、亭主が病氣だといふ時には、隣保といふ關係を重んじてはならない。

そこで一方に、個性が發達すると同時に、近所と仲よく暮さなければならぬことが、生活の

條件になる。しかし、これがあまり近くてはいけない。隣りで咳ばらひをしても聞えるといふのでは、個性の發達は出来ない。何をするにも遠慮をする。人間が小さくなる。朝起きて刷牙を使ふ時でも、隣りに人がをれば、お早うといはなければならぬ。禮儀は正しくなるかも知れないが、思ふ存分聲を出すことも出来ないやうでは、のび／＼と伸びることが出来ない。これは程度問題である。その點は亞米利加人の得るところである。思ふ存分伸びることが出来る。リンコンなどいふ人も、あのケビンに生れなかつたならば、あゝいふのび／＼した性格にはならなかつたであらう。あの脊の高くなつたのもそれだ。ケビンからチムニーが出てゐるやうだ。屋根より脊の方が高い。その性格でも、ロッキーマンの横腹から扶り出した岩石のやうに荒つぽいところがある。日本の言葉でいふと、神ながらといふところがある。あゝいふ人物は亞米利加だつて、リンコン一人くらゐなものである。

あれをもつて亞米利加人を律するわけには行かないけれども、あゝいふ人間は、外の國からは出ない。私がいつだつたか、英吉利へ行つてをつた時分、有名な法律家マックドウェンとい

ふ人と、リンコンについて語つたことがある。私が大へんリンコンを褒めたところが、『リンコンに似た人が、日本にありますか』

といふ。これは侮辱する意味ではない。あゝいふ型の人があるかどうかといふのである。そこで私は、

『日本といふ國は、あゝいふ人物の出ない所です。それはちやうど英吉利にあゝいふ人物が出ないと、同じ理由でせう』

といつた。すると相手もその通りだといふ。ワシントンならいくらも出る。あれは英吉利の紳士のタイプである。それから更に僕がいつた。

『日本には、あれにちよつと似た人がある。或點ではリンコンに勝るところもある。或點では及ばぬところもあるが、形が似てゐる。それは西郷南洲だ』

といつた。それはどういふ人だといふから、南洲の人となり、性格、殊に最期の有様など、一席辯じたことがある。とにかくリンコンはタイプでなくて、パターンである。あの性格は習

へない。日本では習はうとしても習へない。あの人を習つたら大へんである。大統領にならないうちに殺されるだらう。

あゝいふ人を造る境遇が、アメリカにはある。即ち個人的に伸びると同時に、ネバーフッドがある。それは古い國ではなかく出来ない。殊に都會では出来ない。アメリカ氣質を眞似ろといふ意味ではないけれども、あゝいふガラ／＼とした性格を持つことは難かしい。過日もいつたが、誰人にも悪意なく、何人にも厚意をもつて……これはリンコルの政治の演説である。日本の議會でやつて見給へ。お互に愛情をもつて……などゝいつたら、何をいやがると彌次られる。アメリカだつて、そんな偉いことはいへる人はたくさんなかつた。それ故リンコルンがいふと、なるほどと聞いてゐる。南北戦争の時分にも、アワー・エネミース、アワー・フレンドといふ有名な一句がある。自分は北方である、しかも南方と戦はなければならぬ。そこで、我が同胞である我が友人である我が敵と呼んだ。政治上では敵であらう。けれども人としては友人であり、同胞である。さういふ大きなびく／＼したところがある。これが手本である。

る。見本でなくて手本である。そこにアメリカ人の極く善い氣質がある。

何事も開放主義

有島君はホイットマンを好んだといふ。有島といふ人は、北海道の新開地につて、やゝアメリカに似た境遇を味はつた。もつとも當人はアメリカにも三年ばかりゐたけれども……随つてあまりこそ／＼した、隣りで嘘みも出来ないやうな所にゐなかつた。そこに有島氏がホイットマンを愛讀した、一つの理由があるのだと思ふ。殊にホイットマンがリンコルのことを歌つた詩の如きは、何ともいへない偉大なところがある。またフィロソファのタイプとしてとれば、エマーソンの如き、英文學には明るいところがある。薄暗くない。人を疑つたり、拗ねたり、人にあてつけたり、陰口をきいたりすることはない。すべて開放である。氣に食はなければ氣に食はぬといふ。イエス、ノーが頗る判明してゐる。エマーソンの如きも、何となく明るい氣分がする。

忘れもしないが、私が十八九の頃、初めてカーライルを讀んで、非常に私淑した。カーライルのサータリーザイタスといふ本は、三十四度も讀んで、二度製本し直した。あの中なかのよいところは、今でも大概語記してゐる。そのうちに私は神經衰弱のやうな病氣に罹つたことがある。内村鑑三氏うちむらみかんが私を見舞つていふのに、

「君、カーライルを讀むのを止めてはどうか、エマーソンを讀んではどうか」

といつたことがある。さういつた内村氏は、その後大いにカーライルを讀んだけれども、彼がこの時かくの如くいつたのは、エマーソンとカーライルは親友であつた。けれども明るい暗いくろの點については、北極と南極ほどの違ひがある。

エマーソンは亞米利加アメリカにおいての除外例といふのではない。むしろ亞米利加式の標本といつてもよいのである。亞米利加では所謂アメリカグローム・フィロソファといふものは少い。ところが普通にフィロソファといふものは薄暗い。何事でも賛成しない。額に八の字を寄せてゐるところに、深味があるやうに俗人は思ふ。けれども眞に哲學の奥を究めた人ならそんなものでない。

世の中を愉快に、太陽の如く考へてをらなければならぬはずである。よし深味はなくともブライトな明るい點は、エマーソン始め亞米利加哲學の傾向であるといつてよろしからう。中には薄暗い人もあるが、さういふ人は、深い思想家でも、世間に受容られない。國民が好かない。何故か。それは自分の氣分に合はない。テンパーに合はないからである。これは哲學者ばかりでない。文學者でも何でも、さうである。大雑把にいふならば、亞米利加人の氣質といふものはネバーフッド・フィーリングから來てゐる。一度會へば、すぐお友達と思ふ。英吉利人と亞米利加人の差は、このネバーフッド・フィーリングに現れてゐる。

英吉利の或婦人が、添書を持って私の處へ來た。亞米利加を通過して來て驚いたといふ。どうしたのかと聞いたら、亞米利加人といふものは、英吉利人と同じアングロサクソンだから、同じだと思つてゐたら、大へん違ふ。却つて日本へ來て、英吉利の氣風に出會すやうな心持になつた。汽車に乗るとすぐグッド・モーニング・ハウドユドウといふ。大へん驚いたと話したが、食堂へなど行つたら、半分食ひかけた物でも、君やらないかといつて來る。無禮だといへばい

へないこともないが、實にやり方が無邪氣で罪がない。だから憤るわけにも行かない。汽車に乗つても、三十分の中に一家族の話をすつかりする。俺のワイフはこんな奴だ、ちよつと好いだらう。俺の子供は何人あるといふやうに、三十分の中にすつかり話す。英吉利人は五年交際つても話さない。ところが日本へ来て汽車に乗ると、みんなじつとすましてゐる。だから、英吉利へ行つたやうな気分になる、といふのも無理がない。

亞米利加人の氣質については、列擧すれば、まだたくさん擧げられないこともないが、とにかく今いつたことは、亞米利加の建國以前の關係が、言葉にどういふ影響を及ぼしたか、これを統一するにどうして統一したか、その統一に連れて、國民性がどういふやうに統一されたかその最も著しいところは、一方には個人の忌憚なき發展と、一方には、極く少數の人々と遠慮なく交際ふ、といふ事情があつたために、ネバーフォード・フィーリングが大いに發達して、これが一種の亞米利加のメンタル・トラディションになつた。今日人口八百萬もある紐育へ行つても、そして、そこには、各國の移民が混つてを つても、それでも、なほこのトラディショ

ナル・テンパーが大いに現れて、フランクな、開放しな、是は是、非は非とするやうな気分が現れてゐる、この點は大いに買つてやらなければならぬ……といふことを、私はこゝに述べておきたい。

大學教育の使命

學問の第一目的

一體、日本の教育といふものは、所謂官學である。近頃こそ、いくぶん民學になりつゝあるけれども、二三十年前までは、純然たる官學であつた。私なども、殆んど子供の時から官學で育つたのである。豫備教育も文部省の學校でやつた。即ち今日の第一高等學校で、その前身は高等中學校である。そのなほ前身は大學豫備門といひ、その前は東京英語學校、またその前は東京外國語學校といつた。私は明治七年ちよつと前に、東京外國語學校に入つた。すると翌年名を變へて東京英語學校となり、その翌年また名が變つて大學豫備門となつた。その際に、こゝも矢張り同じく官立である北海道の札幌農學校、即ち今の北海道帝國大學の前身なるものが開設されたので、明治十年に、帝大に行く代りに豫備門から北海道に行つたのである。これ

も矢張り官立の學校である。

かういふ高等な學校は、明治になつてから、いづれも官のお世話で出来た。明治の前、徳川時代にあつても、少數の學者が、小さな自分々の塾を開いてゐたことは、世人も知つてゐる通りであるが、大學といふやうな名のついたものはなかつた。その中でもいくらか組織的に教育したのは、矢張り官立の徳川政府の經營した學校であつた。それよりほるか前、即ち平安朝に興つた學校などで、大寶令によつて定まつた學校を見ても、大學とか中學校といふものは、みんな官立であつた。しかも、從五位の位を持たないほどのものは入れないといふ、風采までも制限され、その上、教へるものなどは、みな官吏より選んだものである。そして、その頃は、何が學校の目的かといへば、人材を教育して役人を拵へるといふことであつた。さういふ考への系統が、ずつと奈良朝時代から續いて來たのであるから、日本においては、とかく役人を養成するといふことをもつて、高等な教育制度の目的としたのである。

けれども、またそれと平行的に、民間の有志たちが、組織立つた學問でなくとも、始終學校

を開いてをつた。すでに平安時代においても、今述べた官設の學校もあつたが、また同時に、殊に僧侶達は、民間の子弟を集めて教育した。その教育は、因より寺子屋式で、官設の學校のやうに行届いてはゐなかつたが、そこが學問といふものゝ有難いところで、どんな學問でもリペラライジング・インフルエンスのないものはない。心を自由にする、發達せしむるといふ力のないものはない。故に、坊さん達の寺子屋の如き學校からも、だんく民間に篤學の人が出て來るといふことになつた。

さういふ一種のトラディションが傳はつて來て、明治の官學全能の時代にも、福澤先生を始めとして慶應義塾が出来たり、或は今こそなくなつたが中村敬宇といふ人が建てられた同人社といふ學校なども、相當立派な人物を養成してゐる。その後早稲田のやうな大きな學校が出来その後は、商賣氣といへば悪口に聞えるかも知れないが、何々大學といふやうなものが、たくさん神田あたりに出來たのである。

とにかく、動機は何であつても、一度學理とか學問を授けると、それが必ず人の心をエマーンシペートし、リペラライズするといふことは、否むことの出來ない事實である。何處の國にあつても、いかなる壓迫を加へやうが、一方に學問を教へながら、一方に思想を掣肘するなどといふことは、出來るものではない。右の手で種を蒔いて、左の手で種を掘返すといったやうな權兵衛と鳥の兩方の仕事をしてゐるやうなものである。これほど馬鹿なことはない。

随つて、學問の目的が、役人を造ることであらうが、何であらうが、結果においては、心をリペラライズすることになる。私のやうに、やゝ技術を重んずる如き傾向のある農學校の教育を受けたものでも、鋤や鍬や肥料のことだけで、他のことは考へないでゐるといふわけに行かない。殊に、北海道の學校の如きは、農業の専門家を造るのが目的ではなかつた。今日でいへば拓殖學校とか、啓蒙學校とか、開拓學校ともいふかも知れないが、その開拓といふのも、必ずしも土地ばかりの開拓ではない。人文の開拓といふ意味もあつたやうである。

黒田清隆といふ人が、北海道は帝國北門の鎖鑰であると考へた。實際、露西亞人があの邊を荒らす事實に照して、早く彼處に日本の勢力を植ゑつけなければならぬ。それについては人材

を養成して、北海道を開拓する工夫が必要である。開拓するには、何も農業のみに限つたことはない。道路も作らねばならぬ。道路は鋤鉞だけでは出来ない。測量もせねばならぬから、工学も必要になつて来る。その他、村を造れば学校も必要だ。学校は肥料ぢやなか／＼成長しない。教育家も必要である。さういふわけで、あらゆる方面に活動する人材を養成するのが目的で、彼處に学校を造らう、即ち新開地に必要な人物を造らうといふのが、そも／＼の目的であつた

従來の日本の歴史を見ると、さういふ目的をもつて生れた学校はなかつた。奈良朝時代のものを始めとして、平安朝において開いた学校の如きも、たゞ支那の學問なり、儒教なり、佛教の註解を聞くとか、或はあの篆書見たいなものを學ぶことをもつて學問の全部としてをつた。さういふ傳統が傳はつて來てゐるので、中古や近世においては、朱子學でも何學問でも、註解を作るのをもつて、學問だと心得てゐた。新開地を開くといふやうなことは、まづたく出來ずまたわかりもしなかつた。

そこで、とても日本人には經營は出來まいといふので、世界の新開地ともいふべき亞米利加人を頼んで來て、学校を開かした。即ちクラークといふ人がこれに選ばれたのである。ところが亞米利加は、あゝいふ大國であるから、農をもつて生活の基礎にするといふわけで、農に重きをおいたから、その通り北海道でも農業を開くことになつたのである。けれども、實際は、農學などは一週間に三時間か四時間位のもので、他は哲學とか、文學とか、わけのわからないやうなものを習つたものである。

かやうに、私はやゝ技術に傾くやうな学校にをつたけれども、一度學問をすれば、心のエマシベーション、即ち心の解放といふよりは、むしろ啓蒙といふ方がよいと思ふが、心のエマシベーションを受け、また自由な、リベライズされる精神を植ゑつけられた。以上は、私一個の経験から北海道のことを述べたのであるが、このことは北海道に限つたことはないと思ふ。この心をリベライズするといふこと、エマシベートすることが、私は學問の第一の目的だと信ずる。

亞米利加の大學教育

大學の使命を他におく説もないではない。極くざつと分けてみると、亞米利加式と獨逸式と英吉利式である。これに加へれば佛蘭西式といふものも入れられるかも知れない。

先づ亞米利加式といふのは、今はだんく變りつゝあるが、普通一般の學問は、純良なる公民、グッドシテイズンを造るといふのが目的である。日本でいへば、忠君愛國、良き民を造るといふことである。しかしそれは一般の普通教育である。大學の教育となつて來ると、そればかりでは足りない。單純なる良民といふことだけでなく、良民のリーダーズを造るのである。近頃はユニヴァシテイといつてゐるが、いづれも殆んど昔はカレッヂといつてをつたもので、それから發達したのである。私等が四十年前に留學した頃は、まだカレッヂといふ名前をそのまゝ用ひてゐた。プリンストンでもカレッヂ、ブラウンでもカレッヂ、ハーバートカレッヂ、エールカレッヂといつてゐたのが、だんくユニヴァシテイといふ字を使ふやうになつた。

もとくカレッヂの目的といふものは、良き公民の指導者を造るといふことにあつた。隨つてカレッヂの教育といふものは、所謂リベラル・エデュケーションであつた。日本では妙な翻譯語をつかつてゐるが、所謂自由的なエデュケーションであつた。リベラル・アートだとか、或はリベラル・プロフェッションをやるといふやうな、そんな手の仕事ではない。純然たる頭の仕事を人達を養成するのが、目的であつた。そこに重きをおいたのである。それが亞米利加における、最近までの大學教育の目的であつた。

然るに、三四十年前より、亞米利加もだんく國が古くなつて、年も取り、昔のやうに少數の人口で、何處へ行つても食ふに困らないといふやうな、殆んど黄金時代ともいふべき時代は過ぎて、いくらかせゝこましい状態が現れ出した。言葉を換へていふと、農業時代が過ぎてやゝ工業時代に入りかけた。隨つて、これに適應すべく、大學教育も、そんな贅澤な社會の指導者だとか、リベラル・エデュケーションで學問そのものを樂しむとかいつた、そんな贅澤なことはいつてをられない。先づ職業的な教育を與へなければならぬといふので、頗る専門學が

獎勵されて来た。

もつとも、その以前にも工學と醫學だけは、リベラル・エデュケーションであると共に、プロフェツショナル・エデュケーションであつた。そこで、だん／＼高等な教育を受けるよりも、一年か二年の年限で教はりたい、そして特別な専門的な教育を受けるといふことをもつて、高等教育の目的とするやうになつた。ところが、千九百五十年頃からは、もつと下の學校から職業的にしなければならぬといふので、リベラルといふことよりもむしろプロフェツショナルな、高等なるコンモンセンスを養ふといふより、劣等なるせんもんセンスを養成するといふ方に、すべての人の考へが向いて来た。

かうなつて来ると、亞米利加の大學教育の目的は、むしろ精神のリベラルな人を拵へるといふよりは、腕の利く、エフィシエンツリーに有能な、能率のあがる人を造らう、社會の競争によく耐へて行く人を造らう、といふやうに向いて来た。今日でも、亞米利加の教育は、最もエフィシエンツリーに重きをおいてゐるかの感がある。だから生馬の眼でも抜かうといふやうな

社會の競争によく耐へ得るやうな人が、たくさん出て来るのである。運動をするにも、本を讀むにも、或は講義を聴くにも、こと／＼エフィシエンシーを増すといふことに歸着させる。だからみんなぼんやりしてゐない。いかにも鋭いところがある。

しかし、これではいけない、といふ議論をする人も、亞米利加人の中にはたくさんある。亞米利加の面白いところは、そこにあるので、政府が別に世話も何もしなくとも、民間の人たちが各自、教育の方針や何かを定めるのである。もつとも亞米利加にも官立學校はある。所謂ステート・ユニヴァシテイといふものがあるけれども、これはほんの二十年この方よくなつたので、所謂官立大學といふものは、亞米利加の大學間では輕蔑されてゐた。吾々が四十年前に亞米利加に留學した頃には、ステート・カレッジといふと、先づ苦學生でもおいてをつた。月謝が安い。随つて教師も大してよい人はゐない。安物買ひの何とかいふことがある。教育だつて同じことである。そんなわけで、當時の亞米利加のステート・カレッジといふものは、安教育を授ける所のやうに思はれてゐた。前述の北海道の例のやうに、各州でその土地を開拓、開墾

するためには、さういふ人物を養成しようといふので、みな不毛の地を學園とし、その地から上がる所得をもつて、學校を支へてゐた。だから固定した金は澤山あつても、現なまでは持つてゐなかつたから、よい教師などを雇ふこともなかく出来なかつた。

ところが、だんく國が開けるにつれて、だんく地價は上つて来る。先には一町歩十何圓といつてゐた所が、近頃は、場所によつては、一坪百圓も千圓もするやうな所がたくさん出来て来たから、大きな何萬町歩といふ土地を持つてゐたステート・カレッジは、非常な金満家になつたのである。現にミネソタの大學などは、私は二十年ばかり前に交換教授として行つたことがあるが、實は行く前までは、四十年前の考へでゐたから、ミネソタのカレッジか、安賣の學校だと思つて行つて見た。ところが、土地の値段が非常に上つたものであるから、何萬町歩といふ山を持つてゐたが、それが一坪十何圓といふ値で賣られたのである。そこで亞米利加でも最も富んだ學校になつて、建物でも何でも堂々としたものが建てあつた。そして、亞米利加ばかりでなく、獨逸なり、英吉利なり、佛蘭西なりから、金で抱へられるやうな人間は、みんな

な招聘した。金といふと、いかにもけちに聞えるけれども、とにかく立派な人を呼ぶことが出来るといふやうな盛大さに、實は私も驚いたのである。アイオワの學校あたりでも、矢張り同じである。

故に、州立の學校といふものは、三十年も前には實に微々たるもので、振るはないこと夥しい。なほその他に悪い癖のあつたことは、官立學校だから、その州長の意見で教師の選定が定まる。随つて州會だとか、州の長のために、學校の方針なり、學校の教授法なり、教師などが動く。これがどんな結果を生むかといふことは、假に東京市の議員が、學校に喙を容れた場合はどうか、といふことでも、大てい想像が出来るであらう。或は政友會のものでなければ教授にしないとか、民政黨でなければ駄目だとか、こんなことで始終變つてゐた。そんな關係上、官立學校といふものは、統一のつかぬ、始末に負へぬ、弊害の多いところであつたが、長い経験、しかも苦い経験を經て、近頃は政黨が州立學校に干渉しないやうになつたから、ミネソタの大學であれ、カルフォルニアのバークレーの大學であれ、實に立派な大學となつて、

その教授なり、或は制度なりの完備してゐることは、他のハーバート、エール、或はジョンズ
ホプキンス大學などに、一步も譲らぬまでに進んでゐる。

リーダー養成が目的

もう一つ序に述べておきたいことは、亞米利加州立の學校は、男女を入學させる。男だつて
女だつて州民である。州のシティズンだからにはいる権利があるといふので、男女の區別なく自
由に兩性を入れた。殊に西の方の學校では、男女のコーディネーションをやつてゐる。とこ
ろが面白いことには、どうも女の方が眞面目である。大概學問がよく出来る。男は何となくひ
けを取る。卒業する時なども、成績の上の方はずつと女で、中頃から男がぼつ／＼交つてゐる
といふ有様。ちよつと面目がないといふので、始めの二三年中はその邊にをつて、殊に話も面
白いし、若い人達だから愉快に女と一緒にやつてゐるが、卒業前になると、いかにも面目ない
といふので、三年或は四年になつて來ると、さういふ連中は悉く西の學校を出て、東の男子

専門の學校に入つて卒業證書を受ける。これが極く普通のことになつてゐる。そればかりに
亞米利加における女の大學教育の目的も、初めの頃はたゞリベラル・エデュケーションであつ
たが、今日では、全くプロフェツショナルな、且つエフィシエンシーを目的とするやうな教育
にだん／＼變りつゝある。

この状態に對して、先に述べたやうな反對説もなきにしもあらずで、どうも人間は機械では
ない。コンシエンスによらず、さうプロフェツシオンに有效な人間ばかり造るのが目的ではない。
そんなことをすると、人間がけちになる。リベラルでなくなる、たゞ職業々々といふやうにな
つて、かつて目的としてゐたところの指導者としての教育が出来なくなるといふので、俺の學
校では、少數ながら社會の指導者を造るのだといふ學校が、ぼつ／＼出来かけた。

殊にナマーフアストの學校などといふものは、態々學校の規模を小さくしてゐる。金を出さ
うとする人があつても、自分のところでは金は要らない。これでたくさんだといつて、生徒も
何千人といふ風にたくさんは入れない。せい／＼五百人位でなければ手が廻らないといふので

門戸を閉めて無暗に入れない。素質のよい生徒だけを入れる。どういふことを教へるかといへば、商賣上のことなどは全然教へない。それこそ昔の希臘、羅典といふやうなクラシックスを教へる。或はいろ／＼な文學を教へるとか、専ら心を養ふ方に力を注いだ。その代り、そこを出たものは、自動車の拵へ方だとか、物の販賣だとか、一向技術のことは知らない。そして、いくらかばんやりはしてゐる。しかし指導者となる大きな人物が出来る。また妙にあの學校から出るものは、方々の學校の校長などになつたりしてゐる。かういふことを目的とする學校は、單りナマーファーストばかりではない。さういふ風の學校が彼方にも此方にもあるやうである。即ちかういつた元に歸るやうな傾向が、亞米利加にもないではない。

人間を造る英吉利の大學

これに對して、英吉利の大學では、元來が保守的な國であるから、昔からの考へが今日矢張り力をなしてゐる。それは何かといふと、人間を造るといふことである。人物本位である。職

業よりも人間を先づ造る。すべての設備がさういふ風に出てゐる。亞米利加の學校へ行つた目で、英吉利に行くと、誰も『何と遅れてゐることよ』と思はぬ人はない。亞米利加の學校へ行つて見ると、明るい教場で、椅子なども、殆んど布團が敷いてあるかと思ふやうに、樂に出てゐる。机も綺麗である。光の採り方でも科學的の注意が拂はれてゐるし、圖書館なども機械的に出て来る。何の参考書が欲しいと思へば、すゝと自然に出て來るといつたほどである。また寄宿舎に行つてもその通り、いはゆる動物的カムフラトで、樂に生活の出來るやうになつてゐて、生活の程度もすつと高い。人が努めるといふエキザンションが一つも必要ではない。

さういふ所から、英吉利に行かうものなら、教場なども薄暗い。寄宿舎なども汚いこと夥しい。世界的に有名な學校でも、エレベーターがなく、電氣もなくて、今になほ蠟燭を使つてゐる。私もオックスフォードやケンブリッジなどにも度々行つたが、五六年前に行つた時分でもさうである。寄宿舎の室などでも、俺の前にゐた人はグラッドストーンだとか、いやこれはデ

イスレーリが垂した蠟だとか、それぞれ歴史がついてゐる。机でも何でも刻んだり字が書いたりしてある。ここにホームストンの字が書いてある、こゝにはビエールがゐたのだといふやうなことで、亞米利加のやうに綺麗ではない。

けれども、そこに一種の、何となく吾々として襟を正さしむるものがある。だから、今でも薄暗い所に喜んで入る。目的は何かといへば、さういふ所にエフィシエンシーを求めに行くのではない。昔の夢を見よう、大英帝國のほんとの姿を見ようといふ、ぼんやりした心持で行くのである。亞米利加にも、さういつた古臭いやうな學校がないわけでもない。バージニヤの大學などはさうであるが、これも英吉利に學んだのであるから、かうした考への本家は英吉利である。

だから英吉利の大學においては、今なほ昔のトラディションが甚だ強く動いてゐる。職業的の教育を全然怠るわけではないが、人間を拵へるには、秤や樹で量るやうなわけに行かない。個人々々の個性を養ふ。それには大勢の前で講義をやるよりも、一人々々テューターのところ

に呼んで来て、論文を書かしたり、問答をしたりする。

『君は確にさう思ふのか、かういふ反對があるが、君はどう考へる』

といふやうに、先生と二人きりで、學生に向つて相談するやうな遣方になつてゐる。まあ日本の禪學あたりをいくら俗化したやうなものである。或公案が出る。それについて弟子が行つて喋る。それに對して、これはいけないとか、よろしいとかいふ。いけないといはれた人はまた出直して考へる。それでも出来なければもう一遍やる、といつたやうにする。博學とか何とかいふことは望めないが學問が集約的である。考へ方がインテンシヴになる傾向がある。また寄宿舎に揃んで、一緒に物を食つて、友達と二人々々に交はり、相接するやうな制度になつてゐるから、心持を養ふといふことについては、確に英吉利の制度はよく出来てゐるやうに思はれる。

さればこそ、彼の歐洲戦争があつた時なども、一番先に、國難來れりと振ひ立つたのは、大學の學生であつた。日頃吾々がかういふ高等な學問をしてゐるのも、その目的は何かといへば

矢張りかういふ時のお役に立つためだ。それも技術を知つてゐるのではない。兵法を知つてゐるとか、鐵砲の撃ちやうを知つてゐるとかいふことで、戦線に立つたのではない。國のためだといふ、極く大ざつばな考へ方でやつた。その代りばら／＼やられてしまつたけれども、とにかく動機においては、實に高尚な、昔の我國の憂國の志士のごとき心持が、日頃から養はれてゐる。

英吉利人の紳士的態度

アメリカと非常に違ふことは、彼等はいふ教育を受ける時に、女性と接することが甚だ少い。殊にアメリカでも、西部のコーエデュケーションをやつてゐるところと違つて、女に見えるといふ折は大へん少い。それは年に何回とか、紳士の資格を造るために、紳士の習慣として、舞踏會にも行くだらう。けれども一年に三回でも四回でも、よし月に一回でも、踊に行く時には燕尾服を着て行くのである。さうして飲みもするだらう。或は一年に五度や六度でなく

毎晩かも知れない。けれども飲むにしても、禮服を着てゐる。いくら飲んで、禮服に對してへべれけになるわけには行かない。

現に大學の豫備校、ハブリック・スクールといつて、イートンの學校、或はウインチェスタ、ラグビーの學校など、ここに八つから十七八までゐるが、それらの八つ位からの小僧が、紳士的態度でやらなければならぬ。誰も身を苟もしない。殊にイートンの如きは高帽を被つてゐる。倫敦に行つた方は御覽になつたらうが、實に可愛らしいほど小さい子が、シルクハットを被つてゐる。初めはをかしいが、その高帽に對して、何とはなしに身が縮るものである。妙なもので、浴衣一枚で尻からげなどをやらうものなら、どんなことをしても耻しくないけれども、ちやんとした袴を穿いて、羽織でも着てゐると、何となく袴や羽織の手前遠慮するといふやうになる。さういふ風に、英吉利の教育といふものは、ずつと紳士的態度を、系統的に、下の方から上の方までやつてゐる。

かつて私がボルネオに行つた時には、白人といふものはたつた一人しかをらなかつた。その

邊の出張所に派遣されてゐる政府の役人で、日本で申せば先づ高等官の五等とか六等といふ、低い取扱ひを受けてゐた人であるが、その白人といふのは細君と三人である。後は黒奴といつては何であるけれども、馬來人種で、先づ野蠻人といつてもよいくらゐるものである。さういふ人達の間に住んでをりながら、毎晩飯を食ふ時分には、必ずタキシードに着替へて、正式に食卓につくのであつた。一面からいふと、滑稽に思へるほど几帳面にやる。

また私が濠太利に行つた時分にもさうである。まるで野蠻人ばかりしか住んでゐない所で、或白人に會つたが、それは商人で、兎の皮か何かを着てをつたやうであるけれども、この人とホテルに入つたが、その時には暑い日であつたに拘らず、ちやんとシャツを着て、その上に禮服を着けて食卓につくのを見た。日本人ならば、眞裸になりかねないやうな浴衣がけで、しかも團扇片手にやる場所であるが、さすがに英國人には侵すべからざるところがあると思つた。臺灣で、後藤さんが民政長官をしてゐた時に、役人に制服を着させたことがある。みんな弱つてしまつた。こんな暑い時に、筒つぼだの、だん袋を穿かせられてはと、泣言をいつたものだ。

さうであるが、さうしないと、日本人は國民性を發揮して眞裸になる。支那人といふものは、相當裸になるけれども、尻だけは出さない。苦力だらうが、土百姓だらうが、日本の禪よりはもつとその邊を隠しておく。さういふ風俗のある所へ、お役人さんとか、縣知事さんとか、眞裸でゐるのでは、威嚴に關するといふので、制服の制度を臺灣に立てられたものであるが、實際それは大に見るべきところがあつた。

それに、走をかけたのが、英吉利の習慣である。英吉利のは法律から來たのではない。さういふ風に育つて來るのである。殊に大學教育を受けたものは、なほ更である。傍若無人なんといふ豪傑振りをもつて、理想としてはゐない。他の人に對して、紳士として自分の身を處し、同時に他の人も紳士のやうに取扱ふといふところに、尊敬心が起る。傍若無人にやつて、人あれどもなきが如くに振舞ふのは、それは禽獸の思想である。植民地に行つても、植民地の土人は親しみが薄いけれども、一番よく治めてゐるのは英吉利人である。

佛蘭西人の治めてゐる東京にも行つたことがある。佛蘭西人は土人と親しむ。土人の妾を持

つたり、土人の細君を犯したり、土人の娘と踊つたり、大へん親しくする。その官吏がネー
テイヴの人と交はるから、よく治めさうなものであるが、却つて親しみが過ぎて、狎れると馬
鹿にする、威厳がなくなる。そこへ來ると英吉利人はぞんざいのやうに見える。いさゝか癪に
觸る奴だ。いやにつんとしてゐる。みなが眞裸でゐる時にも、白シャツか何か着て、しやんと
してゐる。その代り、何となく旦那さん見たいだ。土人にコンテンプトする氣がなかく、起ら
ない。どこか侵すべからざるところがある。

そのデグニティも、英國人のは借りて來た威厳ぢやない。私は田舎を歩いた時分に、その
縣知事さんと二日三日旅行したことがある。或宿屋へ行つた時に、非常に暑かつたので、私の
前では眞裸になつてゐたが、その有志が訪問すると、急に慌て、着物を着替へて挨拶した。
さういふ即座の威厳なんていふものは、本物ではない。そして後で悔いてゐる。

『あれは誰だつたね。銀行の頭取だとかいつてゐたが』

『いや、あれは銀行の書記ですよ』

『さうか、それは馬鹿なことをしてしまつた。少しお辭儀をし過ぎた』などといつてゐる。人
によつて頭を下げる角度を違はせる。日頃養つてゐないから、すぐに剥げるやうな威厳である。

附合ふほど味が出る

英吉利人は前述のごとく、異性と交はることが少いために、何となく角がある。そこにくる
と亞米利加人はあつさりしたものである。女と交際してゐるから、よく慣れてゐて、女の前へ
出ても恐くない。極めて圓滑に上手に切盛して行く。勿論これは附合ふ相手によるが、私は、
カフエで給仕やモガと交はれといふのではない。さういふ方に附合つてゐると、また別の方
に角が取れるものである。私の知つてゐる或亞米利加人が、日本語をよくつかふ。いつか桂さ
んの所と一緒に行くことになつた。

『君、何か桂さんにいふことがあるなら、僕が通譯の勞をとらう』といふと、

『いや、日本語は大概わかるつもりだ』といふから、そのまゝにして、傍で聞いてゐると、桂

さんの話の工合が、あのね〜といつてゐる。はて妙なことになつたと思つてゐると、その外國人が、

「いやだわね」といつた。

さういふ日本語は、桂さんもきつと慣れてをつたに違ひないけれども、外國人から、殊に重大な用事をもつて來た外國人から聽かうとは期待しなかつたであらう。角の取れやうも、かういふ風に取りては面白くない。物の言ひ方一つで、どういふ人と附合つてゐるかど、大概わかるものだ。今の亞米利加人は角が取れて、洵に交際のうまい人が多いといふのは、同等の人、乃至自分より一層尊敬すべき女性と附合つてゐるから、角が取れて來るのである。

これに反して英吉利人は、女性に附合ふことが甚だ少い。日本人よりは多いかも知れないが亞米利加人に較べては少い。それで、英吉利人には一種の妙なシャイネスといふものがある。含羞みとでもいふか、これは實にあの大國民にも似合はない、奇態な現象である。ちよつと物をいつても、大きな圖體してのろつとしてゐる。此方から話かけると、黙つて顔を赤めるやう

にし、よし言つても、イエスとかノーとかいふばかりで、急に話に乗つて來ない。亞米利加人などは、此方から物をいはなくても、ハローといつてやつて來る。英吉利人なら、此方からハローといつて行かうものなら、アイ・ドンチューとそつぽを向かれてしまふ。さういふ、自分の威嚴を侵すやうな變なことや、あまり狎れ〜しくやつて來るものにはかういふ挨拶をする。

故に、吾々が初めて英吉利人に會ふ時には、どうも尊大な奴だ、傲慢な奴だと思ふ。しかしほんたうに交はつて見ると、傲慢でないといふことがわかる。むしろ臆病とでもいふか、含羞みといふか、さういつた癖がある。これは想像もつかぬことであるが、私は最近八年間の經驗で、なるほどほんたうなんだな、といふことを悟つたくらゐである。誰でもいふことであるが英吉利人といふものは、附合へば附合ふほど味が出て來る。しかし始めはなか〜寄つけない。これは女性とあまり交際がないために、所謂ソーシャル・インステントが發揮出來ないのだと思ふ。

獨逸の大學は眞理の究明

獨逸の大學教育の目的は、客觀的の眞理を究明しようとするところにあるやうに思ふ。人間そのものといふことでなく、形而下の學問をしてゐる。即ち物質的の學問である。そして物の眞理を究めよう、新しい物を發見しようとしてゐる。その努力は、物質的の方面に限つたことではなく、その研究心の旺盛なことから、延いて哲學であれ、歴史であれ、研究に研究をして、今まで人が知らなかつたところの事實を證據立てようとしてゐる。いさゝか人間離れのした物そのもの、研究に力を注ぐといふことが、また獨逸の高等な學問の使命のやうに思はれてゐるのである。

もつとも獨逸においても、近頃日本でだん／＼食ふ道がなくなつて、遂に學生が大學教育の價値を疑ふやうになつたやうに、さういつた考方が、獨逸にもないわけではない。私が獨逸に留學してゐた頃に、すでに今日の日本と同じやうな問題が起つた。それらに對して、コンラツ

ドといふハレル大學の統計學の大家が統計の方から面白い研究を世に公にしたことがある。それは大學の學生がいかなる學問を選ぶか、専門とするかといふ問題で、私もその當時一生懸命に統計を研究してゐたが、その本を見てあまりよい氣持はしなかつた。

何故かなれば、その統計によると、その時々々の經濟狀況によつて、學生の専攻する専門課程に移動を生ずる。例へば、何年から何年頃までは、經濟上大いに獨逸が發展してゐた時分だとすると、隨つて事業熱が盛んな時分であつたとすると、さういふ時には、經濟志願のものが統計上ずつと殖えてゐる。その後また經濟上のクライセスがあつたといふ時分には、經濟志願の學生がずつと減つた。或はこんど地方制度の改正が始まつたといふ時には、法律などをやるものがずつと殖えてゐる。思想問題が起つてどうかういふと、文學や哲學を選ぶものが殖えて来る。そこにコンラツドは必然關係を認めてゐた、その時分は、私も今よりはうぶであつたら、何となく卑しいものだな、その時々々の形況に動かされる、食ふ道にありつくために、こんなことを望むものかなと考へたことを、今でも記憶してゐる。それは私の若い理想に憧れる

時代であつたから、さう考へたのかも知れないが、現今のやうな教育界の状態から見ると、洵にもつともだと思ふ。

しかも日本などでは、ちやうど三十五年前に獨逸の學生がやつた経験を、今やつてゐるのではないかと考へる。英吉利などは、さういふ統計をとつても、いくぶんは同じ現象が現れてゐるであらうが、しかし獨逸ほどではないと思ふ。即ち、英吉利の大學の使命といふものは、前にも述べた通り、教育を受けるものは、己を全うする、人格を建設することを、第一義としてゐるが故に、月給目當にどうかうといふことはない。この一面非常に熱心家である獨逸人に、さういつた現象が起るといふことは、全くのところ己といふことを止めて、目的を客觀的におくところから來るのではないかと思ふ。その外に目的をおくといふのも、理窟からいへば、何だか眞理を研究することになりさうであるが、そこに、己といふものまでも外において人格はどうでもよいといつたやうなところから、今述べたやうな現象が起るのである。

かういふ風に考へてくると、私の説は、或は間違つてゐるかも知れないが、亞米利加の大學ではエフィシエントリーにやつてゐる。英吉利人は大學の使命として、人物の養成といふことに力を入れてゐる。獨逸においては、自分以外にある寶を掴まうといふ考へで、それがよい方に赴くと、學術の研究といふことからサイエンスのディスカヴァリーに至るが、そこまで徹底しないものは、何でもよい、自分自身を造上げることがどうでもよいから、何か一つ偉い発見でもして見ようとか、よい位置につけるやうに、こんな専門を選ぼうとかいふやうになつて來るのである。以上は、私が實際その場所へ行つて見聞したところによつて考へたのであるが、大體、かういつた三つのタイプがあるやうに思はれる。しかし残念ながら、私は佛蘭西のことについては、お話しするほどの材料がない。

何のために學問するか

そこで、先づ主なるこの三點について考へて見るならば、吾々は何を目的として、何を目標として學問を學ぶべきか。いづれも大事な點である。眞理の発見といふこと、仕事のエフィシ

エンシーといふこと、或は人格の建設といふこと、この三つの目的を一緒に達し得たならば、それほど結構なことではない。けれども、それはあまりに高い希望である。あまりに高い望であつて、行はれ難いことだと思ふ。そこで、各自が學問に志す時には、自分は何のために高等な學問をするか、といふことを、自分自身に決めなければならぬ。伊太利の大學、或は佛蘭西の大學などはその成立の當初に差異があるといふことであるが、日本なども、矢張り別な例であると思はれる。即ち先にも述べた通り、すべて官學が主となつて終始した。しかも役人を製造しようといふことが、その主たる目的であつた。けれども、時代はもうその單一なる目的だけでは、通るまいと思ふ。

今日の日本においては、官學一方で行かぬことは論を俟たない。かういふ時代にあつては、官學に入る人でも、或は私學に入る人でも、個々銘々に、自分は何のために大學教育を受けるのかといふことを、しつかり當初において決めなければならぬ。

一體、私の話は、いつも結論になると、小さいところに行つてしまふ。どんな學問の話をしてても、詮じ詰めて來ると、俺はどうしよう、自分自身はこの場合いかに處するか、といふことになる。他人はどうならうが、この俺といふ大問題に對して、一體どうなるか、どうすべきかといふことに持つて來る。

基督教の聖書にもあるが、基督教が羅馬に入つた當初は、人々は異常に感激して、非常に立派な建物を建設した。さうして、この宗教をいかにして擴めるか、この腐敗墮落した羅馬の帝國を、いかにして基督教化せしめようかと叫んだのであつた。しかし一番眞面目に考へた人は『どうしたら、この私の魂が救はれるでせうか、ポーロよ』といつて、ポーロに泣いた人があつた。天下國家を云爲する前に、この私の魂を救ふにはどうしませうか、といふところに、ほんたうの眞面目さがあるのだと思ふ。

大學教育の使命を論じて、議論はいくらでも出来る。けれども、それもよいが、その前に『我れ自身は何のために學問をするのか』この自分自身の腹を、先づ決めることが、何より肝要である。パンを得んがために學問をするのか、人格を高めるためにやつてゐるのか、或は活動

のエフィシエンシーの力を得るためであるか、先づ俺はどうだといふ決心が第一である。これは學校の制度や、或は、どの學校は評判がよいとか、悪いとかいふことで、決せらるべきではない。各自銘々に決するものであつて、これが或意味から申せば、大學教育の使命を決する根本的な態度であると思ふのである。

大學教育と職業問題

本を努めよ

一體、私はこの問題を極めて簡単に取扱つてゐる。御承知の通り私のいふことは、深味もなければ、廣味もない。すべて私の考へは簡単である。私は自分自身、そのことを非常に幸福である、と思つてゐる。世の中といふものはむづかしいやうで、むづかしくない。複雑に見えて必ずしも複雑でない。それをあくまでむづかしく、混がらがつたものとして考へた日には、いかに不幸なものであらうかと思ふ。私は過日も或雑誌に書いた。この考へは、私に取つては根本的問題であるから、二度も續けて書いておいた。即ち『本を努めろ』といふことである。本がつとまつてをれば、後はどうでもいふやうな氣がする。こんな簡単な考へ方はない。教育でも然り、その根本がつとまつてをれば、後はどうでもいいぢやないかといふ氣がする。

何故かう簡単に物事を考へてゐるかといふと、私の先代のお爺さんが、よく教へてくれた言葉に、

『飯の食溜と心配のし溜ほど、役に立たないものはない』

と、いふ一言がある。子供の時から度々聞かされた話である。年を取れば取るに随つて、痛切に感じられる。飯の食溜は、誰でも結果がすぐわかるから、三日分食つておかうなんていふ不心得者はないが、心配のし溜は、誰でも好むものと見えて、なか／＼急に思ひきれない。これからどうなるだらう、あゝなるだらうと考へたら、それからそれへと心配が増して来る。しかしいよ／＼となつて事に當ると、人生何事か心配通り進むものではない。案外産むが易いものである。

『なんだ、こんなことなら餘計な心配をするのではなかつた。苦勞が水の泡になつた……』といふやうなことを、常に人々はいふものである。

これが反對に、本さへ確であれば、事に當つて時々判断をする。しかもその判断は適正で比較的誤りがない。かう私は考へるから、本さへ確なら——根本思想さへ定まつてをれば、何の心配もないと思ふのである。

すべて偉い人、手柄をした人、名を成した人々の傳記を見ても、その本がきちんと固まつてゐる。内ヶ崎さんの書かれたリンコルン傳を見ても、實に吞氣なところがある。無論心配したこともたくさんあつたであらう。ホワイトハウスの小使が夜番に出て、官邸をすつと廻つてゐると、よく妙な聲が聞える。怪しいと思つて近づいて行くと、大統領の寢室である。耳を聳て聞くと、リンコルンが聲を出して、或は泣き、或は懇へて、何事か神に祈禱を捧げてをったといふやうなことは、ホワイトハウスの夜番が度々目撃した情景である。リンコルンの心配といふものは、一方ならぬものである。けれどもこの人の心配は、自分がその本を忘れんとしてその根本に戻らんとする悩みであると思ふ。普通に吾々がいふ心配とは違ふ。私は大學の教育なども、そこに目を着くべきものではないかと思ふ。

西洋の大學は、日本と趣が少し違ふ。大學といふ制度は西洋の中古に起つた。太古にはな

かつたらしい。埃及は知らないが、希臘、羅馬等にも大學といふ制度はなかつたやうである。ユニバーサル・レタスといふものは、學者の一種の組合みたいなものである。或は國によつては、學者の組合であつたといふ。みんな中古の話である。先づこの中古のことを聞くと、主としてカルチュア、獨逸語でいふビルディングが元である。人間としても根柢を造る、土臺を拵へるといふことに、重きを置いたもので、職業といふものを目的にしたものではない。どんな職業についても流通が出来、どの職業にも役に立つやうな融通のきく人を造る。肚を拵へる。思想を練るといふところに目的があつた。一口にいふと精神修養といふ點に目的があつた。

これに對して、日本の大學教育は少し違ふ。大學といつても、今日の大學ではない。先づ奈良朝時代、即ち聖武天皇時代に、始めて日本に開かれた大學、大寶令によつて設けられた大學の如きは、修養といふよりは、むしろ職業的である。單に役人を拵へる所である。年も十四から入れたといふから、今の中學校位であらう。もつとも明治九年に創立になつた私の母校札幌の大學の如き、矢張り滿十六歳から入學を許したものである。私などは十五の時に十六だと誤

魔化して入つたものだ。だから習つたことも中學校程度位なところである。

明治の教育においてさへ然り、千二百年前大寶令によつて出来た大學の如きは、職業教育とはいつても、十四歳から入つたのであるから、大したものではなかつたらしい。學科は六つに分れてゐて、歴史、文學、天文學——歴史といつても日本の歴史ではない。その時分は古事記も出来たか出来ないくらゐで、萬葉集は出来てをつたが、あれは日本の文學としては取扱はれてはゐなかつた。普通の俗歌であると思つてゐた。何となれば、學生は從五位以上、年は十四五歳である。十八歳以上のものも入れることがあるといふ、但書があつた時代である。從五位以上の、十四五歳の若殿達が入つて来たのであるから、それらの人から見ただらば、よし萬葉集があつても、あれは俗歌であるとして、文學とは見なかつたであらう。隨つて歴史を學び、文學を學ぶといつても、日本のことは何もなかつた。

歴史といへば後漢書、前漢書といふ支那の歴史である。經書も立派な大切なものであるが、經書は何を用ひたかといふと、日本の經書といふものはない。だから論語、大學、孝經等が教

科書の主なるものであつた。天文學は、曆學といふ八卦みたいなことを習ひ、數學は今の代數幾何などのない時分で、孫子の兵法が數學の教科書であつた。だから學科といつても、今日のふサイエンスといふものはなかつた。専ら人間趣味の學問、何といふか、ヒウマニク・スター・デイス、主觀的の學問で、客觀的の學問ではなかつた。

専門だけの専門家は片輪

かういつて來ると、そんなら矢張り職業的の知識ではなく、修養的の學問であつたかと思はれるが、性質はさうであつたけれども、結局は役人にしようといふのが目的であつた。即ち人といふものをおいて、その人に嵌るやうなものを拵へやうといふ、その意味において職業的であつた、と私はいひたいのである。だから歐羅巴の大學より、日本の大學は古い。歐羅巴の一番古い大學は中世紀であらう。日本のもその頃であつた。西洋の大學は、基督教を教へる和尚さんがやつたものである。日本のは儒教を教へるために、政府でやつたものである。さうして

今いつた通り、一種の階級的教育を施したものである。偶々弘法大師のやうな人が、學校を開いたけれども、これは民間の企であつて、今日いふ精神教育、寺小屋式のもので、大學といふ程度のものではなかつた。して見ると大學の目的は、或位置に採用すべき人材を養ふ、その意味において職業的であつた。けれども教へる事柄は、その位置に立たなくとも、外にも利用の出来る事柄を教へた。ここが今日の職業教育と著しく趣の違ふところである。

今日の職業教育、例へば理科、工科、或は商科等の教育は、まったくこれに反して、自分の習得した方面の職業については、堪能であらうけれども、これをもつて農業の方面に用ひて應用が出来ない。知識といふものは、固定したのではない。一の知識と雖も、他の事に全然應用出来ないことはない。學問といふものには、各々共通の點が多いものであるから、理科をやつても、理科で練つた頭で外の事を論じて、しかもなほ相當な見識を示すことが出来るのである。經濟學を一通りやれば、こんどは物理のことを話しても、あまり頓珍漢なことはいはないものである。日本人の癖で、

『私は、専門でないから知りません』

といふ。或ものは専門でないから知らない——といつて、むしろ誇り顔をしてゐる。自分の心持では、

『専門のことなら何でも来い。そのかはり、専門以外のことは何も知らないぞ』

といふのである。専門以外のことは一切眞暗だ。つまり自分の持つてゐる小さな専門がある。この専門以外の部類を黒く塗れば、中が大して明るいことはないけれども、側が眞黒だから少し明るくなるだらうといふので、『僕の専門ではない』と力説する。

然らば、お前の専門は何だ、どれくらゐ知つてゐるかといふと、大して知らない。けれどもその専門があるがために、側の方をいくらかボカさせやうといふのである。甚しいのは、聞きもしないで、

『僕は物理のことはわからん』

『化学のことはわからん』といふ。

わからぬことは聞くがよい。せつかくよい機会があつたならば、喜んで聞いて、自分のものとすべきである。物理の方に面白い話があつたら、進んで聞けばよい。経済科、法科などをやる人は、とかくよそには行かない。なるだけ餘計なことを知らない方が、偉いものだと思得てゐる。

ところが、ほんたうの知識といふものは、さういふものではない。アインシュタインならアインシュタインと話して見る。政治のことも、経済のことも、一通りわかる。アインシュタインだと、何も天の川の話ばかりするのではない。ニウトンもさうである。ダーウキンもさうである。殊にダーウキンはその著書の中に、

『俺は感情、情緒といふものを養はないで、遺憾なことをした……』

と歎いてゐる。それは何かといふと、多忙に紛れて、音楽や藝術などを研究しなかつたのは人間として足らない、俺は一方の勉強に偏したために人間味を失つた——と歎いたのである。しかしながらあの人として蚤や虱や、虫のことばかり研究してをつたのではない。それらの物象

を研究して、練つた頭で外のものを見ると、矢張り相當に恥しくないだけの見識、知識を出すものである。

○ かくの如く、人間の知識には、融通性のあるものである。一を知れば、二も三も四も五も、知ることが出来るものである。大學といふものはサムシング・オブ・エブリシング、エブリシング・オブ・サムシングといふことをもつて理想とする。何事についても、何かしら知つてゐる。政治のことも一通りわかる。經濟法律のことも一通りわかる。電氣、水産、その他何のことも、エブリシングについてサムシング知つてゐる。しかしながら、それだけでは、たゞ物知りで、しかも生物知りで、却つて役に立たない。新聞を読めば、それくらゐの學問は出来る。しかしその外になほ自分は或るものを持つてゐる。その一つのことなら大抵のことはわかる。そこが即ちエブリシング・オブ・サムシングである。これが眞の學問である。一方のエブリシング・オブ・サムシングは、普通一般の高等なる常識を養ふといふことである。練つた頭なら、さうなくてはならない。しかもかくの如く練つた頭の持主ならば、一步外へ出たからとて、無職にならぬ。

苦しむわけがない。何故か？ 答は簡單である。即ち融通が利くからである。自分の職業がなければ、それに就くまでは、何かしら、口ずきの途がある。いろ／＼の方面に融通が出来るからである。こゝが日本人と外國人、殊に英吉利人と較べて違ふところである。

日本人の癖は、度々いふ通り、専門々々で、専門ほど偉いものはないくらゐに思つてゐる。専門だけの専門家は、人間としては片輪である。君子は器ならずといふ。専門家は器である。君子ではない。君子でないといへば、小人に近い。先にも述べたが、所謂偉い人の傳記を見て感心することは、往く所至る所よからざるなし——何事に使つても一通り役に立つ。役人としても相當に勤めが出来る。商賣をさせればこれまた一通り、損をしない程度に商賣も出来る。百姓をさせれば牛が肥える。學校の教師にすれば生徒が懐く。講釋させれば相當に説を出す。大工をさせれば鉋もかけ、左官をさせれば壁も塗れる。何事につけても到る所よからざるなし、かういふのが圓滿な教育を受けた人といふべきで、エブリシング・オブ・サムシングに適つた人である。

判断が大切

英吉利人は、専門といふことを、あまり重んじない。私は像てより不思議に思つてゐたが、だん／＼不思議でなくなつて、遂には偉いと感服するやうになつた。それについて面白い話がある。歐羅巴戦争が終りを告げて、講和會議の開かれた際に、バルフォア卿が英吉利から委員として出て來た。日本からは西園寺さんが出かけた。つまり戦後の處分で、獨逸の領土を若干削つて波蘭にやる、露西亞をどうするといふ處分の時で、いろ／＼な専門家を要するのである。地理學者、經濟學者、およそ天文學者を除く、すべての學者が來た。何か問題が起ると、必ず一番先に専門家に見せて、これでよいのか、この境界で差支ないかと聞く。地理學者はあすこの山はどうなつて、此處に谷があつて具合が悪いから、彼方へ寄せた方がよいといふ。經濟學者はこれは農業地だから、此方をもつと入れなければいけない。或はこの工業地をみんな取つては可哀さうだといふ。法律學者また一膝乗出して、これは法理上かうあるべきである……

……といふやうに、一理窟述べなければ氣がすまない。また歴史家は歴史家として、十世紀にどうなつて十一世紀には斯々といひ、人類學者は人類問題やら、風俗問題やらを提げて、この村は習慣上此方へ入れた方がよからうといふやうに、いろ／＼な専門家がかゝつてやつたものである。

そんな時は、いつでも、専門家のたくさん報告が、バルフォア卿のところへ提出される。卿は、それを見る度に、たくさん紙片を投捨て、また専門家か!! といつて苦りきつたものである。しかもそれらの報告は、多くの場合取合はず、此處から此處はかうやらうといつて決めたことが、何度もあつたといふことである。

かういふ振舞を、私はよいとはいはない。極端な例である。けれどもかういふ遣方もあるのである。政治的本能、或は直覺のある人ならば、何も専門家の頭を俵たないでも、やれるものである。専門家といふものは、單に自分の専門の立場からいつてゐるのであつて、人類學者がいふやうに、千年前何とかいふ人種が此處に五戸來た。その五戸が今百戸になつてゐる。こ

の百戸といふものは、専門家に取つては非常に大切な問題である。けれども大局から見れば「何アんだ」といふやうにも見られる。

また地理學者からいふと、この山はかうなつてゐるから問題だといふので、その千米の山のために世界の平和が破れるかの如く思ふ。外の事がわからないからである。これも大局から見れば何でもない。千米が三千米の山であらうが、差支ない。バルファア卿の如きは、大局を見る頭の鍛練が出来てをつた。故に専門家のいふことについても、一通りは聞くけれどもそれを取捨する頭が出来てゐる。拘泥しないだけに出来てゐる。専門家は専門に拘泥する。何がどうだ、コンマ以下かう／＼の差がある。〇〇三の差のためにかうしなければならぬ……といふやうなことを頻りにいひたがるのである。それは専門家の癖である。頭がいかに小さくなつて、大局を見ることが出来ない。これでは片輪になり勝である。

大學の教育は、須くこの點に意を用ひなければならぬ。それらを程よく判断して、これは一通りの議論だけれども、一方にかういふことがある。是と是を見て、何方がよからうか判断する。所謂高等なる判断の力を養ふことが、ほんたうに學問の目的ではあるまいか。物を知ることのみが目的ではない。判断をするといふことが目的である。頭腦が良いなどいふのはつまるところ大小輕重の區別をつける、これはかうだと判断する。それには一つのことに着してつては出来ない。一つのことには拘はると、それによつてのみ世界が動くやうに思ひ込む。大學といふのはユニヴァシティー、宇宙といふ字を着けたのも、意味なきことではない。いろ／＼な學問をそれこそコスミックに宇宙的に見做して、科學の方から見ればかうである、何の學問の方から見ればかうであるといふやうに、全體を合算して、俺は此方がよい！といふ判断を下す。そこまでの見識を持つやうにしなければならぬ。しかもこの力を養ふには、前述したやうにエブリシング・オブ・サムシングと、サムシング・オブ・エブリシングといふところに、心がけなければならぬのであらうと思ふ。

大學は偉大な人格に接する所

十年ばかり前のことであつたが、英吉利の内閣に陸相をしてをつたハルデンといふ人は、旁々哲學者であつた。

大臣は須く高い所から大勢を見る人が、立つて軍事を掌らなければならない。兵は兇器といふ。その兇器ばかり拵へてゐる人が、兇器を使ふのであるから、ます／＼氣狂になつてしまふ。ハルデンといふ人は哲學者で、しかも獨逸の哲學に造詣の深い人である。その人が大學のことについていろ／＼議論を立て、説を述べてゐる。それを見て私が受賣りするわけではないが、ハルデンといふ人は、私の思ふことを、そのまゝいつてゐるといふわけである。それは何か？ 簡單だが、實に穿つたことである。外でもない。大學といふところは、自分より偉い人格に接するところである。ハルデンの言葉をもつてすると、グレート・パーソナリティーに接するといふことである。これが大學の最も大なる使命といふか、目的といふか、大學存在の主たる理由である。

或は學生諸君の中には、情ないことに吾々の接觸する教授中には、それほど偉い人はゐないといふかも知れない。私の友人で、高等學校にをつた頃、面白い學生が一人ゐた。頗る面白い。勉強はするんだが、試験が下手なのである。試験毎に落第して、高等學校に七年ばかりをつた。それほどいはい變つた男である。

『まだ君ゐるのか』といふと、

『ふ』といふ。何年目だと聞くと、

『これで五年目だ、馬鹿な奴等は早く出たがる』

といふやうなことをいつて、悠然と構へてゐる。その後京都へ行つた。何故京都へ行くんだと聞くと、京都には寺がある。東京にゐると鎌倉まで行かなければならぬ。東京には確な坊主はゐない。さすがに京都にはまだ面白い坊主がゐるから 京都へ行くといつてゐた。私がその後京都へ行く毎に、先生は新聞でも知るのか、私を訪ねてくれる。

『君、もう卒業したかい』

『いやまだ一年生……』

去年も一年生、今年も一年生、三年経つても一年生である。「どうだい面白いかい」といふと「え」といつて「話せるやうな教授はひませんね」といふ。「話せるやうな教授」がゐないと思ふ人は、この學生ばかりではない。恐らく今日の學生諸君もさう思つてゐるかも知れない。私も随分なまいきな方で、

「なアんだ、先生なんていふものも、大したものぢやない」

など、一時思つたこともある。けれども、矢張り一日の長ある人は、自分の及ばぬものをどこかに持つてゐる。私の大學のことを考へてもさうである。私の就いた先生田尻稻次郎氏などは、今追想しても、面白い人物だつたなと思ふ。東京市長としてはやり損ねたが、青年を養育することについては、すゝぶん骨を折られた。今の阪谷、添田などいふ人達は、あの人のお陰で——最もお世話になつた方の人々である。これを批評的に、クリテックとして見たならば、彼れ此れいふ人もあるかも知れないが、レヴェレンスをもつて見るときは、實に尊敬すべき偉い人だつたと、今に私は考へる。まして若かつたその時分は、一層その感が深かつた。

まだく外にも追慕してゐる人はたくさんある。

若い時分には一種の英雄崇拜の念があるもので、これのない青年は、實に不憫である。誰を見ても、何を聞いても、「あアあ」といふやうな、感激性のない人間は發達もなければ伸びもしない。何でも冷評するやうな人は、或場合に頭がよいと思はれるが、頭がよいといふのは、一面が黒い。人間の伸々するのは、頭で伸びるのではない。肚で伸びるのである。この肚に温か味があつて、始めて人間が伸びる。この温かい情愛のあるところが青年の青年たるところであり、青年の進歩もそこから出るのである。死んだ英雄豪傑、君子、聖人を慕ふ心もいろいろあるが、生きてゐる人間に對しても、敬愛或は崇拜する觀念なかるべからず、その心持のないものは伸びない。

然らば、自分が拜むべき豪傑、偉人はどこでこれを求めるかといふと、學生は矢張り大學において求めるのが、一番自然であり、また曲りなりにも大學の教授などをしてゐる人は、普通の人間よりはよほど良いはずなのである。私のやうに大學を出たものは、墮落してその仲間

入らないけれども、大學の先生の中にも、随分いかゞはしい人はたくさんある。私も知つてゐる。愚劣で野心家で、寄りつけない人もあるが、その割合は至つて少い。假に點數をつけて見るとする。あの人は何點、この人は何點、それから世人の知つてゐる實業家なり、役人なりを拉致して、それも共に點數をつけて見る。平均して見れば、矢張り大學の先生が、人間として一番點數が多いのではなからうかと思ふ。

先づ、現在大學に教授でもしてゐる人は、大體六十點以下の人は少い。平均七十五六點位にはなるだらう。九十點以上の人も少いけれども、それにしても五十點といふ人はあるまい。役人や實業家など、較べて見たら、相當點數の多い人々である。即ち學生諸君は、先づもつて平均以上の人に、直接相接する機會を持つことになる。ハルデンの謂ふパーソナル・コンダクトをする便利を持つてゐる。私なども随分さういふ經驗を持つた。偉い教授に接すると、俺もああいふやうになりたいものだと思ふ。さうなると歩き方まで、その人を眞似たくなり、風采を見ただけで慕はしくなる。こゝが即ち人間の情のエキスバンドする所以である。何の學説を習

つたかといふよりも、どういふ人に接したかといふことが、いつまでも記憶に残つてゐる。

大學は職業を授ける所に非ず

私は獨逸に五年留學してつて、實際役に立つたなアと思つたことは、たつた一つしかない。頭の悪いせいでもあらうが、農政だの統計學をやつてゐた中に、たつた一つ、それは何かといふと、新しい社會、新しい部落を造る時には、一人々々家を離して建てゝはいけない。出来るだけ一緒に密集して造るがよい。この事一つが役に立つた。五年間やつて、外の事は大して役に立たない。このことは私が北海道へ行つて、屯田兵の村に應用した。それまでは亞米利加式に、屯田兵の家も一軒々々離して建てたものである。それから外に新開地を開くにしても、なるだけ二軒なり、三軒なり一緒にする。何萬坪の所に一軒づゝあつたのでは、熊が來ても駈つけてくる人もない。病氣になつても、醫者を呼ぶに困るといふ風である。それはどうでもよいが、とにかく五年の間に、學問として實際に應用し得たことは、たつたこれだけであ

る。けれども獨逸の留學時代を考へると、寢てゐてもじつとしてをられない。

『今から不精してどうしよう』

といふ奮發氣分になり、インスピレーションの起るのは、所謂偉い人に接したからである。ロツツエの爺さんは、あの年をして、あの勉強をした。俺はまだそんな年でもない。あの爺さんは東洋の一學生がその門を叩いた時に、快く會つて胸襟を示してくれた。あの人の恩は誰かに酬いなければならぬ。俺もその門を訪ねる學生があつたら、開いてやらなければならぬ。さういふインスピレーションは、それでなければ得難い。今のやうなことは、本を讀んでもわかるけれども、バイブルを讀んで奮起する力がどれだけあるか。あまりに高尚で、吾々の日々の行には實行出來ないことが多い。血と血を持つ人間、不完全ながらも生きた人間に接したインスピレーションは、昔の聖人や聖書の及ばぬ力がある。これがハルデンのいふ如く、大學の教育で一番大切なところである。

大學の教育と職業問題——今私は何をいつたか？ 私の述べたことが、職業に何の關係があ

るか、何の役に立つか。自分が尊敬する人に直接接したからといつて、よい職業につけるわけでもない。けれどもそこに、何等か考へなければならぬ問題が、残つてゐるやうに思ふ。

私の知合の坊さんで、和歌山に寺を持つてゐる人がある。若い時、學問するために東京に来てゐたが、金がなくなつた。明治七八年頃である。國へ歸らうと思つたが旅費がない。金の融通を頼む知合もないので、福澤先生のところへ金を無心に行つた。五圓無心しようと思つてゐた。先生は快く會つてくれた。だん／＼話を聞かされる。そのうちに話が面白くなつてしまつた。大分長く話を聞いてから、さてお暇といふので、先生の門を出た。門を出てからひよいと氣がついた。

『俺は何のために先生の宅へ來たんだらう。さうだ、五圓もらひに來たんだつた。まさか忘れたからといつて、もう一度歸るわけにもゆかない——』

當人の話によると、入る時には五圓五圓、五圓を専門で入つて行つたが、出る時には忘れてしまつた。その代り五圓や五十圓の金は何だ、人生が何だといふ、大きな氣分になつたとい

ふ。それがほんたうの教育である。大學に入つて何の職業に就いて、何ほどの月給をもらふかなど、いふことは、抑々末のことで、もつと大きなところへ到達しなければならぬ。

甚だ愚論のやうであるが、私のいふことは、最も實際的なことだと自分は思つてゐる。『到處よからざるなし』さういふ人こそ、人生を愉快に清く過せる人である。物に屈託しない。落第も何のそのといふ寛濶な心持である。

要するに、私の述べた話は、職業にありつくといふ話でなく、職業がなくてもよくしなさい。職業がなんだ！といふ廣い心持を養ひたいのである。けれども、そんなことばかりいつてはをられない、明日から飯が食へなくなるといへば、それも無理のない話であるが、本来職業を求めるのは、大學の目的ではない。職業が欲しければ、日頃桂庵と交際を結んでおかなければならない。といふものゝ、近頃のやうに分業が盛んになり、競争が盛んになつて来れば、職業を求めるには、銘々それだけ腕を研いておかなければならない。昔のやうに、一般的に、人格を養ふといふことだけでは、飯が食へなくなつて来た。随つて職業教育といふものも、す

つと格が上つて来た。二十年前頃までは、農學校であり、工業學校であつたもの、あの有名なシヤノッテン大學の工藝、或は伯林大學の農學部の如き、大學とは別に取扱つたものである。日本でも、初は大學の中に、工學部といふものはなかつた。工科は別にしてあつた。ところが近頃はさうは行かなくなつて、職業を目的とする學校も、大學の中に入れなければならなくなつた。獨逸では今なほ職業學校のことをホーフ・レユレーといひ、ユニバーシティとはいはない。近頃はどう呼ぶか知らないが、私の行つた時分は、さう呼ばなかつた。一緒にしたのは十四五年前からのことである。これだけ職業學校の格が上つて来た。

しかしながら、それにしても、高等教育の目的といふものは、職業を得るためのものとは思はれない。それ／＼職業に必要な學理のプリンシプル、一般的の基礎的知識を得るといふことで、職業教育そのものは、間接に受ける結果といはなければならぬ。今後どのやうに時勢が變るか知らぬが、もし大學なるものが、職業を得るためのみの道行となつたならば、大學は下落し、墮落するものと思ふ。大學といふものには、もつと高いところがなくてはならぬ

い。何職業にも共通なところがなくてはならない。つまり人間として修むべき道に、重きをおいて行かなければならぬ。それにはハルデンのいふことが當を得てゐる。職業がなくても、なほ人生を安んじて見る。それくらゐな度量と見識を修養するのが、大學のほんたうの教育ではなからうか、と思ふのである。

社會の安全に奉仕する職務

故に、私はいひたい。甚だ學生諸君を失望させるやうな結論であるが、『大學教育と職業』といふ問題は、いかなる關係があるかと聞かれたならば、直接、大學教育は職業教育を目的とするものではない。けれども、いかなる職業にも役に立つやうな、根本的な修養を授けるものである。或は私の考へは英吉利かぶれしてゐるかも知れない。私は一番長く獨逸に留學してゐたにも拘らず、一體の物の考へ方は英吉利式である。自分に共鳴するものは、英吉利人の書いたものに多いから、知らず識らずその方へ向いてゐるのであらう。更に、今一つの考へ方によれ

ば、日本の昔風の考へ方は、どちらかといふと英吉利式であるから、昔風の日本人として、知らず識らず英吉利式に向いてゐるのかも知れない。

話が違ふやうであるが、ちよつと述べておきたいことがある。この問題とは、やゝ縁遠い話であるが、士といふことについて思ひ出した。昔は士といふと、一種の階級であつた。今はさうではない。社會的の階級でなく、頭の階級である。相當な教育を受けたものは、みな士となるものである。學士などは即ち士だ。士格のものである。士は所謂指導者である。英語でいふリーダーである。伊太利のファシストもその類である。昔の騎士である。國家のために、或は社會のために奉仕するといふのである。伊太利へ行つた人は御記憶であらう。ついでの間も、私の友人が伊太利を旅行して、汽車に乗つた。外に差障りもなかつたので、前の腰掛に足を出して、本を讀んでゐた。そこへファシストの青年が来て、いきなり皮の鞭でビシヤリと打つた。何故公德を破つたか、國家のものを汚損するとは怪しからぬ、といふのである。ビシヤリとやつた男は、誰に頼まれたのでもない、自ら監督し警戒してゐるのである。私の都合

の亞米利加婦人がフローレンスへ見物に行つた時分、巾着を奪られた。巡査は傍にゐたが、何とも出来ない。

『あツ巾着を奪られた！』

と叫んだところが、ファシスチの青年がすぐ怪しい男を追駈けて捕へた。無論お禮などは受けない。警察よりもよくやつてゐる。公共のために自ら進んで奉仕するナイトである。日本でいふ士である。これで伊太利一體の風紀が、非常に變つたといふ。私は、ファシスチそのものを日本に入りたいといふのではないが、その心持こそ、士たる資格ではないかと思ふ。

このことをお話しするのは外でもない。極く小さなことに導くために、お話ししたのである。といふのは、私は女學生からいろ／＼な訴へを聞いてゐる。何の訴へかといふと、電車に乗つて混み合ふ時、男が若い女に行儀の悪いことをする。甚だしきは手を握つたり、お尻を突いたりする。醫學生でもあるまいに、脈を見たがる。或學校の如きは、八十五%の少女がこれに悩まされてゐるといふ。ところがかういふことをするのは、學生に少い。どうしても四十から五十

がらみの中老に多い。けれども學生必ずしも、しないといふわけでない。或少女學生の如きはさういふ場合は、學生の多勢ゐる方へ行くのが安全だといふ。それだけまだ青年の方が、頼母しい證據であるかも知れない。とにかく、さういふ時、私達はどうしたらよいでせう？ といふ質問を受ける。亞米利加や英吉利の女性だつたら、

『貴方はなにをなさる——』

と満座の中でやつつける。いかに四五十の男でも、多少の廉恥心が残つてをれば、次の停留所で降りなければならない。けれども後が恐い。赤恥をかゝせた後は、どんな目にあふかわからない、といふのが日本のお嬢さんである。西洋人ならその場でやつつける。私の聞いた話によると、船の中で、或青年が若い娘さんの寢室へ忍んだ。翌日、食堂で多勢の船客が集つた時、その娘さんが、

『皆さん、この船の中にある間は、みんな一家族のやうなものだ。お互に尊敬する義務を持つてゐる。こゝに尊敬出来ない人があつたならば、その人にはいかなる制裁を加へてもよい。昨

夜遅くなつて、私の部屋を襲つた男がある』

と發表した。それから後、その青年は船室へ閉籠つたまゝ、甲板にも出なかつたといふ。これだけのことが日本婦人に出来ないのは、後の意趣返しに恐いからである。

惜しいことには、日本は實に個人主義の國である。口を開けば英吉利の個人主義を誇るけれども、事實は決してさうでない。自分さへ安全なら、外のものは苦しんでもかまはないといふ主義である。これに反して個人主義といはれる國の人々は、一般に公德心が高く、人生はお互の共存生活であることを知つてゐる。故に、婦人に無禮を働くものがあると、傍の男が黙つてゐない。

『君、いゝ加減にしないか、冗談にもほどがある。——』

それでも肯かなければ、

『どうだ、止めないか、腕が飛ぶぞ』

といふところであるが、それは男でなければ出来ない。これがナイトの努めである。西洋の

話に出るナイトは、必ずお姫さんを助けてゐる。大蛇に苦しめられるお姫さん、泥棒に苛められるお姫さん、それを助けるのが騎士である。けれども、今の世のナイトは、大刀を持たなくてもよい。汽車の中、電車の中にも、大蛇のやうなのがたくさんゐる。それに喰はれやうとするお姫さんを助けるのは、どうしても士の任務だと思ふ。私なども年が若かつたら、方々でお姫さんを助けたい。思はぬよい人にブツ突かるかも知れない。

話は、大學の職業問題と違ふ方面へ飛び込んだが、大學で大學らしい教育を受けるといふことは、即ちソシアル・リスボンシビリティーを知ることである。それは單なる理窟のみでなく、ファシスチの如く、これを實地に行つて、いやしくも俺は大學教育を受けた士である。士である以上、これしきことは、社會に對する義務として努めてもらひたい。それがほんたうの大學の職務的使命だと思ふ。社會の安全と、社會の秩序とのために奉仕する心、これこそ、最も高尚なる職務といふものではないかと思ふ。

現代思想と印度

タゴール氏とガンジー氏

現代歐洲の思想を解剖しようとするには、どうしても、東洋の思想にも深く食入らなければならぬ。その意味において、私は先づ、印度に對する私の考へを述べて見たいと思ふ。

私は、ガンジー氏にもタゴール氏にも會つたことはない。タゴール氏が日本へ來られた時は二度とも東京にゐなかつたので、御親切に小石川の私の自宅まで見えられたけれども、お目にかゝることは出来なかつた。しかし氏の書かれたものは大分見た。大抵は英語で書かれたものだが、これに對して英國人は、

『文典を知らないで英語を書く、あの有色者が……』

といふやうな鋭い皮肉と冷罵を浴せ、一も二もなく非難的に批評する向が多いやうである。

しかしそれは、彼の精神及び人格をかれこれするのでなく、非難したいための非難とも見るこゝとが出来る。

タゴール氏は相當民族主義を主張する人である。私は同君のナショナリズムといふ本を、どういふ關係であつたか、版にする前に一度通讀してくれといふお話で、ジュネーヴにをつた時讀んだことがある。それによつて見ると、論鋒は大分鋭い。少し言ひ過ぎてゐるところがなかなかなと思つたからである。しかも彼の論鋒は、主として白哲人種殊に英國人に對して、鋭く向けてあつたから、英國人が彼の議論を喜ばないのは、無理がない。キリストさへ確になつたのである。しかもキリストは政治に關係しなかつた。タゴール氏は政治に關係しないとはいひながら、政治以上の立場から、話は政治に亘るのである。彼等が氏を喜ばないのは無理がない。けれども吾々は、さういふ動機から、氏を攻撃する議論をもつて、同氏を判斷する材料とするわけには行かない。

ガンジー氏については著述などタゴール氏ほどにはないけれども、親しくガンジー氏の家に

泊つたとか、氏の弟子なる印度人に會つたとか、ちやうど外國人が日本に来れば、必ず故大隈公のところ立寄つて、日本のグラランド・オールドマンを見て来たといふのが土産話になつてゐた如く、現今は英人であれ、米人であれ、佛人獨人伊太利人など、印度に行くほどのものは必ずガンジー氏を訪問して面會を乞ふのである。私は度々いふ通り永くジュネーヴをつた。ジュネーヴといへば、世界の往還にある立止りの茶屋みたいな處で、世界を廻らうといふやうな人は、大概ジュネーヴを訪ひ、國際聯盟に来る。國際聯盟に来れば、東洋といふ關係で、すゐぶん私を訪ねる人もある。だから私自身はガンジー氏に會はなくとも、ガンジー氏に會つた人の話は、何十人といふことなくまた聞きして、かういふ人ではなからうかといふ想像も、今は出來てゐる。そんな關係で、この二人に對しては、相當な程度に親しみと尊敬の念を持ち、好き機會でもあれば、親しくその膝下に教を乞ひたいといふくらゐの氣持を持つてゐる。

人口の飽滿せる印度

一體 印度といふ國は、思想と理想の國であつて、非常に深味のある國柄であるが、漫然と行つて見たのでは、さう思はれないだらうと思ふ。私は二十五六年前から、いくども招待を受けたことがあり、先達もグラマサマーチの百年記念會を開くについて、招待を受けたが、行くことは出來なかつた。故に、實際の印度は知らないわけである。書物や人の話によつて考へれば、印度といふ所は、それだけで一つの世界をなしてゐる。

とにかく四億の民衆がうよくしてをつて、スワーミング・ポピュレーションとでもいふか、そんな言葉が相應はしい。私は東北に生れて北海道に早く渡り、三十二歳まで東京の西を知らなかつた。その後初めて東海道を越え、四國へ渡つた。その時に熟々考へた。なるほど日本といふ所は人間の多い所だ。人間の有餘る所だと思つた。古い歴史的の日本を見て、一番私の印象に深かつたことは、馬の小さいのと人間の多いことである。私は東北にをつて大きな馬を見慣れ、北海道へ行つて人間の稀薄を知つてゐるので、四國などへ行くと、小さな馬や、うようよとしてゐる人間が目立つ。

この意味で印度も我に劣らない。メーヨーといふアメリカの婦人は、印度に對して面白い説を述べてゐる。頭のよい筆の達者な婦人であるが、五六年前比律賓に渡り、當時比律賓の總督をしてをつたウツド將軍の施政を讚美して、アメリカのレバブリカン・ドウワを非常に喜ばした。そんな關係で非常に名聲を博し、嬢の書いたものは、比律賓に關する著書の中では、最も信頼すべきものとなり、一躍比律賓に關するオーソリティーとなつた。そのくらゐ賢い婦人である。この婦人が印度へ行く前に、私の所へ立寄り、印度の歸りにも寄つて、

『かういふ本を書くが、外國人のことを書くについて、どういふ心がけが必要であらう』

といふやうに、いはゞ教を乞ひに來た。アメリカ人が日本人に對して、辭を低く教を乞ふなといふのは、頗る珍らしいことだが、様子を聞くと、南部の生れだといふ。それで呑込めた。この婦人だつたら、英吉利の貴族、皇族に對してなら格別、日本人には不作法である。そこでいろいろ話をする中に、この婦人の觀察の鋭いこと、頭のよいことなどほどわかつた。このメーヨー嬢が昨年春だつたか、一昨年の暮だつたか、『マザー・インディア』といふ本を出し

た。母印度——これが大へんなセンセーションを惹起した。素晴らしい賣高である。たゞ賣高ばかりでない。これについての批評が實に盛んであつた。單り米國のみならず、英吉利、佛蘭西から、日本の新聞も書いてゐた。

『マザー・インディア』——標題から推しても察せられる通り、印度では人間が多過ぎる。子を産む母が多過ぎる。宗教的の一種の教として、女性は八つ、九つ、十位で結婚する。早いものは九歳位で子を持ち、十二、十三位のお母さんはザラにある。子供が子供を生むわけで、あまりにも痛々しい。未熟な中に孕むのだから、出来る子供が悪いのは當り前である。故に天死する。生んでは殺し、生んでは殺す、あれほど悲惨なことはない。人口がいつでもギツチリして食糧がその人口の警戒線まで來てゐるのであるから、何か事があつて食物が足らないと、片ツ端から子供が天死する。この残酷な有様を詳しく書いたのが『マザー・インディア』である。

洵に詳し過ぎるほど詳しい。どうして婦人が、こんなに突込んだところまで書けたかと思ふくらゐで、房事に關するところなど、實に露骨である。子供が生れるまでの男と女の關係を説

明してゐる。筆が立ち過ぎるので、人によつては猥褻だとの評判を受けてゐるが、要點とするところは、印度がこの制度を棄てない限り、どんなに足掻いても救はれない。人間生活の最小限度に暮してをつて、ちよつと突けば倒れさうなところまで行つてゐる。随つて、公共の事なり、國家の事なり、己の生存以外の、高尚なことを考へる餘裕がないほど、人口が飽滿してゐる。故に經濟の立場からいつても、政治の方面からいつても、根本的の缺陷はこゝに根ざしてゐる、といふのがメーヨー嬢の主として説くところである。

印度は哲學の國

私は、この議論に肯かされるところも認めるし、大いに参考になることも書いてあるが、こればかりが印度ではない。書いてあることに嘘はないけれども、そればかりがほんたうではない。印度の國民の中には、外の方面もたくさんある。外の方面を少しも書かないで、その方面ばかりに觀察が向いてゐる。標題がマザー・インディアだから、一應もつともではあるが、マ

ザー・インディアのことは書いてない。哲學のことも書いてない。たゞ人口といふ立場からのみの觀察である。随つて、この本を見ると、印度といふ所は永劫に浮ばれない、絶望の國だといふ印象を受けるのである。しかも嬢は斷つて曰く、

『私のいふことに嘘はない。どこからこのことが出たかといふお尋があれば、一々その出所を示すことも出来るし、且つ筆者をも擧げることが出来る』

と附足してゐるのである。これに對してはいろいろな議論が出た。書物もたくさん出た。その中でも一番有名になつたものは、印度人の筆になるマザー・インディアである。これは印度の他の一面を論ずると共に、亞米利加の醜いところだけを拾ひ上げて、書き立てたものである。紐育の淫賣窟、市俄古の犯罪者、巾着切や拘摸の生活とその周圍、さういつた種類のものを一々漁つて材料を得、これが亞米利加の偽らざる相であると發表した。私はまだこの本を見ないが、それによると、亞米利加人はみな泥棒で、女はすべて淫賣だといふ風に思はれる。しかも著者の曰く、

『私の書いたことには些かも嘘はない。みんな據る所がある。聞きたい人があれば、いつでもその出所を示すであらう』

といつてゐる。ここが外國の事を書かうとするものの、心しなければならぬところで、むづかしい一面である。讀む方でも、これだけのことを考へておかなければならぬ。

さて、話は横道へ外れたが、ともかく近頃の印度研究では、マザー・インディアが一番有名である。これにはガンヂーのことも書いてある。ミス・メーヨーはガンヂーの所へも立寄つたらしく、その後私の所へ来た時、ガンヂーを批評して、

『自分は有名なガンヂーに對し、十分な尊敬と敬慕の心をもつて行つたが、會つて見れば、どうしてこの人にあんな勢力があるのか、案外に思つた』

と述べてゐる。これは恐らく嬢の飾りない觀察だつたのであらう。この觀察が當つてゐるかゐないか知らないが、昔からかういふ歌がある。

來て見ればさほどでもなし富士の山

釋迦や孔子もかくやあるらん

有りさうな見方である。この歌は大へん有名ではあるが、田舎武士が初めて江戸へ来た時分に、富士を見て、『あれが富士か——』といふ心持をそのまま三十一文字に並べたものらしい。これに反して或公家が、同じく京都から關東への途すがら、富士山へ登つて見た。すゐぶん骨折つて、五日も六日もかゝつて登つた。その時の歌に、

聞きしより思ひしよりも見しよりも

登りて高き山は富士の嶺

と詠んだ。これがほんたうらしいと私は思ふ。

『來て見ればさほどでもなし——』これはちよつと見たところである。登つたのではない。ほんたうに登つて見れば、

『聞きしより見しより勝る……』とならなければならぬ。

私は、人間を批判するのも、さういふものではないかと思ふ。ガンヂーのところへちよつと